

野々市市

長池ニシタンボ遺跡
長池カチジリ遺跡
横江古屋敷遺跡

2018

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

ながいけ
長池ニシタンボ遺跡
ながいけ
長池カチジリ遺跡
よこえ ふる やしき
横江古屋敷遺跡

2018

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は長池ニシタンボ遺跡、長池カチジリ遺跡、横江古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は野々市市長池地内である。
- 3 調査原因は、いずれも二級河川安原川 広域河川改修事業であり、同事業を所管する石川県土木部安原・高橋川工事事務所が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成25(2013)年度から公益財団法人）が石川県教育委員会から委託を受けて、平成21(2009)年度から平成29(2017)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部河川課が負担した。
- 6 現地調査は平成21、23、24、25年度に実施した。期間・面積・担当グループ・担当者は下記のとおりである。

（平成21年度）

長池ニシタンボ遺跡

期 間 平成21年4月15日～平成21年7月2日

面 積 850㎡

担当グループ 調査部県関係調査グループ

担当者 松山和彦(主幹)、稲葉浩一(嘱託)

（平成23年度）

横江古屋敷遺跡

期 間 平成23年5月30日～平成23年6月28日

面 積 880㎡

担当グループ 調査部特定事業調査グループ

担当者 北川晴夫(主幹)、白田義彦(専門員)、荒川真希子(嘱託)

長池カチジリ遺跡

期 間 平成23年6月28日～平成23年7月27日

面 積 560㎡

担当グループ 調査部特定事業調査グループ

担当者 北川晴夫(主幹)、白田義彦(専門員)、荒川真希子(嘱託)

（平成24年度）

長池カチジリ遺跡・長池ニシタンボ遺跡

期 間 平成24年7月2日～平成24年8月31日

面 積 長池カチジリ遺跡880㎡・長池ニシタンボ遺跡240㎡

担当グループ 調査部特定事業調査グループ

担当者 白田義彦(主幹)、中泉絵美子(嘱託)

（平成25年度）

長池ニシタンボ遺跡

期 間 平成25年4月23日～平成25年5月17日

面 積 430㎡

担当グループ 調査部県関係調査グループ

担当者 石田和彦(主幹)、清水晃太郎(嘱託)

- 7 出土品整理は平成25(2013)年度・同26(2014)年度に実施し、それぞれ公益財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部特定事業調査グループ・県関係調査グループが担当した。
- 8 報告書の原稿作成は平成27年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆は松山和彦(同グループリーダー)が行った。編集・刊行は平成29年度に実施し、編集は松山和彦(調査部特定事業グループリーダー)が行った。
- 9 調査には下記の機関・個人の協力を得た。
石川県土木部河川課、石川県土木部安原・高橋川工事事務所、野々市市教育委員会、大藤雅男、林茂久、(五十音順、敬略)
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真、観察表で対応する。

目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	3

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 長池ニシタンボ遺跡の調査

第1節 調査区の概要	9
第2節 層 序	9
第3節 遺 構	9
第4節 遺 物	12

第4章 長池カチジリ遺跡の調査

第1節 調査区の概要	49
第2節 遺 構	49
第3節 遺 物	51

第5章 横江古屋敷遺跡の調査

第1節 調査区の概要	67
第2節 遺 構	67
第3節 遺 物	68

第6章 まとめにかえて

第1節 今回の調査成果について	78
第2節 いわゆる外来系土器について	79

挿 図 目 次

第 1 図 調査区の位置 …………… 2	第 32 図 遺物実測図 17(S = 1/3) …………… 42
第 2 図 遺跡の位置 …………… 5	第 33 図 遺物実測図 18(S = 1/3) …………… 43
第 3 図 周辺の遺跡 …………… 7	第 34 図 遺物実測図 19(S = 1/3) …………… 44
第 4 図 長池周辺の古墳 …………… 8	第 35 図 遺物実測図 20(S = 1/3) …………… 45
第 5 図 長池ニシタンボ遺跡調査区全体図(1/300) … 17	第 36 図 遺物実測図 21(S = 1/3) …………… 46
第 6 図 長池ニシタンボ遺跡平成 21 年度調査区(1/150) … 18	第 37 図 遺物実測図 22(S = 1/3) …………… 47
第 7 図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図① SI2 平面図(S=1/100) … 19	第 38 図 遺物実測図 23(S = 1/3) …………… 48
第 8 図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図② SI3 平面図(S=1/80) … 20	第 39 図 長池カチジリ遺跡調査区全体図(1/300) … 53
第 9 図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図③ NR2 土層断面図(S=1/60) … 20	第 40 図 長池カチジリ遺跡調査区北部(1/150) … 54
第 10 図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図④ 溝土層断面図(S=1/60) … 21	第 41 図 長池カチジリ遺跡調査区南部(1/150) … 55
第 11 図 長池ニシタンボ遺跡平成 24 年度調査区(S = 1/100) … 22	第 42 図 長池カチジリ遺跡掘立柱建物①(1/80) … 56
第 12 図 長池ニシタンボ遺跡平成 25 年度調査区(S = 1/120) … 23	第 43 図 長池カチジリ遺跡掘立柱建物②(1/80) … 57
第 13 図 長池ニシタンボ遺跡(2013)遺構図①(S = 1/40) … 24	第 44 図 長池カチジリ遺跡(2011)遺構図①(S=1/40) … 58
第 14 図 長池ニシタンボ遺跡(2012)遺構図(S=1/40、1/60) … 25	第 45 図 長池カチジリ遺跡(2011)遺構図②(S=1/40) … 59
第 15 図 長池ニシタンボ遺跡(2013)遺構図②(S=1/60) … 25	第 46 図 長池カチジリ遺跡(2012)遺構図①(S=1/40) … 60
第 16 図 遺物実測図 1(S = 1/3) …………… 26	第 47 図 長池カチジリ遺跡(2012)遺構図②(S=1/40) … 61
第 17 図 遺物実測図 2(S = 1/3) …………… 27	第 48 図 遺物実測図 24(S = 1/3) …………… 62
第 18 図 遺物実測図 3(S = 1/3) …………… 28	第 49 図 遺物実測図 25(S = 1/3) …………… 63
第 19 図 遺物実測図 4(S = 1/3) …………… 29	第 50 図 遺物実測図 26(S = 1/3) …………… 64
第 20 図 遺物実測図 5(S = 1/3) …………… 30	第 51 図 遺物実測図 27(S = 1/3) …………… 65
第 21 図 遺物実測図 6(S = 1/3) …………… 31	第 52 図 遺物実測図 28(S = 1/3) …………… 66
第 22 図 遺物実測図 7(S = 1/3) …………… 32	第 53 図 横江古屋敷遺跡調査区全体図(1/250) … 69
第 23 図 遺物実測図 8(S = 1/3) …………… 33	第 54 図 横江古屋敷遺跡調査区北部(1/120) … 70
第 24 図 遺物実測図 9(S = 1/3) …………… 34	第 55 図 横江古屋敷遺跡調査区南部(1/120) … 71
第 25 図 遺物実測図 10(S = 1/3) …………… 35	第 56 図 横江古屋敷遺跡遺構図①(S = 1/40) … 72
第 26 図 遺物実測図 11(S = 1/3) …………… 36	第 57 図 横江古屋敷遺跡遺構図②(S = 1/40、1/60) … 73
第 27 図 遺物実測図 12(S = 1/3) …………… 37	第 58 図 横江古屋敷遺跡遺構図③(S = 1/40) … 74
第 28 図 遺物実測図 13(S = 1/3) …………… 38	第 59 図 横江古屋敷遺跡遺構図④(S = 1/40) … 75
第 29 図 遺物実測図 14(S = 1/3) …………… 39	第 60 図 横江古屋敷遺跡遺構図⑤(S = 1/60) … 76
第 30 図 遺物実測図 15(S = 1/3) …………… 40	第 61 図 遺物実測図 29(S = 1/3) …………… 77
第 31 図 遺物実測図 16(S = 1/3) …………… 41	第 62 図 外来系の土器(S = 1/4) …………… 80

表 目 次

第 1 表 調査・整理体制 …………… 4	第 7 表 長池カチジリ遺跡(2012)土器観察表 … 89
第 2 表 長池周辺の遺跡一覧 …………… 7	第 8 表 横江古屋敷遺跡土器観察表 …………… 91
第 3 表 長池ニシタンボ遺跡(2009)土器観察表 … 81	第 9 表 長池ニシタンボ遺跡(2009)石器観察表 … 92
第 4 表 長池ニシタンボ遺跡(2012)土器観察表 … 88	第 10 表 長池カチジリ遺跡(2012)石器観察表 … 92
第 5 表 長池ニシタンボ遺跡(2013)土器観察表 … 88	第 11 表 横江古屋敷遺跡石器観察表 …………… 92
第 6 表 長池カチジリ遺跡(2011)土器観察表 … 89	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本書で報告する長池ニシタンボ遺跡をはじめとする3遺跡は、手取川水系の安原川の流域に位置する。遺跡の周辺、とりわけ長池ニシタンボ遺跡付近は、昭和50年代の国道8号金沢バイパス開通以降、宅地開発が活発となり市街地化が進んだ。その一方で農業用水として長らく利用されてきた安原川は戦後も本格的な改修を経ることなく、住宅地の中を蛇行しつつ北に流れており、長池ニシタンボ遺跡西側ではクランク状に屈曲する幅の狭い流路部分がみられた。

かかる状況の下、石川県土木部の安原・高橋川工事事務所は、洪水を防ぎ、住宅や農地を水害から守る治水上の観点から、拡幅・直線化を主眼とする安原川の河川改修事業を計画した。しかし野々市市長池周辺の工事予定地付近には長池ニシタンボ遺跡・横江古屋敷遺跡など、民間開発事業(区画整理・事業所建設等)に伴いかつて地元市町教育委員会が発掘した埋蔵文化財包蔵地の存在が知られていた。

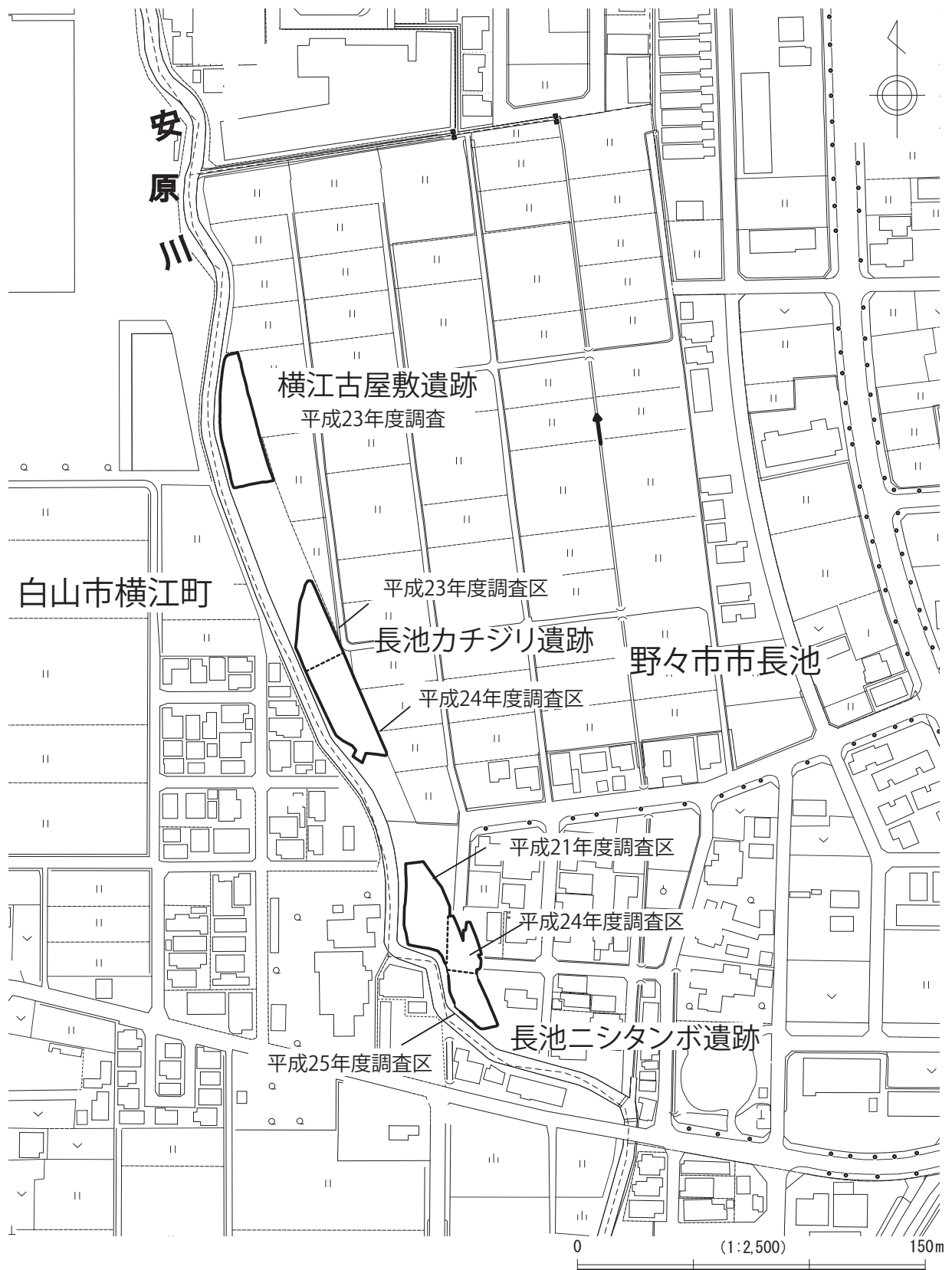
そこで石川県教育委員会文化財課(以下、県文化財課)と安原・高橋川工事事務所の両者が、「埋蔵文化財発掘調査等に関する協議会」等の場で協議を続け、用地買収・物件移転が済んだ箇所から順次、県文化財課が試掘による埋蔵文化財の確認を実施した。埋蔵文化財が確認された箇所については、安原・高橋川工事事務所が工事工程に基づき県文化財課に発掘調査を依頼し、依頼を受けた県教育委員会は財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成25年度から公益財団法人、以下県埋文センター)に委託して発掘調査を実施した。その結果、平成21・23・24・25年度の4ヶ年度にわたり、長池ニシタンボ、長池カチジリ、横江古屋敷の3遺跡が発掘調査されることとなった。

第2節 発掘作業の経過

平成21年度は長池ニシタンボ遺跡の発掘調査を実施した。4月中旬より準備を進め、4月28日に地元挨拶、5月11～13日に重機による表土掘削を実施した。5月14日に設置した現地の仮設建物に18日に機材を搬入し、翌日から作業員による作業を開始した。19・20日の両日で遺構検出を終え、21日から遺構掘削に着手、5月後半は主に弥生時代終末前後の遺物に恵まれたSD1を掘り進めた。続く6月前半は北端部のNR2(旧安原川河道)などの調査を行い、概ね掘削を終えた。6月18日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施、6月22日に県文化財課による調査終了確認の運びとなった。6月23・24日に重機により調査区を埋め戻し、7月2日に県文化財課と安原・高橋川工事事務所の担当者同席の下、現地を引き渡した。

平成23年度は横江古屋敷遺跡と長池カチジリ遺跡の発掘調査を実施した。まず横江古屋敷遺跡については、5月30日に仮設建物の駐車場への鉄板敷設を嚆矢に現地作業を開始し、引き続き6月2・3日に重機による表土除去に移り、6日から作業員による作業を開始した。6月7～9日には遺構検出、10～21日に遺構掘削を進め、24日には県文化財課と安原・高橋川工事事務所の担当者同席の下、掘削が終了したことを確認した。翌25日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施、6月27・28日に重機で調査区を埋め戻した。

長池カチジリ遺跡の発掘調査は6月28・29日の重機による表土掘削をもって開始された。6月30日から作業員による作業に移り、翌7月1日までは遺構検出、7月5日からは遺構掘削へと進んだ。



第1図 調査区の位置 (1/2,500)

7月13日の県文化財課担当者による掘削の終了確認を経て、翌14日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施、21日に重機により調査区を埋め戻した。その後順次撤収を進め、7月27日に県文化財課と安原・高橋川工事事務所の担当者同席の下、現地を引き渡した。

平成24年度は長池カチジリ遺跡と長池ニシタンボ遺跡の発掘調査を実施した。7月2日に現地調査に着手して以降、両遺跡並行の形で調査を進めた。長池カチジリ遺跡では7月4日から9日にわたる表土除去ののち、7月10・11日の遺構検出を経て、8月上旬にかけて遺構を掘り進めた。8月16・17日には調査区内で見つかった安原川の旧河道をトレンチ調査し、8月23日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。もう一方の長池ニシタンボ遺跡については最初にA区（東側）から着手し、7月10日に重機による表土除去、翌日に作業員による遺構検出を行い、7月18日に概ね遺構を掘り上げた。残るB区（西側）の調査は8月下旬で、8月20日に表土除去、翌日に遺構検出、その後8月23日まで遺構掘削を行い、24日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。同日、県文化財課が両遺跡の掘削が終了したことを確認し、8月27日から30日に重機で調査区を埋め戻した。8月31日に県文化財課と安原・高橋川工事事務所の担当者同席の下、現地を引き渡した。

平成25年度は長池ニシタンボ遺跡の発掘調査を実施した。4月18日に地元挨拶ののち、4月23日から重機による表土除去を開始し、26日まで行った。5月1日より作業員による作業に取り掛かり、5月2日に遺構検出を終えた。連休明けの5月7日から13日まで遺構掘削を進め、15日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後5月17日にかけて撤収を行った。

第3節 整理等作業の経過

以下の整理事業は県埋文センターが石川県教育委員会からの委託を受けて行ったものである。

平成25・26年度は出土品の整理(記名・分類・接合、遺物の実測・トレース、遺構図のトレース等)を実施した。平成25年度は平成21・23・24年度発掘調査出土品を対象に調査部特定事業調査グループが、また平成26年度は主に平成25年度発掘調査出土品を対象に調査部県関係調査グループが担当した。

平成27年度は報告書の原稿作成を実施した。担当は調査部県関係調査グループである。平成29年度に調査部特定事業調査グループが担当して報告書の編集・刊行を行った。

第1表 調査・整体系制

調査・整理年度	平成21年度	平成23年度	平成24年度
調査・整理主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 中西 吉明)	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 竹中 博康)	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
総括	黒崎 宰作 (専務理事)	浜崎 洋 (専務理事)	岡田 義彦 (専務理事)
事務	栗山 正文 (事務局長)	栗山 正文 (事務局長)	栗山 正文 (事務局長)
総務	釜親 利雄 (総務GL)	浅香 繁晴 (総務GL)	山口 登 (総務GL)
調査・整理	湯尻 修平 (所長) 三浦 純夫 (調査部長) 伊藤 雅文 (県関係調査GL)	三浦 純夫 (所長) 福島 正実 (調査部長) 浜崎 悟司 (特定事業調査GL)	三浦 純夫 (所長) 福島 正実 (調査部長) 浜崎 悟司 (特定事業調査GL)

調査・整理年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
調査・整理主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
総括	橋本 定則 (専務理事)	小崎 隆司 (専務理事)	柴田 政秋 (専務理事)
事務	栗山 正文 (事務局長)	栗山 正文 (事務局長)	釜親 利雄 (事務局長)
総務	山口 登 (総務GL)	山口 登 (総務GL)	長島 誠 (総務GL)
調査・整理	福島 正実 (所長) 藤田 邦雄 (調査部長) 土屋 宣雄 (特定事業調査GL)	福島 正実 (所長) 藤田 邦雄 (調査部長) 松山 和彦 (県関係調査GL)	福島 正実 (所長) 藤田 邦雄 (調査部長) 松山 和彦 (県関係調査GL)

調査・整理年度	平成29年度
調査・整理主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中 新太郎)
総括	柴田 政秋 (専務理事)
事務	釜親 利雄 (事務局長)
総務	横山 謙一 (総務GL)
調査・整理	藤田 邦雄 (所長) 垣内光次郎 (調査部長) 松山 和彦 (特定事業調査GL)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

長池ニシタンボ、長池カチジリ、横江古屋敷の3遺跡は野々市市の北西端を占める長池地内に所在する。この地区は西側で白山市横江町に、また北側で金沢市の上荒屋地区に接しており、3市の行政区画が交差する所である。なお白山市の字名「横江」を冠する横江古屋敷遺跡は、本体を安原川左岸の白山市横江町側に置くものである。本書で報告する地点はその南東端部、遺跡範囲が安原川を越え右岸（野々市市長池側）に延びる部分にあたる。

上記の3遺跡は白山を源とする県内最大の河川である手取川が形成した手取川扇状地の北部に位置する。手取川の流路は時代により変遷があったようで、平安時代頃までは白山市小川町付近にあった本流河口が近世には概ね現在の河口に切り替わっている。手取川南岸に位置したと考えられる古代の能美郡山下郷の遺称地・白山市の山島地区が近世には北岸の石川郡に包摂されていることもそれを物語る事例といえる。さて洪水等により度々流路の変遷が想定される手取川であるが、かつては扇状地内で枝分れし、多くの分流を派生させながら流れており、本書の主題となる3遺跡の傍らを北西に向かって流れる安原川もそのひとつである。因みに扇状地東部の分流群は幕末頃に「七ヶ用水」として再編成された。

上記3遺跡のうちで最も南（安原川の上流側）に位置するのが長池ニシタンボ遺跡である。発掘調査区の西側にみられた安原川のクランク状の屈曲部（改修前）を南限に北東に広がる。それに接するように北側に位置するのが長池カチジリ遺跡で、両遺跡はともに安原川右岸（東側）を占める。後者から数十mの間隙をおいて北西方向へ広がりを持つのが横江古屋敷遺跡である。先述のとおり、この遺跡の本体は安原川左岸（西側）の白山市横江町地内であるが、このたびの調査地は安原川を越えた右岸（東側）の野々市市長池の地内に含まれる。

3遺跡周辺の標高は10～12m程である。かつては一面の田園地帯であったが、南東500mにはJR北陸本線野々市駅が立地、東方約600mを国道8号金沢バイパスが南北に貫き、また横江古屋敷遺跡の北側を主要地方道金沢美川小松線が東西に走るなど、交通の便に恵まれた地であるため、周辺エリアでは農地を残しつつも市街地化が進んでいる。

第2節 歴史的環境

長池ニシタンボ遺跡をはじめとする3遺跡の周辺には、縄文時代から中近世までの遺跡が分布する。以下、時代別に概観する。縄文時代の代表的な遺跡としては御経塚遺跡(7)と新保本町チカモリ遺跡(34)がある。前者は北陸の縄文時代後晩期を代表する集落遺跡で、後者は環状木柱列の存在が認識さ



第2図 遺跡の位置

れる端緒となったことで著名である。その他では縄文時代晩期中屋サワ遺跡(23)をあげることができる。川跡からまとまって出土した土器・石器・漆塗木製品(鉢・飾り弓・腕輪ほか)・藍胎漆器など約700点が、工芸技術の水準を窺うことができる生活用具の組合せとして平成26年に国の重要文化財に指定された。

弥生時代中期の古い段階では、八田中ヒエモンダ遺跡(21)、矢木ジワリ遺跡(31)から条痕文系土器とともに古相を呈する櫛描文系土器が出土している。中期後半の資料は上荒屋遺跡(27)、横江古屋敷遺跡(3)から出土している。弥生時代後期以降、とりわけ後期後半から終末期を経て古墳時代前期初頭へと続く時期は、遺跡数が増加するとともに多数の建物から構成される集落遺跡がみられるようになる。因みに本書で報告する遺物の大半もこの時期の資料で占められる。五歩市遺跡(20)では50棟を超える竪穴建物が検出されており、大型の竪穴建物を中心に玉作りが行われていた状況が明らかになった。玉作りに関連した大型の竪穴建物は二日市イシバチ遺跡(8)や横江D遺跡(11)にも類例がある。長池周辺に目を転ずれば、「ツカダ地区」・「デト地区」からなる御経塚遺跡(7)、のちに古墳群形成の場ともなる御経塚シンデン遺跡(6)などが知られ、「デト地区」で見つかった竪穴建物は床面積約189㎡、外周溝も含めた占有面積が433㎡に及ぶ北陸最大級の規模を誇る。また後者の遺跡は建物に占める掘立柱建物の比率が高いことで注目され、その過半が布掘式によって占められている。古墳出現前夜の地域の胎動を理解する意味からも、広く当該期の集落動向を把握してゆく必要がある。なお、弥生時代の墳墓としては二日市イシバチ、三日市A(9)、横江古屋敷遺跡で方形周溝墓が確認されている。

古墳時代初頭にシンデン遺跡の集落が廃絶した場所には前方後方墳4基・方墳11基からなる御経塚シンデン古墳群が営まれる。また横江古屋敷遺跡でも古墳が出現する(第4図)。古墳時代前期の集落としては掘立柱建物を主体とする上荒屋遺跡があげられる。古墳時代後期以降、7世紀初頭を中心とする時期の集落形成は御経塚遺跡・御経塚シンデン遺跡でみられる。

古代では東大寺領横江庄の荘家跡に関連した白山市の横江荘遺跡(19)が著名であるが、上荒屋遺跡(27)から「東庄」と記した9世紀段階の墨書土器が大量に出土したことにより、横江庄の庄域の東側への広がりが明らかになった。「東庄」の管理施設と考えられる建物群は安原川水系の河道に設けられた船着場に隣接しており、日本海・琵琶湖水運を介した地子米の畿内への回漕において、内陸舟運が果たした役割を看取することができる。一方、陸上交通の面では近年、三日市A遺跡から古代北陸道やそれに関連すると推定される建物が見つまっている。

中世では長池ニシタンボ遺跡東方の長池キタノハシ遺跡(4)において、中世後期(室町～戦国時代)の掘立柱建物・井戸・竪穴状遺構が検出され、宅地・耕地やそれを分節する道・用水の配置等、集村の構造が良好な状態で確認できる事例として評価されている。

引用・参考文献

『野々市町史 資料編1』野々市町役場

『野々市町史 通史編』野々市町役場

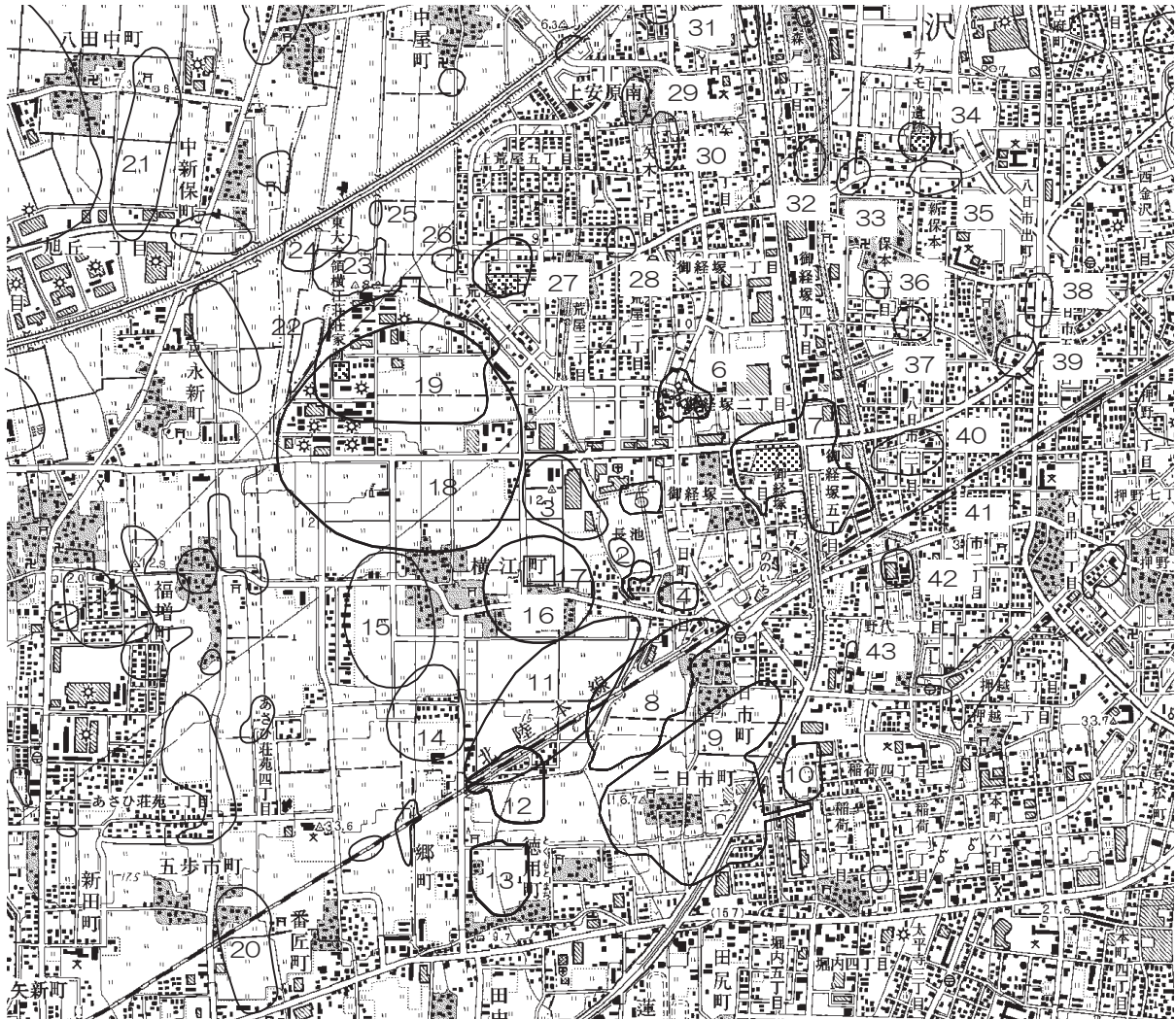
白田義彦、加藤克郎他『二日市イシバチ遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター 2012

『三日市A遺跡4』野々市町教育委員会

『横江古屋敷遺跡I』松任市教育委員会 1993

『横江古屋敷遺跡II』松任市教育委員会 1995

『上荒屋遺跡概報』金沢市教育委員会他 1991

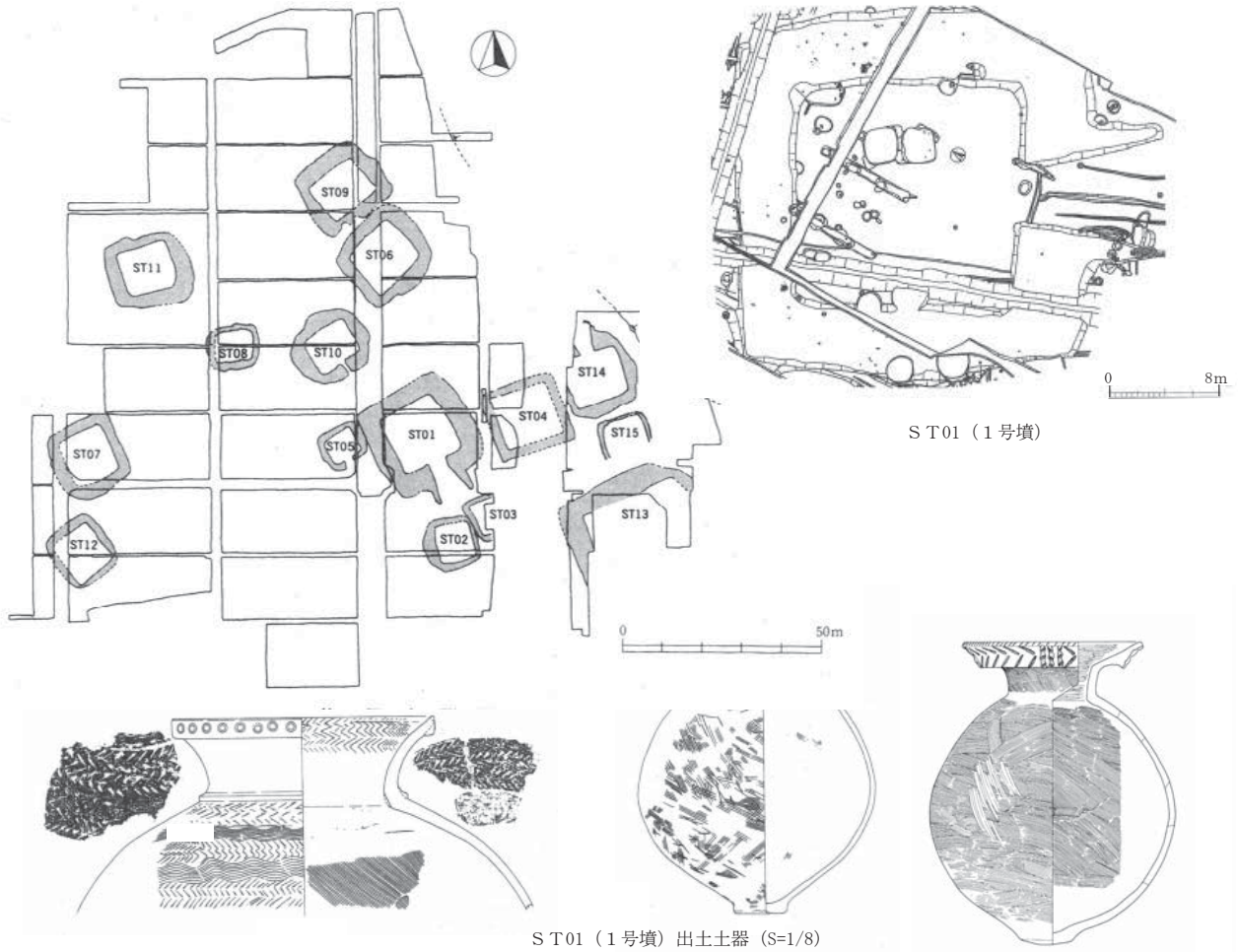


第3図 周辺の遺跡

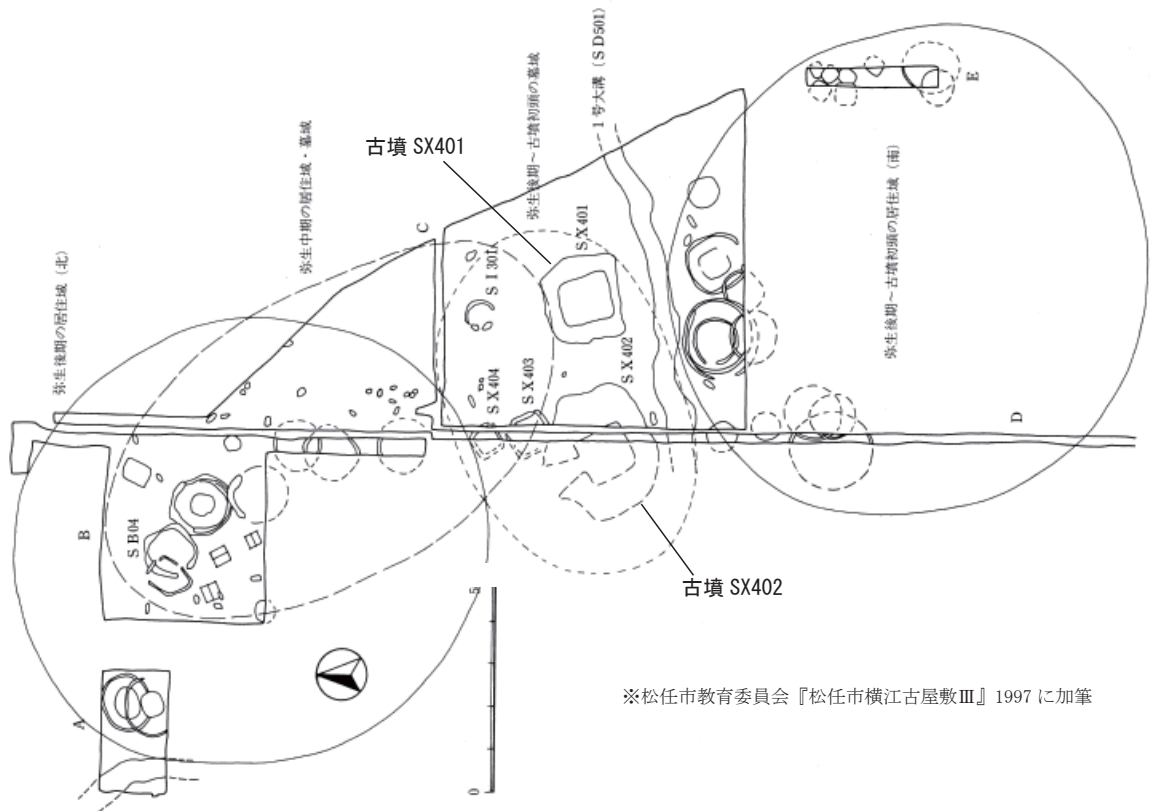
第2表 長池周辺の遺跡一覧

番号	県遺跡番号	名称	種別	時代	番号	県遺跡番号	名称	種別	時代
1	1200600	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	縄文～古墳、中世、近世	20	911100	五歩市遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
2	1206800	長池カチジリ遺跡	集落跡	弥生、古墳	21	913000	八田中ヒエモンダ遺跡	集落跡	縄文、弥生、中世、近世
3	914200	横江古屋敷遺跡	集落跡、古墳	弥生、古墳	22	120900	福増カワラダ遺跡	集落跡	弥生、古墳
	23				121100	中屋サワ遺跡	集落跡	縄文～古代	
4	1200700	長池キタノハシ遺跡	集落跡	弥生、中世、近世	24	121000	下福増B遺跡	集落跡	縄文～中世
					25	121200	中屋B遺跡	集落跡	縄文
5	121800 1200500	御経塚オッソ遺跡	集落跡	弥生、中世	26	121300	中屋東遺跡	集落跡	古代
					27	121600	上荒屋遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安
					28	121700	上荒屋住宅遺跡	散布地	弥生
6	1200100 1200200	御経塚シンデン遺跡	集落跡	縄文～古墳	29	122300	矢木ヒガシウラ遺跡	散布地	弥生、古墳
		御経塚シンデン古墳群	古墳	古墳					
7	1200300 1200400	御経塚経塚	経塚	不詳	30	122200	矢木マツノキダ遺跡	散布地	弥生、古墳
		御経塚遺跡	集落跡	縄文～近世	31	122500	矢木ジワリ遺跡	散布地	弥生、古墳
8	936100 1201700	二日市イシバチ遺跡	集落跡	縄文、弥生、奈良・平安、近世	32	122800	森戸住宅遺跡	散布地	縄文
					33	125600	新保本町西遺跡	集落跡	弥生、古墳
9	1202000	三日市A遺跡	集落跡	弥生、奈良・平安、中世	34	125700	新保本町チカモリ遺跡	集落跡	縄文
10	1202100	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	35	125800	新保本町東遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳
11	914100	横江D遺跡	集落跡	弥生、中世	36	125900	新保本町ツカダ遺跡	散布地	弥生
					37	126000	新保本町南遺跡	散布地	中世
12	936200 1201800	郷クボタ遺跡	集落跡	弥生、奈良・平安、中世	38	125500	八日市ヤスマル遺跡	集落跡	縄文、弥生、奈良・平安
13	1201900	徳用クヤダ遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	39	125400	八日市サカイマツ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
14	913600	横江ゴクラク寺遺跡	散布地・寺院	縄文、中世	40	125300	八日市B遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
15	914000	横江C遺跡	散布地	古墳	41	125200	八日市D遺跡	集落跡	弥生、奈良・平安、中世
16	913600	横江B遺跡	集落	奈良・平安					
17	913700	横江館跡	館跡	中世	42	121900 1200800	野代遺跡	散布地	縄文
18	913800	横江A遺跡	散布地	縄文、弥生	43	1200900	野代オバナヤシキ遺跡	散布地	不詳
19	913500	横江荘遺跡	荘園	古代					

第2節 歴史的環境



野々市市御経塚シンデン古墳群 ※『野々市町史 資料編1』から引用した原図を改変



白山市 横江古屋敷遺跡の古墳

第4図 長池周辺の古墳

第3章 長池ニシタンボ遺跡の調査

第1節 調査区の概要

第1章で触れたとおり、改修前の安原川右岸において、下流側から平成21・24・25年度の3次にわたる発掘調査を実施している(第1図)。主たる年代は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての時期(I期)と、中世後半から近世前半にかけての時期(II期)とに大別できる。

I期では3棟の竪穴建物をあげることができる。SI1(平成25年度調査区)・SI2・3(同21年度調査区)である。このうち竪穴の掘り込みが確認できたのはSI1にみであるが、残る2者についても御経塚遺跡デト地区の著名な事例から類推して、元来竪穴の掘り込みを有していた可能性が高く竪穴建物に分類した。その他、建物としては平成24年度調査区東部で検出された掘立柱建物SB1があげられ、当該期に含まれる可能性がある。溝としてはSI2の周堤外周溝と繋がるSD1が特筆すべきものであり、上層から出土した弥生時代終末期頃の資料は本報告の遺物で多くのウェイトを占める。

II期では平成21年度調査区を南北に貫流するNR1があげられる。農業用水と考えられ、SD4が合流するやや下流で小水路SD5を分岐する。また、平成21年度調査区北西端部(NR2)と平成24年度調査区南西端部(SD23)、加えて平成25年度調査区の西部において安原川の旧河道がみられ、出土した近世前期の肥前陶器などから、少なくともその時期までは機能していたと考えられる。

第2節 層 序

平成21年度調査区西壁(埋め戻し時)と平成24年度調査区東壁で観察しており、後者については第14図に示した。盛土下に厚さ40cm程の耕作土がみられ、さらに15cm余りの明褐色砂質土、10cm前後の弥生土器を含む褐色粘質土を挟んで、暗黄褐色シルト(遺構検出面となるベース)に至る。

ベース面の標高は、平成21年度調査区北端(SI3北半付近)が水田造成の削平の影響で11.85m前後と一段低いものの、同調査区で概ね12.0m～12.1m、平成24年度調査区では12.15cm前後、同25年度は12.2～12.3mと南へ行くに従い漸次高くなる傾向にある

第3節 遺 構

1. 竪 穴 建 物

SI1(第13図) 平成25年度調査区北東で検出。隅丸長方形プランで2本主柱である。北東側が調査区外となるためすべてを検出できていないが、長径6.1m、短径4.1m程に復元できる。主柱穴1・2とも径30cm余りの略円形で、床面から深さはそれぞれ56cm・59cm、柱間は252cmを測る。主柱穴1に接して2箇所焼土がみられるが、焼け方は弱い。その他、床面には60×50cmの略円形の土坑1基が伴い、深さは40cm余りである。

検出時に覆土上面に炭化物が集中する部分(覆土1"層)が放射状にみられ、建物骨組みが焼け落ちた際に生じたものとも想定されたが、炭化物量が少なくその可能性は低いと考えられる。竪穴の覆土は北側で20cm余り、南側で30cm前後と比較的浅く、その断面観察から3層は貼床であり生活面はその上面とすべきと推察される。

SI2 (第7図) 平成21年度調査区南部で検出。竪穴の掘り込みは確認できなかったが、4本主柱で、壁周溝と考えられるSD12と周堤外周溝SD3によって構成される。竪穴建物とした理由は前記のとおり。主柱穴のうち確認できたのはP9・P13の2基で、1基の底部がNR1(中世以降の用水路)の壁でかろうじて確認されるほか、残る1基は完全に失われてしまっている。P13は深さ24cmと56cmの2段掘りで、下段部は径約20cmである。P9は深さ40cm弱、NR1にかかる柱穴は同じく68cmを測る。主柱穴を結ぶラインは3.6×3.8mのほぼ正方形に復元できる。SX3・4とした深さ数cmの炭化物を多量に含む浅い窪みについては床面の汚れと推定される。

壁周溝SD12は主柱穴に囲まれた範囲の南側から西側・北側をめくり、NR1を越えSD5西側まで確認できる。幅20cm、深さは5～10cmを標準とする。これに囲まれた範囲は一辺約8mの隅丸方形に復元でき、床面積は50㎡を超える。またSD3はSD1に発し、SD12の外側約3mを円形状にめぐり、約6m離れた地点で再びSD1に繋がる。この溝も含めた円の直径は14.5mに及び、占地面积は165㎡に及ぶ。幅は60cmを標準とし、深さは20～30cm前後である。後述するSI3を構成するSD10と切り合い、それに先行することが判明している。また北部では3条に枝分かれする部分がみられ、一部掘り直しが行われたようである。なお、この溝の南東部で土器がまとまって出土する箇所があり、この建物が営まれた年代を窺う資料といえる。この建物の存続期間にはSD1はSD3からの排水を受ける溝としての機能を有していたと考えられる。

SI3 (第8図) 平成21年度調査区北部で検出。竪穴の掘り込みは確認できなかったが、4本主柱に周堤外周溝と推定されるSD10が伴う。SI2に類似した構造を想定し竪穴建物と措定する。SD10の西側にあるSD11も本竪穴に関連する可能性があるが断定はできない。

まず、主柱穴と考えられるのがP21・P25・P28・P29の4基である。深さは66・27・57・36cmと幅がある。これらを結ぶラインは一辺が265cm前後の正方形となる。このラインの北側は水田造成時の削平に伴う十数cmの段差がみられる。

周堤外周溝と推定されるSD10は幅60～100cm、深さは概ね30～40cmで、主柱穴に囲まれた範囲の西側から南側をめぐる。主柱穴を結ぶラインからの距離は4m前後である。南側では前記のSI2の周堤外周溝SD3と重複する部分がみられる。切り合いはSD3が古く、SD10が新しい。このように周堤外周溝の一部を共有する両建物の居住者は、血縁を含め有機的な社会関係にある可能性が高いと考えられる。なお、調査区外並びに失われた部分を復元して考えればSD10は一辺12m程の隅丸方形にめぐると推定され、この溝も含めた占地面积はSD3内側に比して狭い。

2. 掘立柱建物

SB1 (第11図) 平成24年度調査区東側で検出されている。P33(深さ35cm、以下数値のみ)とP58(32cm)を結ぶラインが西辺で、その中間の1穴(32cm)を挟んで柱間は2間である。北辺ではP33から東に1間分(もう1穴は43cm)が、また南辺ではP58から東に2間分(2穴は26cm、39cm)が確認でき、2×2間以上になる。溝SD17はあるいはこの建物に関連したものかもしれない。柱間は90cmを標準とするが、南東の一部では120cmとやや長い。柱間の不揃いに加え北辺と南辺が平行しないなど、建物の認定に問題が残る。

3. 土 坑

平成24年度調査区で4基(SK1～4)、平成25年度調査区で3基(SK5～7)が確認されている。SK1は直径約110cmの略円形で深さ29cm、SK3も直径約90cmの略円形で深さ10cmと浅い。SK2は

SD21を切る形で東壁際において検出されている。全形は楕円形と推定され、幅約70cmで長さは80cm以上である。底部には複数の段が伴い、最も深い箇所では深さ42cmを測る。その南に平行するように平面が長方形のSK4がみられる。幅約50cmで長さは140cm以上、深さは20cm弱である。

SK5はおよそ80×90cmの方形で深さは15cm程である。北東の張り出し部に小穴P67が伴う。SK6は長さ120cm前後で幅30cm余りの逆L字状を呈し、深さは10cm程である。底部に複数の小さな穴がみられる。全体に不整な感がある。SK7は100×90cmの寸詰まりな楕円形状を呈し、深さは30cm程である。覆土から弥生時代のものとみられる。

4. 溝・川跡

平成21年度調査区の溝・川跡（第6～10図） 溝・河道17条を検出した。先述のとおりSD12はSI2の壁周溝、SD3は同じく周堤外周溝、SD7・13・15はSD3が北部で3条に枝分かれする箇所に付せられた名称である。また、SD10はSI3の堤外周溝と考えられるものである。

上記を除く弥生時代終末頃（I期）と考えられるものから触れたい。SD1は調査区西南端付近で西からの流れを大きく北に転じ、そこから長さ約20mにわたって調査されている。幅1.5mを標準とし、深さは70～80cm程である。埋没間際の最上層において弥生時代終末期の土器がまとまって出土している。上層（暗灰褐色粘質土系統）からもやはり多くの土器が出土している。この溝は周堤外周溝SD3の排水先となっており、下層（第3層以下）の段階ではある程度流水があったと考えられる。SD2はSD3に南東からのびる溝である。切り合いではSD3よりも新しい。延長3m分を確認しており、溝幅は20～30cm、深さは10cm足らずである。SD8・9もSD3の北東部に接続する。前者は幅80cm弱、深さは25cm前後で、部分的な検出に留まる。後者はおよそ幅2mで延長3m分を確認している、深さ10cmと浅く、形状も不定形で、覆土は地山質を多く含む粘質土で占められる。弧状を呈するSD11はSI3西方で6m分を確認している。幅は60～120cmと南に行くに従い太くなる。深さは10～15cmと浅く、南端はSD14に続く。SD14は幅30～40cm、深さ15cm余りの弧を描きつつ東西に走る溝で、切り合いからSD11に先行する。東端はSD3に連結しており、それとの関連が想定できる。

次に中世後期～近世前期（II期）の溝では幅約3mで調査区を南北に縦断して流れるNR1があげられる。水田に引水する農業用水と考えられ、24m分が調査されている。北部では深さ60～70cmであるが、南部ではそれより浅い。調査区南部ではこれにSD4・6が東から合流する。SD4は幅130cm前後、深さ20cm余りで、上流側は平成24年度調査区にのびる。部分的検出に留まるSD6は幅約1m、深さ約30cmの規模である。またSD4の合流点の北約1mの地点でSD5がNR1から分流する。分流後1m余り東に進んで後、ほぼ直角に折れ曲がりNR1と約1mの間隔で平行し、北をめざして流れる。幅約50cm、深さ30cm程で、形状等からNR1から取水する小規模な水路と考えられる。その他、当該期の安原川と考えられるNR2がある。たちわり調査の結果、110cm程で川底に達した。川幅は5m以上である。蛇行するかつての安原川の一部と考えられ、上流は平成24年度調査区南西のSD23につながると可能性が高い。これが正しければ、NR1が旧安原川から取水しているとの想定も成り立ち、NR2（蛇行する自然河川）→NR1（基幹的な用水路）→SD5（小規模水路）という用水系統が復元される。なお、NR1の主軸は真北からやや東に振れるN-7°-Eあるが、この方位については近接する長池キタノハシ遺跡で検出された中世後期の村落のそれとの関連を検討する必要がある。

平成24年度調査区の溝・川跡（第11、14図） 平成21年度調査区からのびるSD4はII期、SD8はI期に属するもの、SD23（深さ68cm）は同じくNR2と一連のものと考えられる。SD21とそれから分岐するSD16は主たる部分で幅30cm程、深さ10cm未満である。平成21年度調査区のSD2から東に断続的

にのびる部分と判断すればI期である可能性が高い。形状が共通するSD17も同じグループか。深さ10cm余りのSD18からは少量の弥生土器が出土しているが、この時期と確定するには至らない。

平成25年度調査区の溝・川跡(第12、15図) SI1の南側で直線的に走るSD24・25が検出されており、両者は直交する。ともに両壁が立つ箱掘状を呈する。土層断面から埋没が進んだ段階でSD24が掘り直されたことがわかるが、主軸方向からほぼ同時期の所産と考えて大過なからう。SD24の主軸方向はN-20°-Eである。SD24・25の幅はそれぞれ70cm、80cm、深さは30cm、15~20cmである。覆土からはI・II期とも異なるようであり、その中間の時期に位置付けるのも一案であろうか。また、調査区の西側のほとんどはNR1、SD23から続く安原川の旧河道であり、NR1から出土した肥前陶器から近世前期までは機能していたと考えられる。たちわり調査の結果、深さは60cm弱であった。

第4節 遺物

1. 平成21年度調査区出土土器

ピット出土の土器(第16図1) P15から壺口縁部1が出土している。口縁端部に直立する面を作り出し、櫛状具で刺突し綾杉文を施す。東海地方の「柳ヶ坪型壺」の系譜を引くもので古墳時代初頭以降に位置付けられる。

SD1上層土器集中の土器(第16図2~第20図79) SD1の最上層で土器が集中する箇所がみられた。まとめて廃棄された感が強い一群である。その部分については「SD1上層土器集中」として取上げた。出土状況については写真図版3を参照いただきたい。

鉢としては椀形の体部に短い脚が伴う2と、甕の胴部下半と共通する形状で底部に孔を有する3~5の2者があり、後者は蒸し器としての機能が想定される。底部の穿孔はいずれも焼成前に行われている。6も鉢の底部である。

7~18として器台・高杯を一括した。7・8は口縁部を短く屈曲させる器台で、後者の口縁部には擬凹線、脚部には円形の透かし孔が伴う。前者は脚上部が細くしまる形状である。全形が窺え、ミガキ調整が卓越する。高杯10・12は杯底部が平坦なものである。10の脚部も12同様に脚裾部が大きく広がる形状と想定される。高杯9の杯部は退化した有段鉢形といえ、杯底部に丸みがみられる。脚部はハの字状に開き、脚裾部で屈曲しない。9・10とも杯上半部が大きく開く形状では共通する。その他、13~15のように柱状部が棒状となるものも含まれる。

19~71は甕である。主体を占めるのは月影式系統の有段口縁のもので、19~38など、外面に擬凹線をめぐらすものが多数を占め、口縁端部は尖縁のものが目立つ。一方、39~56など、無文のものも一定量含まれる。有段口縁の内面に指頭圧痕が残る例がみられるが、23・39のように2段となる例もある。有段口縁下端の屈曲については24・25のように弛緩した例もみられる。25の肩部外面には波状文が施されている。

それ以外の甕としては口縁端部に面取りを施す57があげられる。中能登町徳前C遺跡で多くみられるタイプである。また口縁下部が突出する58や有段口縁の中位で屈曲する59は、他の無文の有段口縁のともとは趣きを異にする。61は口縁部が受口状となる。胴部にヨコハケが卓越する45についてもやや特異な印象を受ける。60では筒状の口縁部の内外面にハケ調整が施される。

なお甕胴部のプロポーションとしては28・32・33・38・44・54など、球胴状のものが一定量含まれ、50のように寸胴のものもみられる。

72は蓋で、天井中央に孔がみられる。

73～79は壺である。77は無文の有段口縁、筒状の口縁部を有する76は上部を屈曲させ、口縁帯を作り出している。擬凹線がめぐる有段口縁で、球胴・有台の78は製作技法的には甕と変わるところはないが、胴外面にミガキが施されることから壺に分類した。小型の73～75はいずれも内外面に密にミガキ調整が施され、小さな底部の外面が凹面となる。73は口縁部下端を突出させることで有段口縁風に仕上げられており、74の口縁は直線的にのびる。大型壺79の内底面には密にハケ調整が施されている。

SD1上層の土器(第21図80～第24図186) 前記の土器集中の遺物を取上げたのちも上層の覆土中にはかなりの量の土器が含まれていた。ただ、土器集中とした部分とは異なり、概して小片が多く、接合後も全形を窺える資料には恵まれない。土器集中として取上げた遺物と上層として取上げた遺物の間には廃棄の先後関係があるとも考えられるが、出土状況からそれを過大に評価することには躊躇せざるを得ない。

80～83・138は鉢と考えられるものである。小型で口縁部が緩く屈曲する80では体部外面にタテ方向のハケが施される。口縁部はヨコナデされる。81は体部が直立する。82はいわゆる有段鉢で、体部内面ではケズリが、その他ではミガキが施される。83は壺底部である可能性も残る。有段口縁で小型の138では口縁内外・胴外面にミガキがみられる。

84～96では高杯・器台類を一括した。84では外反しつつ長くのびる器受部に細目で棒状の脚部が伴う。85は結合器台の一部である。87は器台、88も形状からそう考えられる。内外面に赤彩が施される90は口縁端部が水平にのびる。高杯の口縁部か。有孔の脚部92では外面に赤彩が施される。91・95は脚裾部上端に擬凹線が走る。前者ではキザミもみられる。

97～178(138を除く)は甕である。有段口縁のものが主流を占め、口縁部に擬凹線を施すもの、無文のもの2者が見られる点は前記の「土器集中」と同じ。ただし、106・108・111・113・123・132・144・153・154・156・158など、口縁部が直立するものが目立ち、土器集中に比して口縁部の外反の度合いが低い印象を受ける。有段口縁以外では、165～170など、口縁端部をヨコナデにより面取りする甕がみられる。前記の57と同様、中能登町徳前C遺跡の古墳時代初頭の溝で卓越するタイプである。山陰系については確認できない。

179～186は壺である。180・182は口縁部をミガキ調整する有段口縁の壺、やはり口縁部にミガキを施す181は口縁内面に屈曲はみられず、有段口縁風とすべきものである。186は大型壺の底部、184には把手の基部とみられる貼付部が伴う。

SD1上層下部の土器(第25図187～203) 上層下部、より正確には覆土下層の上面で検出された一群である。187～191は高杯である。外面と杯部内面に赤彩が施された187は脚の柱状部が中実であり、脚裾部にハケ調整を残す。189は大ぶりで杯上部が外反しながら長くのびる。杯底部付近には有段鉢形の名残ともいべき屈曲がみられるが、内底面はかなり平坦である。

192～200は甕である。ほぼ有段口縁で占められるといえるが、197では口縁部内面での屈曲はみられず、199ではそれが弱い。

201～203は壺である。201・203は直線的に開く長めの口縁部を有するもので、後者からは胴部上半内面を除く部位にハケ調整が施され、底部外周にケズリが伴うことが知られる。また203の口縁部には横位の「W」状の記号文がみられる。202は以上の両者より頸部が短く、口縁部が内湾する特徴を有する。口縁部でのハケ調整も顕著ではない。

SD1下層の土器(第26図204～第30図271) 下層から出土したものではあるが、別掲の観察表で示したとおり、遺物整理の結果、上層より上位からの出土資料と接合した例が多く見受けられ、遺物取り

上げの前提となった分層を過度に評価することが難しい状況にある。

204・205は鉢である。前者は形状的には大型倒杯型の製塩土器に近似するが、底径5cm前後と小ぶりである。後者は有段鉢で、製作技法は甕と通有である。

206～216として器台・高杯を一括した。206・207は器台の器受部で内外面にミガキ調整が施されている。口縁部が屈曲して立ち上がる形状において共通する。208～212は高杯の杯部であり、内外面がミガキ調整される。208・209は口縁部が大きく開きながら立ち上がるもので、口縁部下端に稜を伴う。大ぶりの後者では口縁端部が水平にのび、やはり大ぶりの210も端部に外側に傾斜する面がみられる。211は杯部が有段鉢形をなし、口縁部下端に稜がみられる。212の杯底部は平坦である。214～216は有孔の脚部である。214・216は柱状部が筒状を呈し、前者ではそこから脚裾部が大きく開き、後者の脚裾部は有段となる。215は杯底部から脚端部に向けてゆるやかに開く形状である。なお216は外面に赤彩が施されている。

217～261は甕である。217はミニチュア土器で、弛緩した有段口縁に擬凹線が走る。胴部外面にハケ調整はみられない。口縁部形態のわかる218～254はほぼ有段口縁によって占められる。229・231・232・239・241など、擬凹線を伴うものには口縁端部が尖縁となるものが目立つ傾向にある。またその一群を中心に口縁部無文のものも含め、口縁内面に指頭圧痕を残すものが一定量見受けられる。口縁部無文のものには口縁部が内傾し、大きく肩が張る形状の245、口縁部下端の屈曲が弛緩した感のある252などがみられる。228の肩部には櫛状具による刺突が伴い、また255のそれは押し引き状に施されている。237・256の肩部には櫛描波状文がみられる。

262～271は壺である。271は算盤玉状の胴部に細長い頸部が伴う。とりわけ胴部外面では丁寧なミガキがみられるが、赤彩は確認できない。262～265は筒状の口縁部が緩く外反するもので、262・263は内外面がハケ調整、265はナデ調整の口縁部上部が垂直に立ち上がる。264も口縁部の内外にハケ調整がみられるが、その外面上部は1条の横走りする沈線を挟んで、ナデ調整となる。胴部外面では主にハケ調整、その内面では主にケズリが観察される。前記の201・203と同類の壺といえるが、それに比して口径・胴部最大径が大きく、どっしりとした安定感が感じられる。269は外面にミガキがみられる球形の胴部から口縁部が外反しながら開き、口縁端部のみがつまみあげられたように短く内傾する。267は有段口縁で外面全体にミガキが施される。同じく有段口縁の266もミガキ調整らしき箇所が観察されることから壺に含めた。球形の胴部の外面全体に右下がりのハケ調整がみられる270には有段口縁風の口縁部がみられるが、口縁下端外面の稜が明瞭なのに比して内面の屈曲は不明瞭である。胴部内面にはケズリがみられ、胴部の製作では甕と共通する部分が多い。外面に櫛状具による刺突が残る268はここで壺に含めたが、器種を断定することはできない。

SD1の土器(第30図272～274) SD1出土資料のうち出土層位を特定できないものを一括する。274は天井部が中凹みとなる蓋で、つまみ部を除く外面と内面底部付近にハケ調整が施されている。272・273は有段口縁の甕で、口縁部下半に擬凹線がみられるとともに内面に指頭圧痕が残る。口縁部が直立する前者では口縁端部が丸縁となり、外反する後者ではそれが尖縁となる。

SD3の土器(第31図275～第32図305) SD3は竪穴建物の周堤外周溝と考えられるもので、直径14.5mの円形にめぐり、両端はSD1につながる。土器については器種別に図示したが、延長40m以上に及ぶ溝における出土箇所は275～280が北部、281～283が北西部、284～287が北東部、288～293が南部、残る294～305が南東部からの出土である。以下、器種ごとに記す。

284・289は鉢である。後者は体部が単純に開く形状のミニチュア土器で内面にはミガキ調整がみられる。内傾する体部に短く外反する口縁部が伴う前者は把手付きの鉢である。

281・288・290・294～296は器台・高杯である。281は器受部が横に開く形状の器台、288は杯部が有段鉢形となる大ぶりの高杯である。290・294・296は高杯の脚部で、いずれも外面にミガキ調整が施される。295はゆるやかに開く脚裾部、296は有段となる脚裾部上部に擬凹線がめぐり、その下には2孔一対の透かし孔が穿たれる。294では棒状部外面のヨコ方向のミガキが特徴的であり、有孔の脚部290柱状部内面の中空部が著しく狭い。

275～278・282・283・285・286・291～293・297～303は甕である。口縁部が受口状で、肩部の張りがみられない293を除きいずれも有段口縁のものによって占められる。擬凹線を伴うものでは口縁部が直立ぎみの282・291・292・297～299、緩く外反する276・302、端部尖縁の口縁が大きく外反する277・278の別がみられる。胴部のプロポーションでは、278・297～299など、判明する例では球胴が目立つ。なお275は口縁端部の外面側を肥厚させ口縁帯を作り出す。口縁部無文のものでも、直立ぎみのもの、ゆるやかに開くものの別があるようである。なお、図上復元された286の器高はもう少し低い可能性がある。

280・287・304・305は壺である。304では偏球形の胴部に短い頸部が伴い端部に外傾する面が作り出されている。287は有段口縁風、280では口縁端部にほぼ直立する面があり、そこに綾杉状の文様がめぐり、P15出土の1と共通する特徴といえる。残る305は赤彩が施された寸つまりの球形の胴部で、外面全体に密なミガキ調整がみられる。279は小型壺の蓋であろうか。

SD7の土器(第33図306) 内外面ともに丁寧に磨かれた椀形の鉢306が出土している。

SD9周辺出土の土器(第33図307) 擬凹線を伴う直立する有段口縁の甕307が出土している。内面に指頭圧痕が残る。

SD10出土の土器(第33図308～312) SD10はSI3の周堤外周溝と考えられる溝である。308は結合器台、309は小型の高杯であろうか。310～312は甕で、無文の有段口縁の310は口縁下端に稜がみられるほか、口唇付近が小さく外反する。311は擬凹線を伴う長めの有段口縁を有し、その端部は尖縁である。312は底部。

SD11出土の土器(第33図313～321) 313は結合器台、314は大きな円形の透かしを有する小型器台である。315は口縁端部に外傾する面を伴う甕で、口縁部下端に稜をもつ316と同様に口縁上半が開く。317～320は有段口縁の甕で、擬凹線の有無にかかわらずいずれも端部が尖縁である。321は背の低い脚部である。

SD13出土の土器(第33図322) 322は擬凹線がめぐり有段口縁の甕である。

SD15出土の土器(第33図323) 323は口縁下端が突出する甕で、その稜より上位は強いヨコナデが施される。

調査区東壁付近の土器(第33図324) 324は擬凹線のみられる有段口縁の甕で、尖縁で口唇付近が外反する。

調査区北部出土の土器(第33図325) 325は台付甕の底部付近である。SI3北部の水田造成で削平された部分からの出土。SI3に関連した遺物の可能性がある。

NR1出土の土器(第33図326～第34図329) 326・327は珠洲焼の播鉢である。前者の口縁端部の内傾する面には波状文が施される。内面に卸し目を有する后者の胎土はキメが粗い。328は瀬戸産と考えられる瓶子で外面に灰釉が残り、329は肥前磁器の染付碗である。

NR2出土の土器(第34図330・331) とともに近世前期の肥前陶器で330の内面見込み部に砂目が残り、同部分が蛇の目状に釉剥ぎされた331は鉄絵が施される。

2. 平成21年度調査区出土石器

打製石斧(第34図332～第35図336) 332・334がSD1上層から、333・336がSD3のそれぞれ北西部・南東部から、335がNR1から出土している。全形のわかる資料では短冊(撥)形で片面に大きく自然面を残す332と分銅形でほとんど自然面が残らない333の2者がみられる。

砥石(第35図337～341) SD14から337・339が、SD11からは338が、また340がNR1、341(軽石)がSD1上層から出土している。

敲石類(第35図342～第36図348) 348(SD15出土)を除き、他はSD1から出土している。いずれも円礫を素材としており、表裏両面、側面、端面に敲打痕がみられる。とりわけ343の両端のそれが顕著である。また、343では全面的に、342・346では一部で磨痕が加わる。347では焼け焦げ部分がみられる。比較的大型で扁平な348については台石的な機能が考えられる。

3. 平成24年度調査区出土資料

SK1出土の土器(第37図349～353) 349は有段口縁で丸みを帯びた胴部がミガキ調整される鉢である。350は口縁が屈曲して短く立ち上がる器台の器受部である。351・352は有段口縁の下半に擬凹線をめぐらす甕で、ともに口縁端部は丸縁となる。353は壺に伴う脚部と考えられる。

SD4出土の土器(第37図354・355) 354は鉢等に付属する把手部分である。355は無文の有段口縁をもつ甕である。なお、SD4は中世後半以降の溝である。

SD8出土の土器(第37図356～358) 356は杯底部から屈曲した口縁部が長くのびる高杯で、内外面にミガキ調整がみられる。357も高杯で脚裾部が大きく開く。358は短い有段口縁の甕で頸部をめぐるヨコハケが特徴的である。胴部は球胴となる。

SD21出土の土器(第37図359・360) ともに有段口縁の甕で、前者の口縁部は無文、後者では擬凹線がみられる。前者の端部は丸縁、後者のそれは尖縁である。

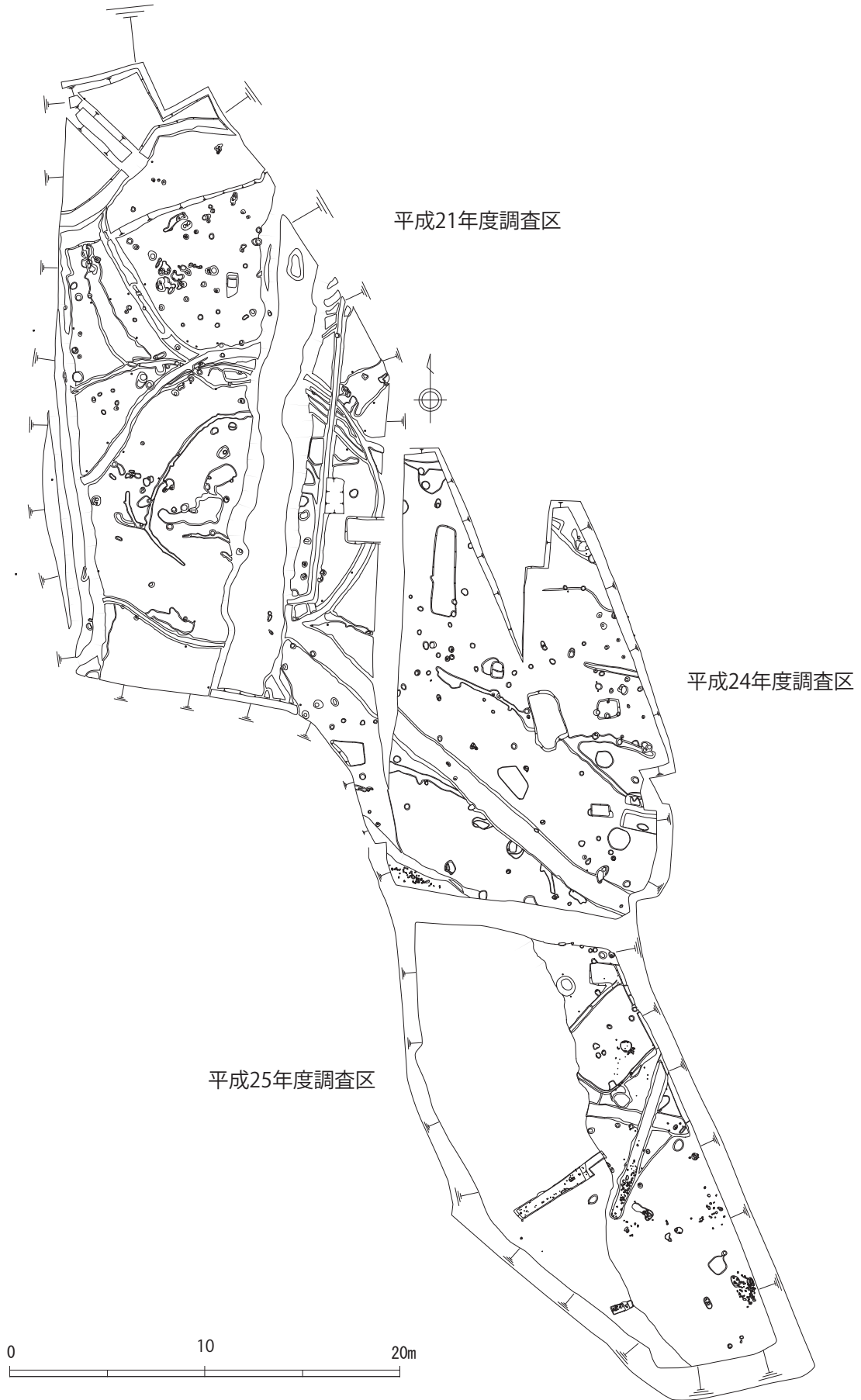
その他の土器(第37図361) 361は頸部が筒状となる大型の壺と考えられ、口縁端部の幅広の面に擬凹線がめぐる。出土地点は不明。

4. 平成25年度調査区出土資料

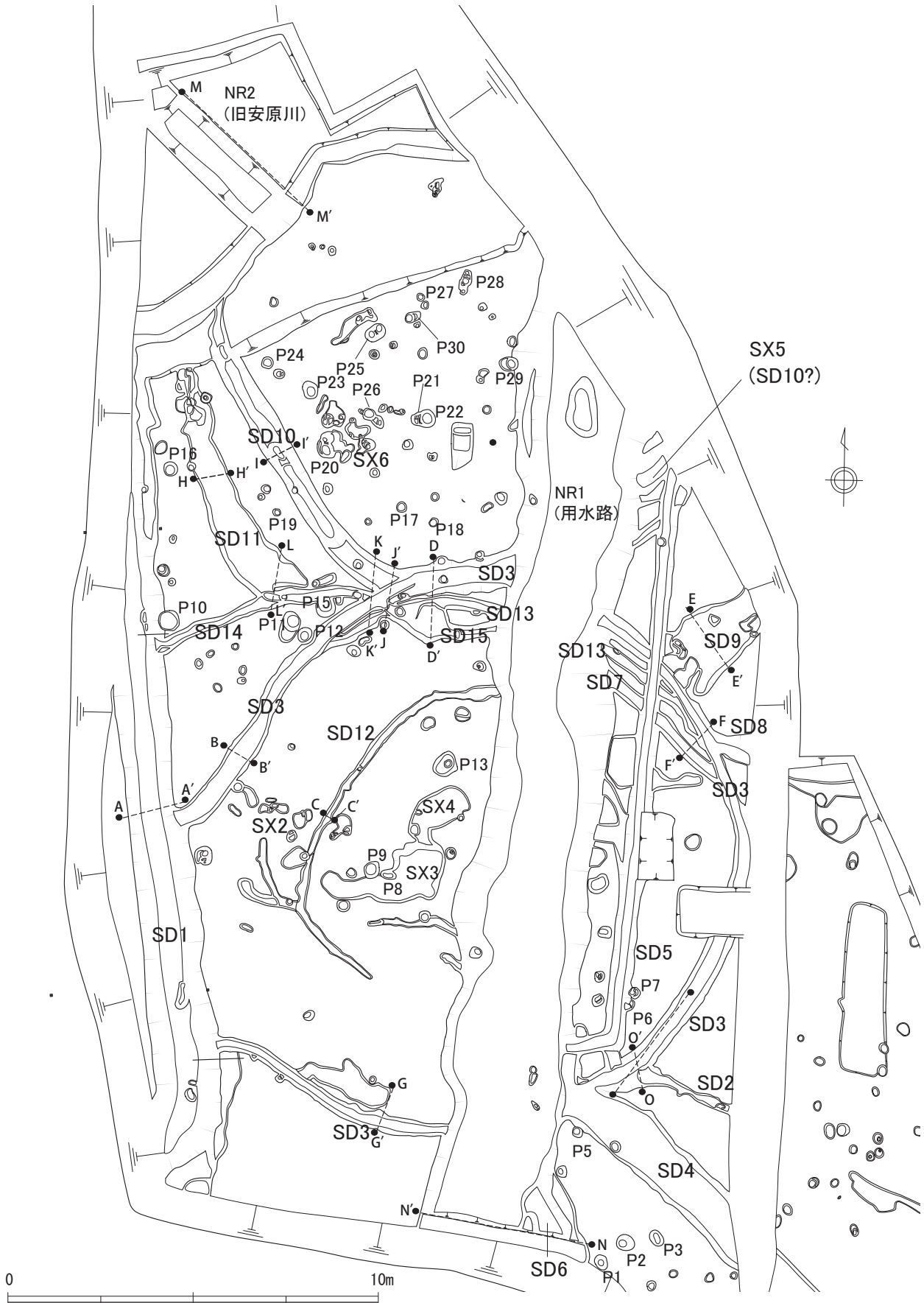
SHI出土の土器(第38図362～375) 362は縄文土器の口縁部である。363は端部に擬凹線をめぐらす器台の口縁部、364・365は高杯類の脚裾部で、前者は横S字状をなす連続渦文のスタンプ文で飾られる。366～371は有段口縁の甕で、擬凹線の有無の別がある。いずれも口縁部は短めで、端部は丸縁、内面の指頭圧痕はみられない。372は口縁端部を上下に拡張して面を作り出し、そこに擬凹線を加える。373～375は底部で、375は穿孔されている。368・369は覆土下層からの出土。

SK6出土の土器(第38図376) 376は外面にミガキがみられる高杯の脚部である。

その他の土器(第38図377) 遺構検出時に擬凹線を施す有段口縁の甕377が得られている。



第5図 長池ニシタンボ遺跡調査区全体図 (1/300)

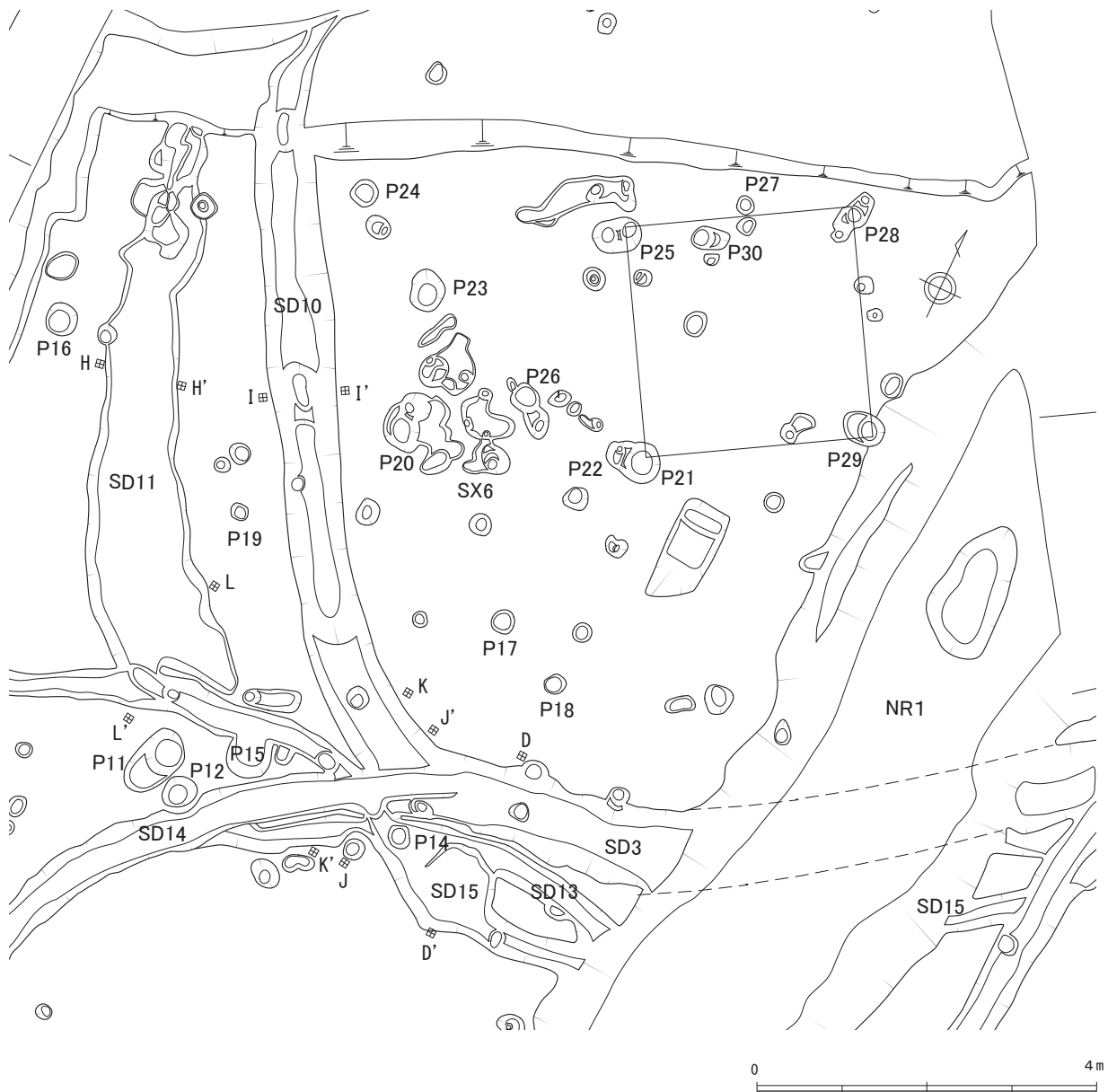


第6図 長池ニシタンボ遺跡平成21年度調査区(1/150)

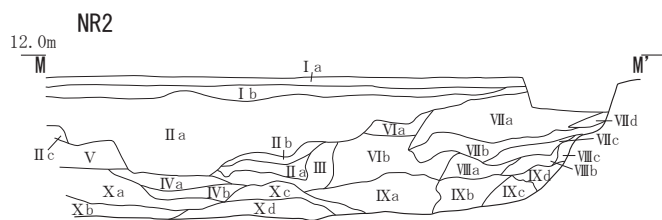


S12平面図 (S = 1/100)

第7図 長池ニシタンボ遺跡 (2009) 遺構図①



第8図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図② SI03平面図(S=1/80)

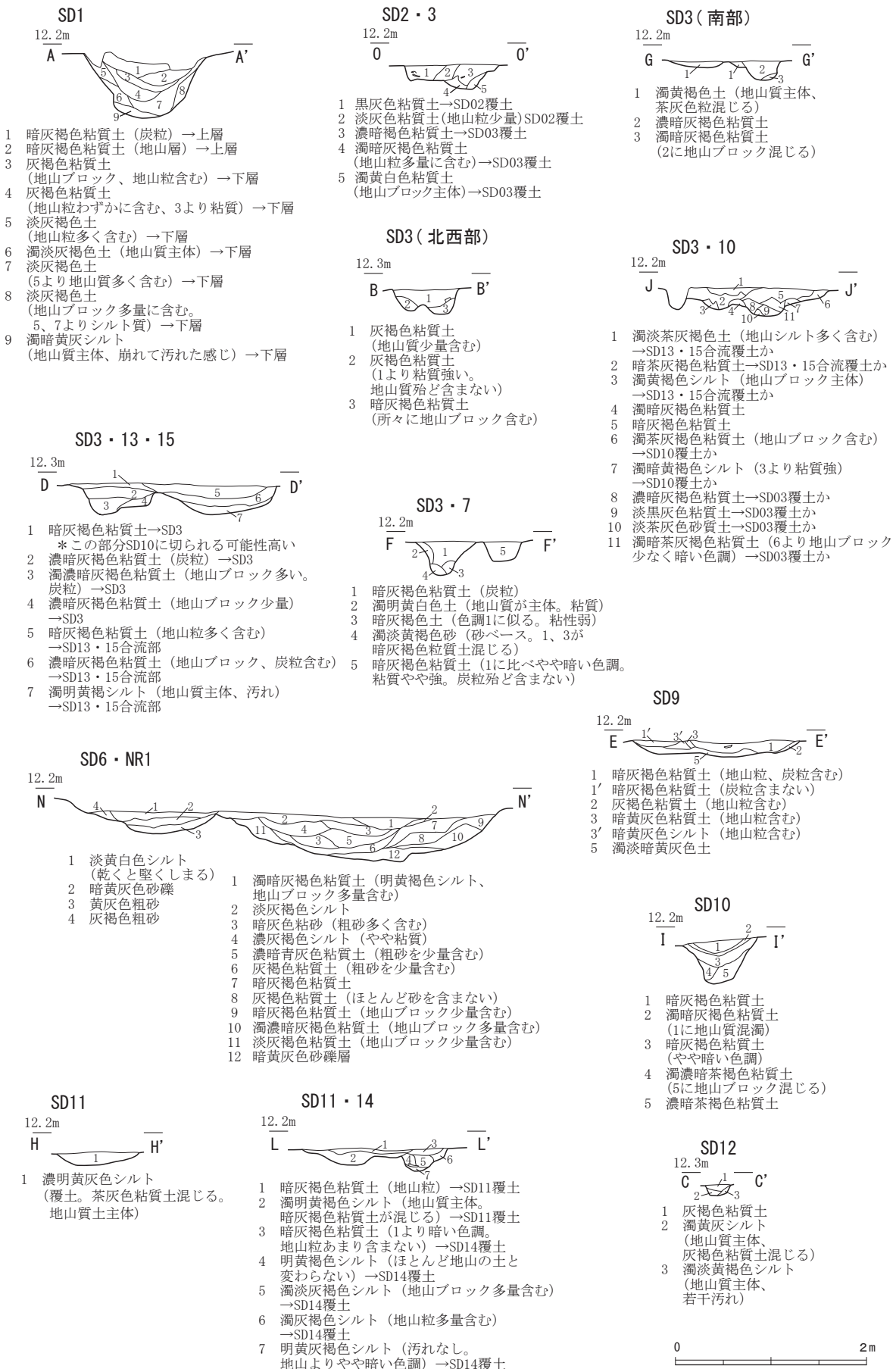


- I a 青灰色シルト(水田床土、鉄分沈着)
- I b 青灰色シルト(鉄分なし)
- II a 濁暗灰色粘質土(埋め戻し土。暗灰褐粘質土<弥生包含層系>・明黄褐色シルトブロック<地山系>多く含む)
- II b 灰褐色粘質砂(埋め戻し土。明黄褐色シルトブロック少量含む)
- II c 濁淡茶褐色粘質土(埋め戻し土。明黄褐色シルトブロック少量含む)
- III 暗灰色粘質土
- IV a 濁淡灰粘質砂(粗砂。明黄褐色シルトブロック混じる)
- IV b 灰色粘質土(下端にうすく粗砂)
- V 淡黄灰色シルト
- VI a 淡茶灰色シルト
- VI b 淡茶灰色粘質土

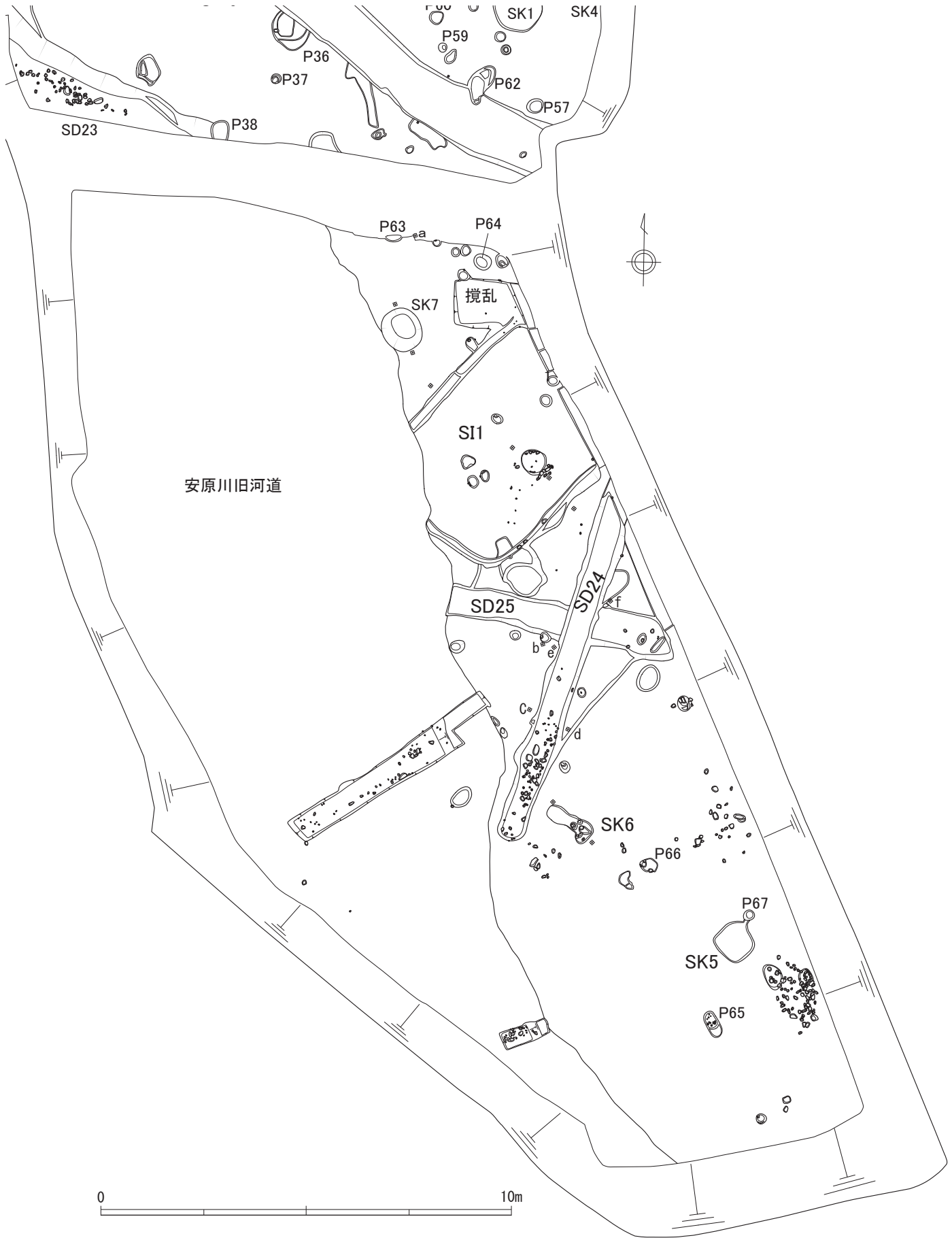
- VII a 淡黄灰色粗砂(ベージュの色調)
- VII b 淡黄灰色粗砂(少し粘質)
- VII c 淡黄灰色粗砂(やや粗粒。明黄褐色シルトブロック含む)
- VII d 濁暗灰褐色粘質土(明黄褐色シルトブロック含む)
- VIII a 濃暗茶灰色粘質土(やや砂質)
- VIII b 濃暗灰褐色粘質土(崩落した包含層。弥生土器含む)
- VIII c 濁明黄褐色粘質土(崩落した地山の再堆積)
- IX a 淡黄灰色砂(灰色の粘質土含む。木の枝含む)
- IX b 濁暗灰色粘質土(明黄褐色シルトブロック<地山ブロック>を多量に含む)
- IX c 濁明黄褐色粘砂(崩落した地山の再堆積)
- IX d 明黄褐色細砂(混じりけなし)
- X a 灰色粘質土
- X b 暗灰色粘質土
- X c 暗灰白色粘質土
- X d 暗青灰色粘質土

RN2土層断面図(S=1/60)

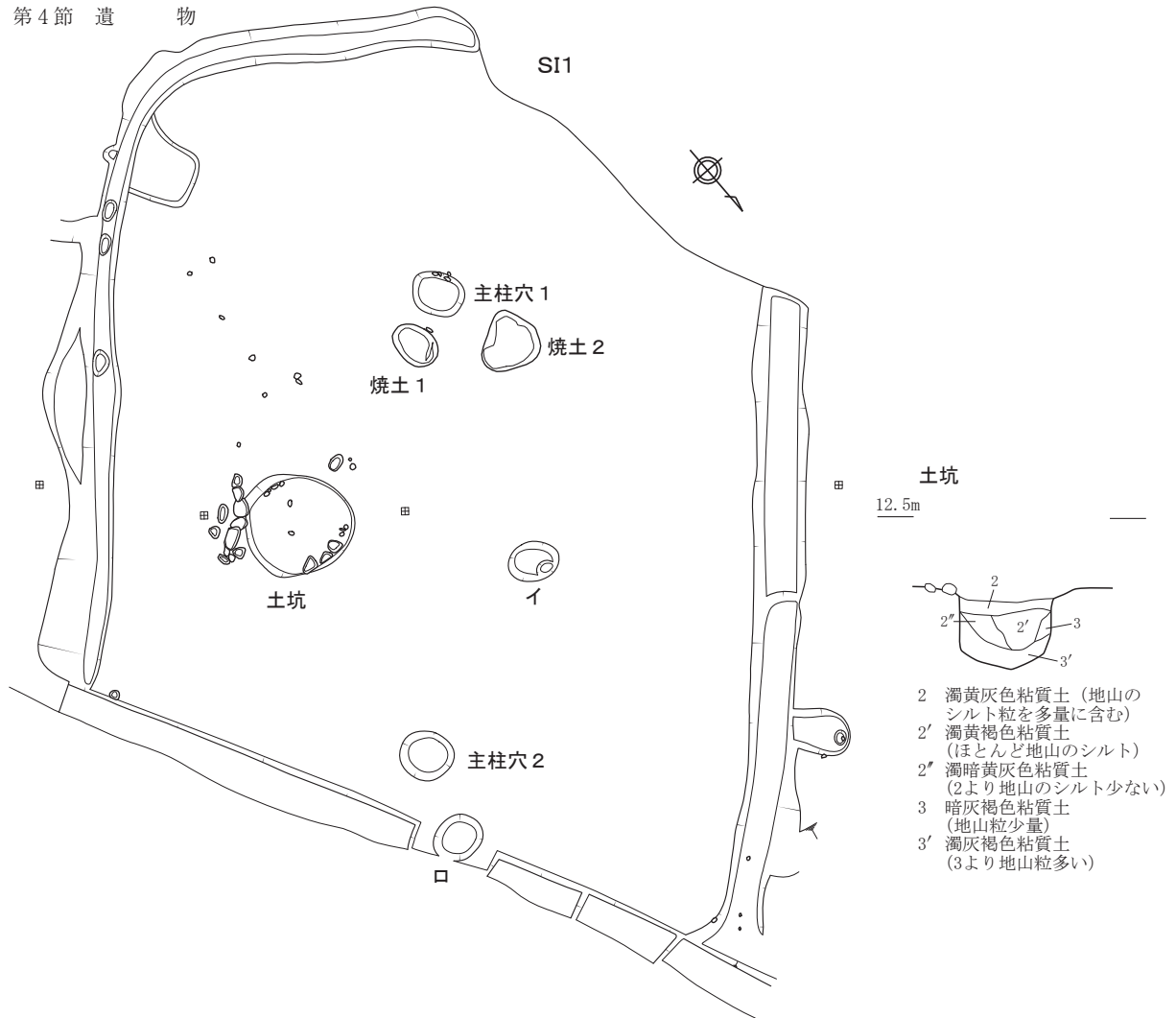
第9図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構図③



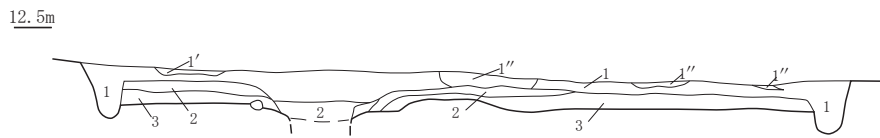
第10図 長池ニシタンボ遺跡(2009)遺構④ 溝土層断面図(S = 1/60)



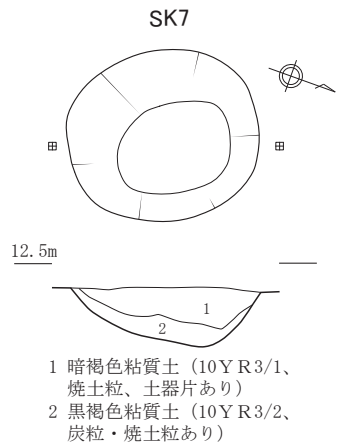
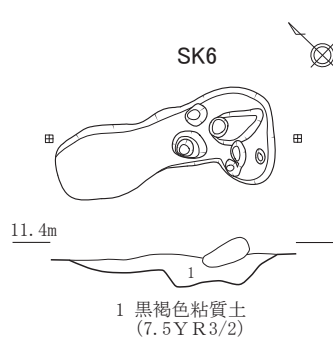
第12図 長池ニシタンボ遺跡平成25年度調査区(1/120)



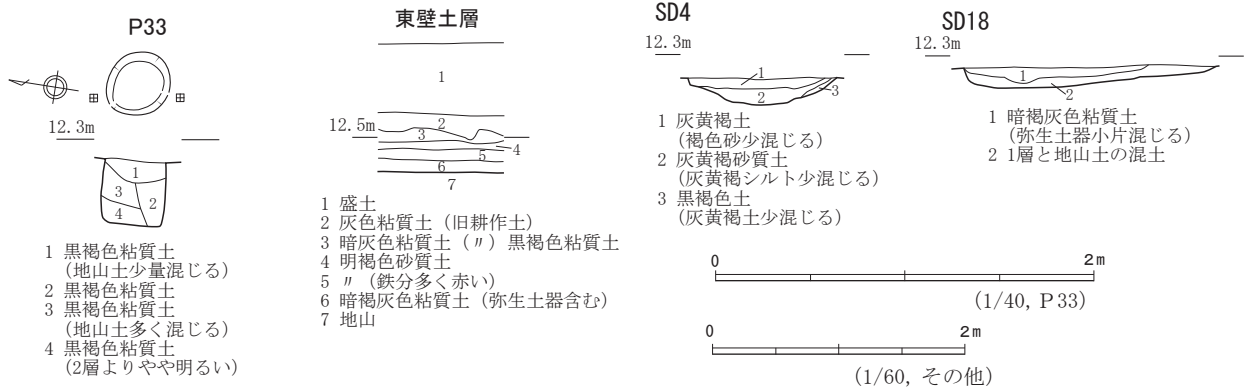
- 土坑
12.5m
-
- 2 濁黄灰色粘質土 (地山のシルト粒を多量に含む)
 - 2' 濁黄褐色粘質土 (ほとんど地山のシルト)
 - 2'' 濁暗黄灰色粘質土 (2より地山のシルト少ない)
 - 3 暗灰褐色粘質土 (地山粒少量)
 - 3' 濁灰褐色粘質土 (3より地山粒多い)



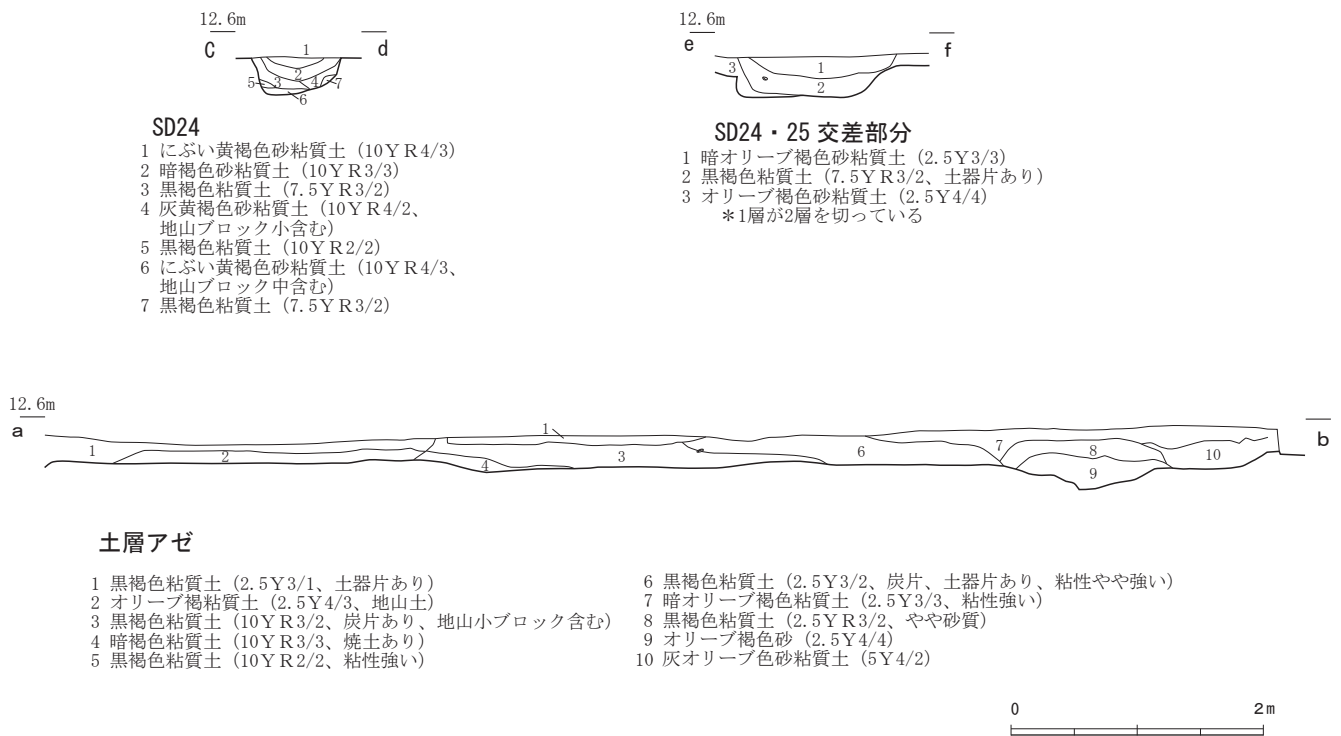
- 1 暗茶灰色粘質土 (炭化物多、焼土粒若干)
 - 1' 濁茶灰色粘質土 (地山のシルト多く混じる)
 - 2 濁黄灰色粘質土 (地山のシルト粒を多量に含む)
 - 1'' 褐茶灰色粘質土 (炭化物多量)
 - 3 暗灰褐色粘質土 (地山粒少量)
- *2は貼床の可能性あり



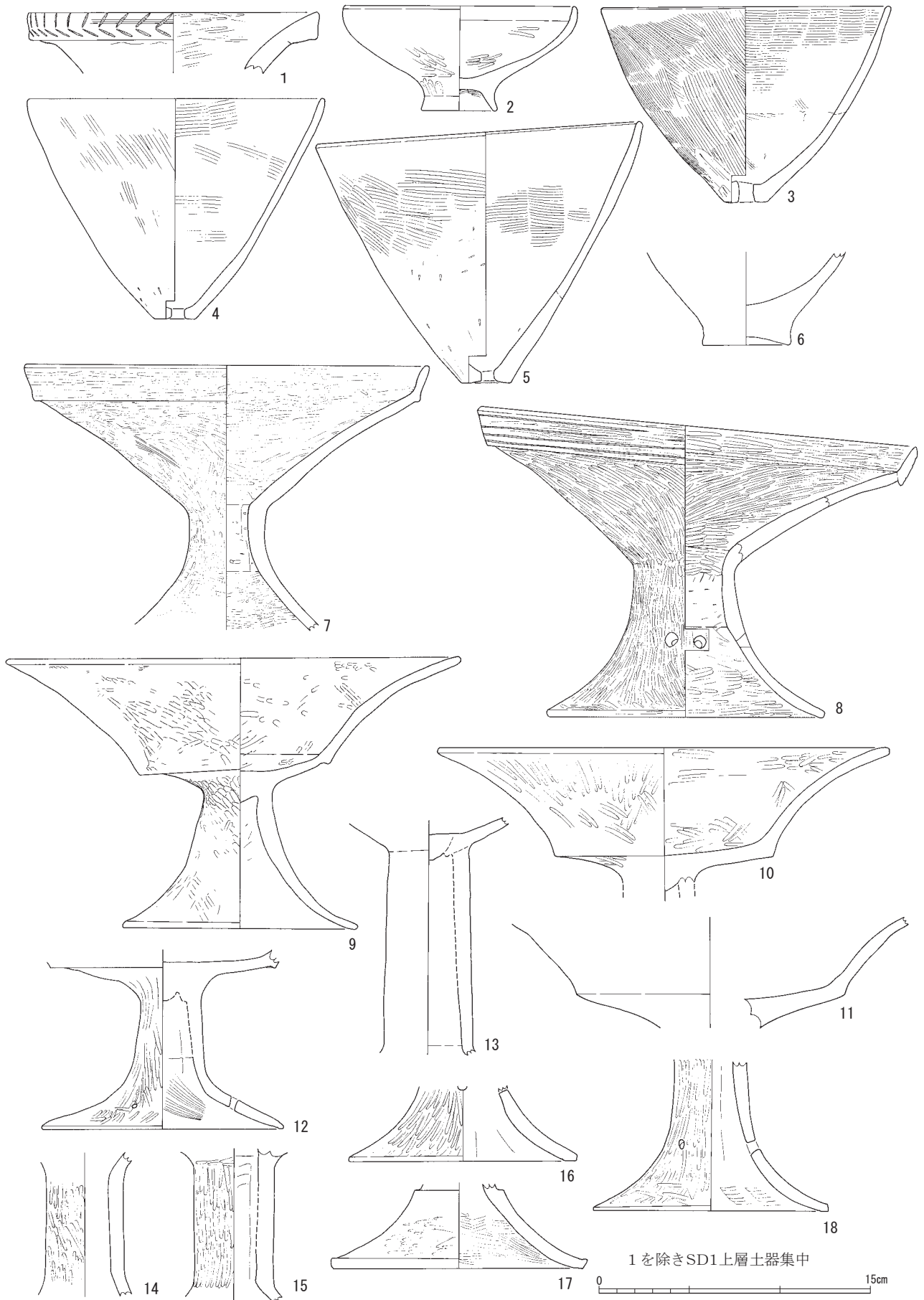
第13図 長池ニシタンボ遺跡 (2013) 遺構図① (S=1/40)



第14図 長池ニシタンボ遺跡(2012)遺構図 (S=1/40、1/60)



第15図 長池ニシタンボ遺跡(2013)遺構図② (S=1/60)

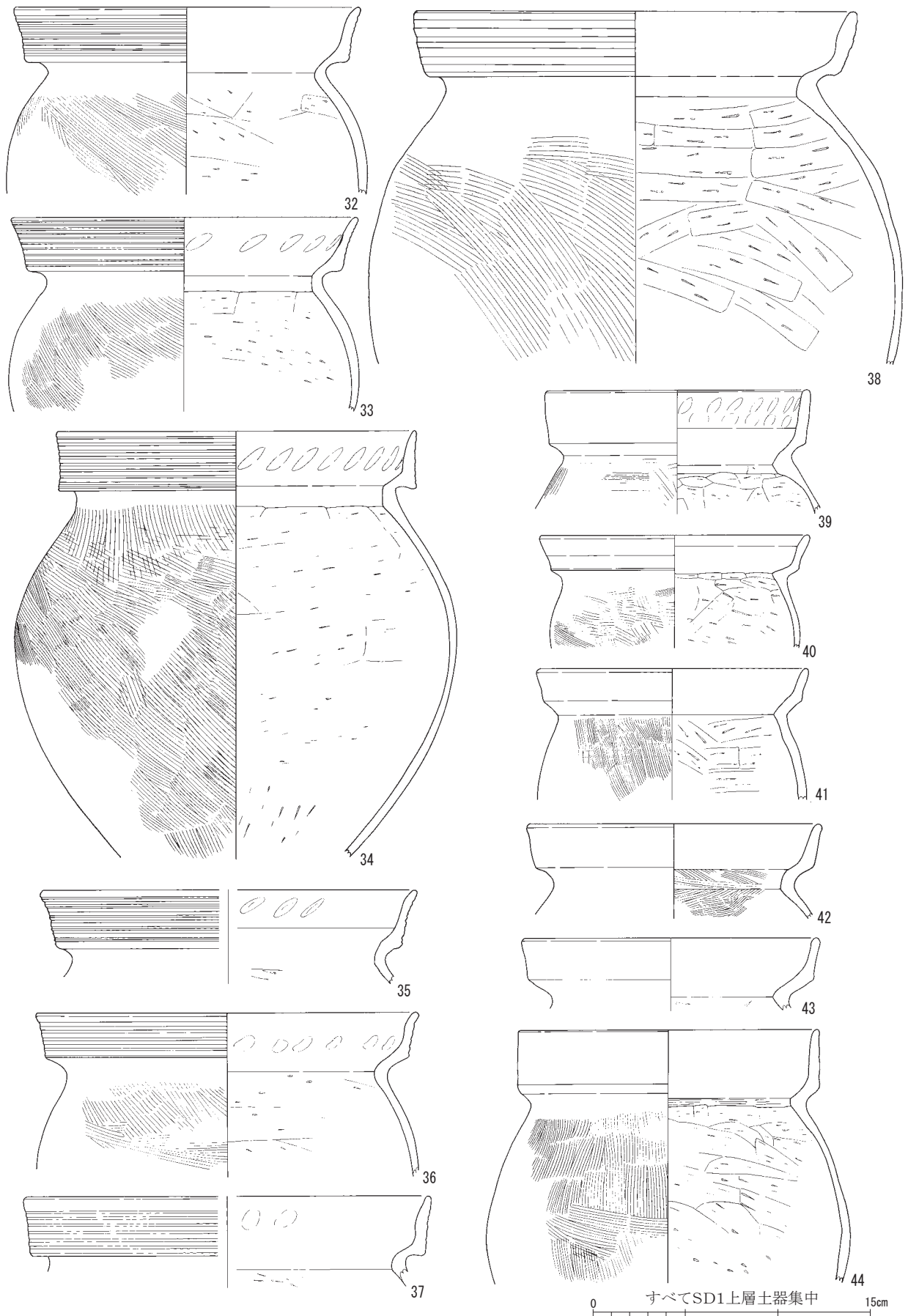


第16図 遺物実測図1 (S=1/3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ②



第17図 遺物実測図2 (S = 1 / 3)



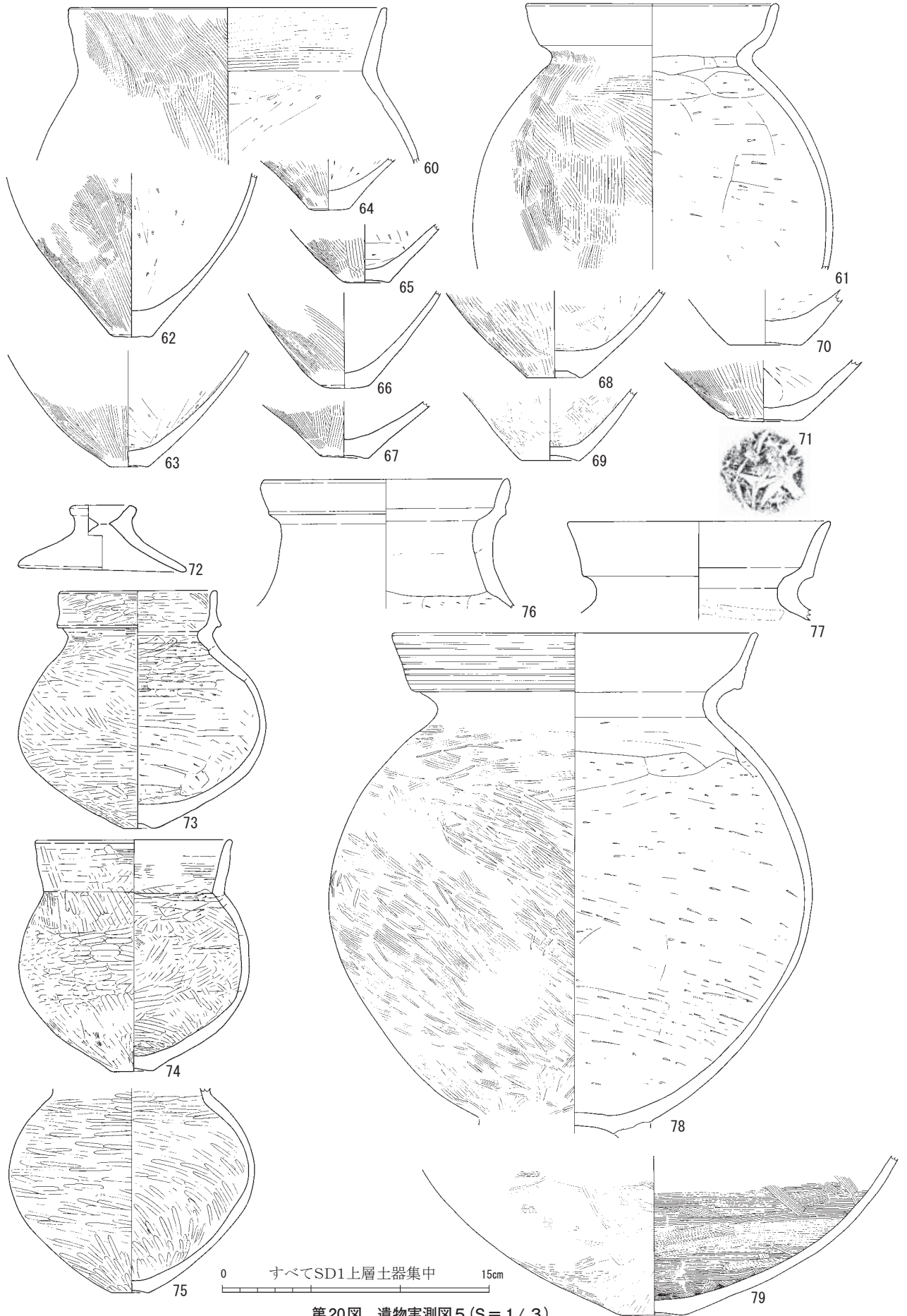
第18図 遺物実測図3 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ④



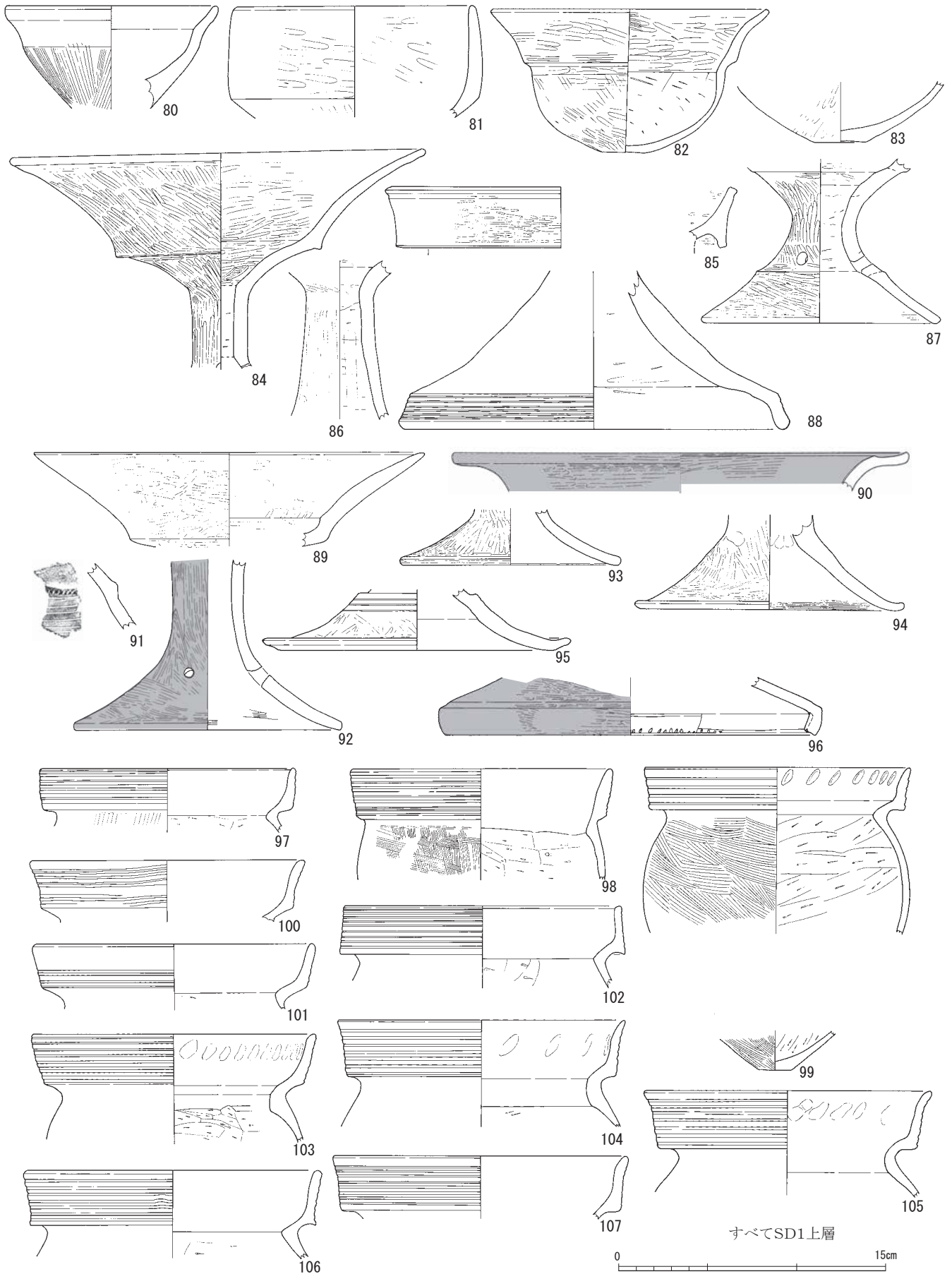
第19図 遺物実測図4 (S = 1 / 3)

すべてSD1上層土器集中

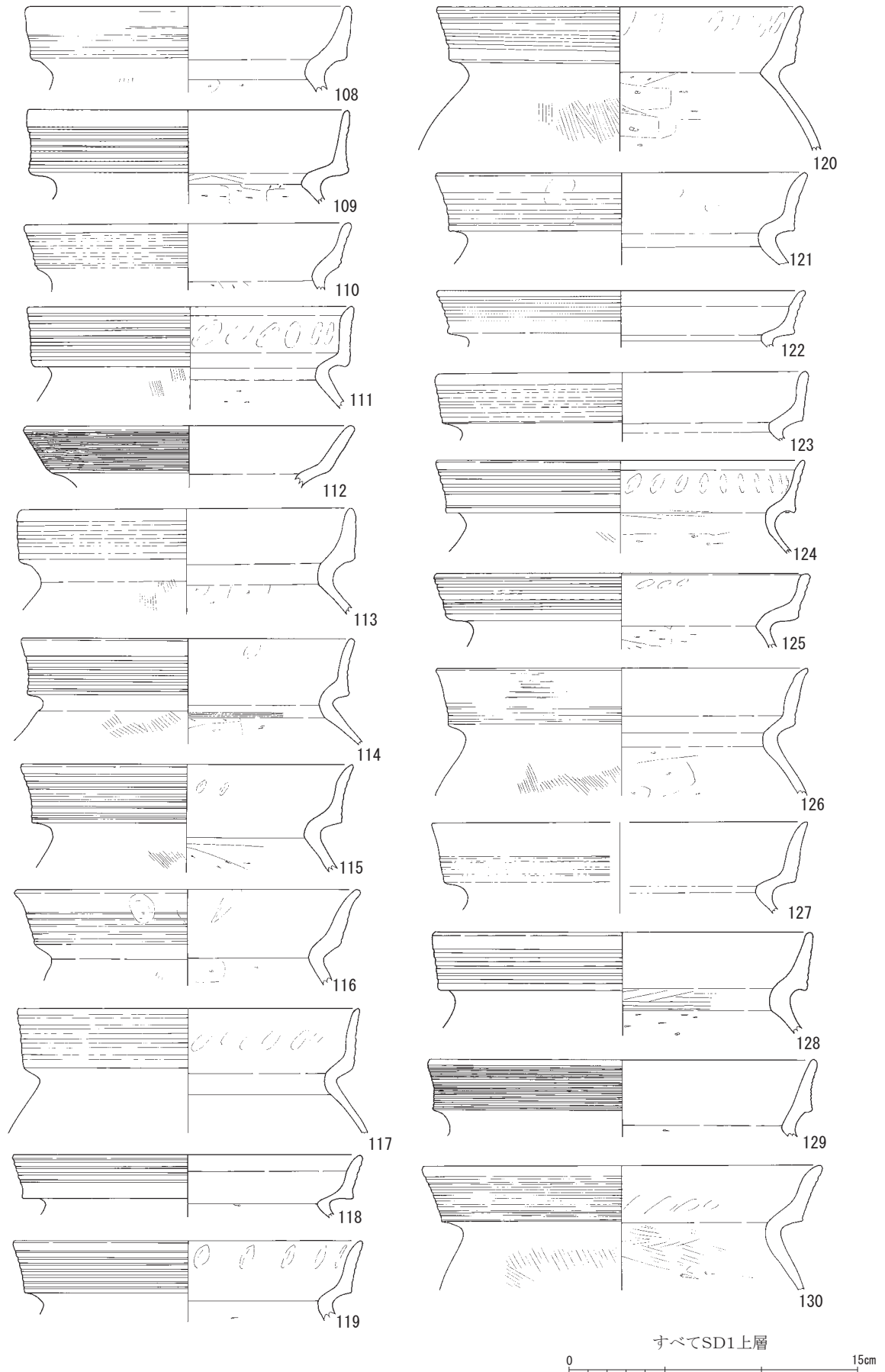


第20図 遺物実測図5 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑥

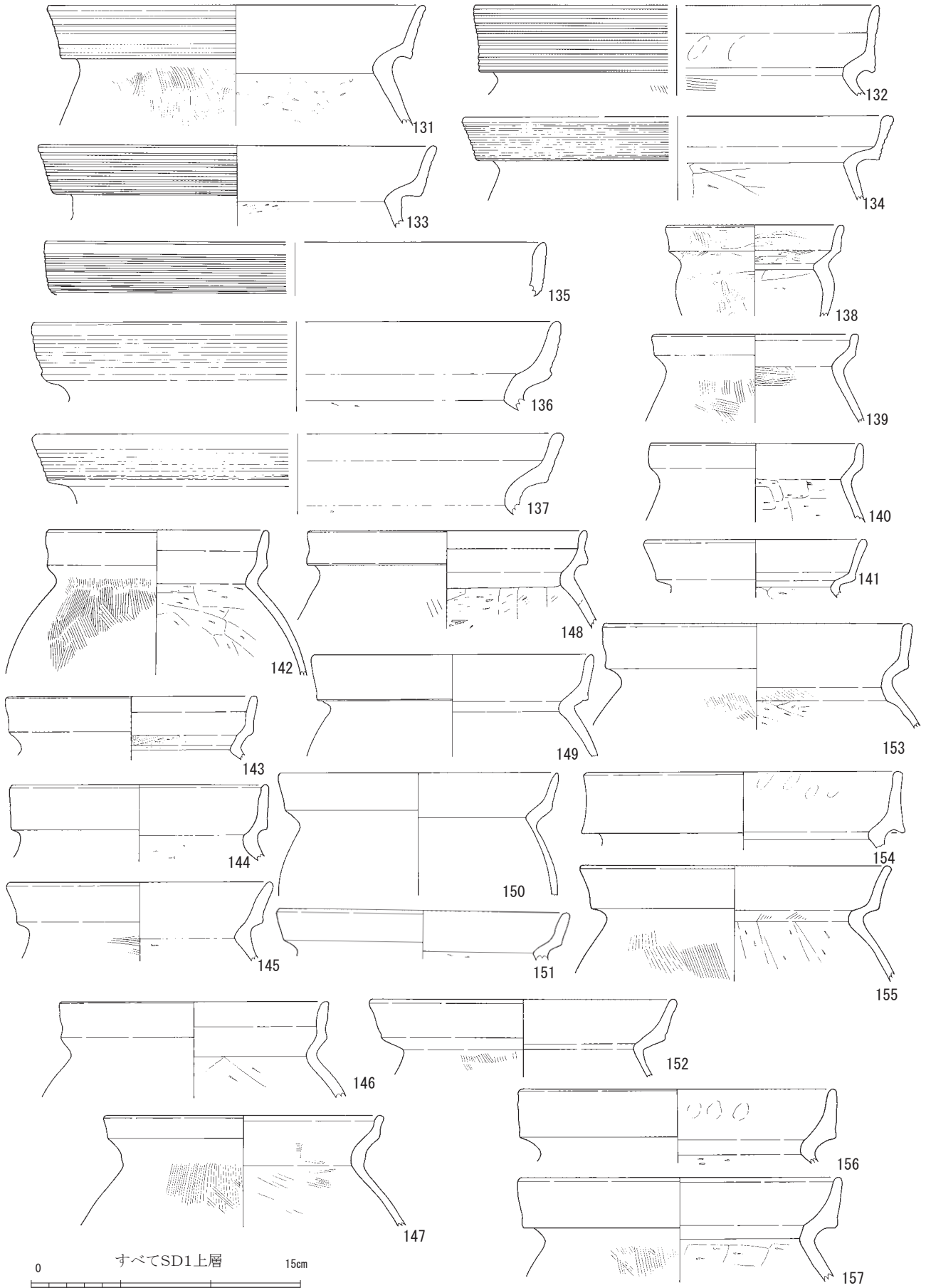


第21図 遺物実測図6 (S = 1 / 3)

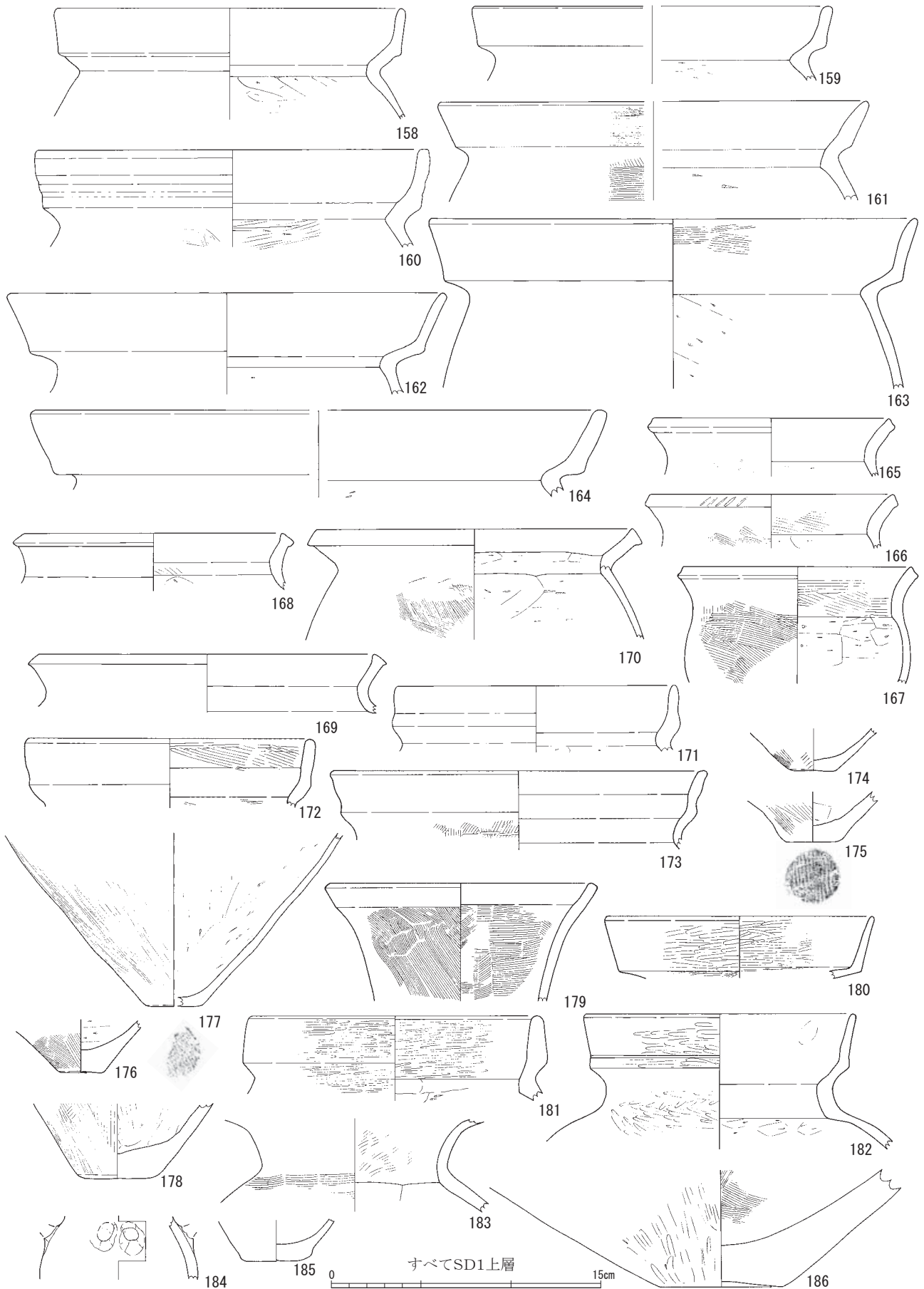


第22図 遺物実測図7 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑧

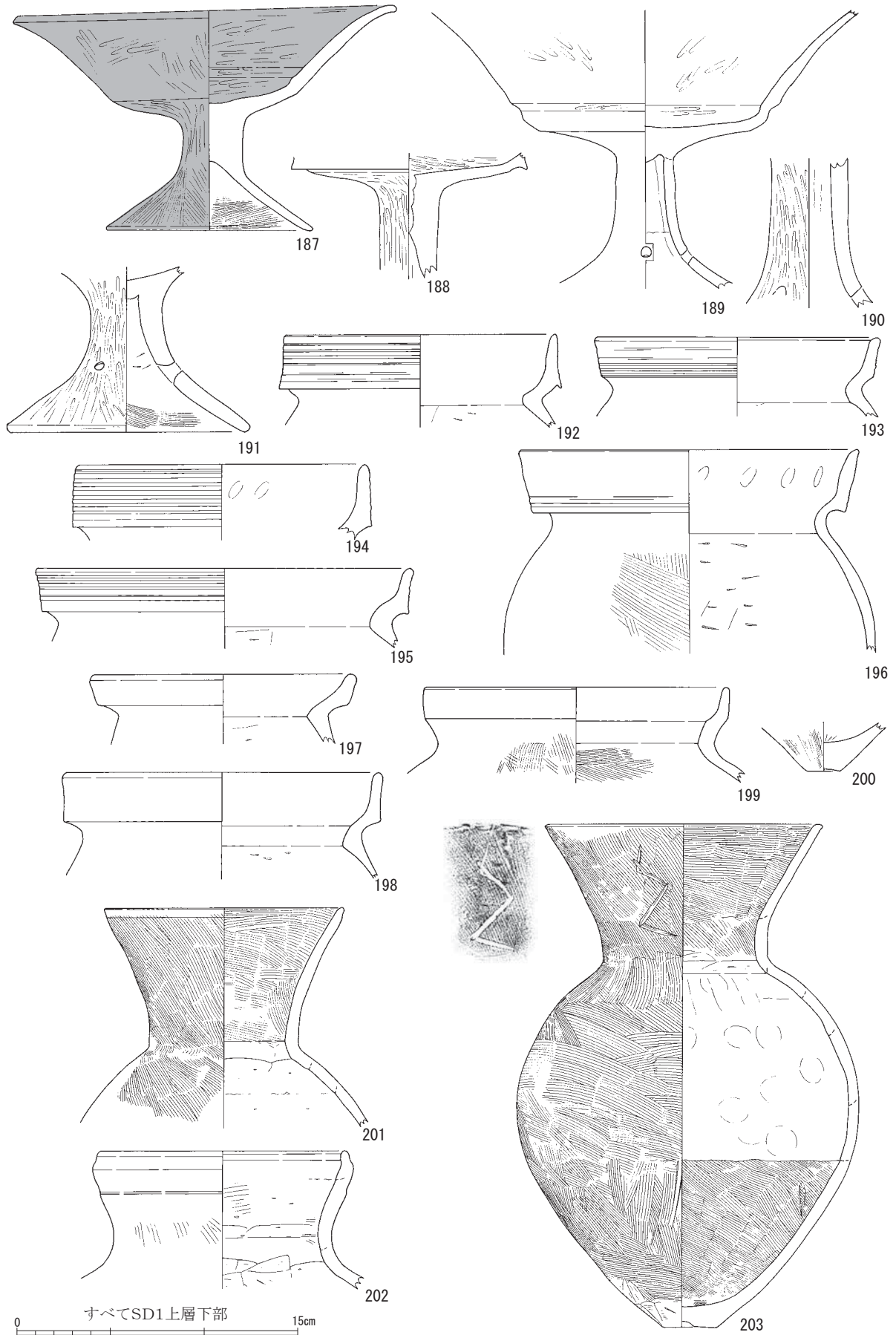


第23図 遺物実測図8 (S = 1 / 3)

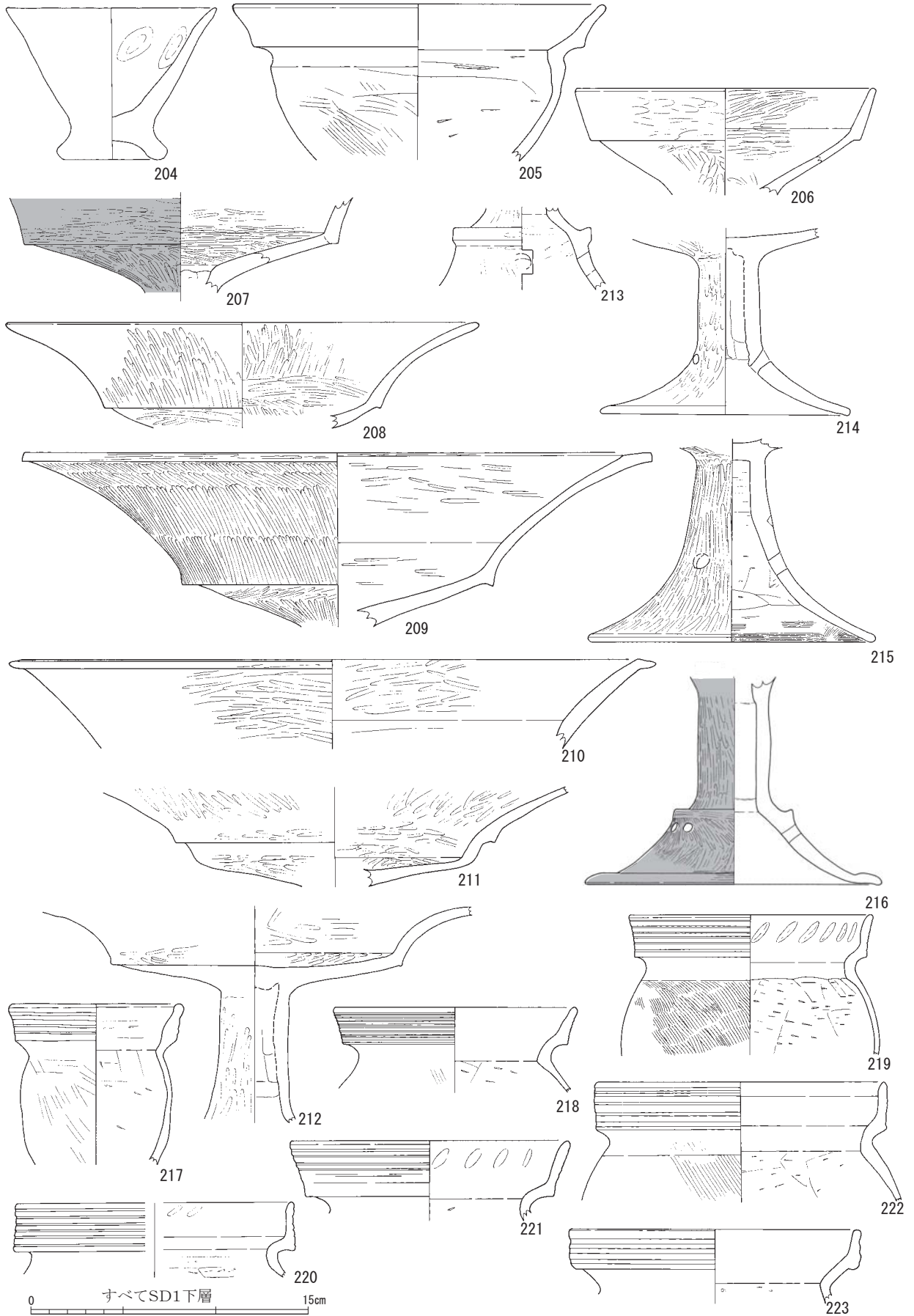


第24図 遺物実測図9 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑩

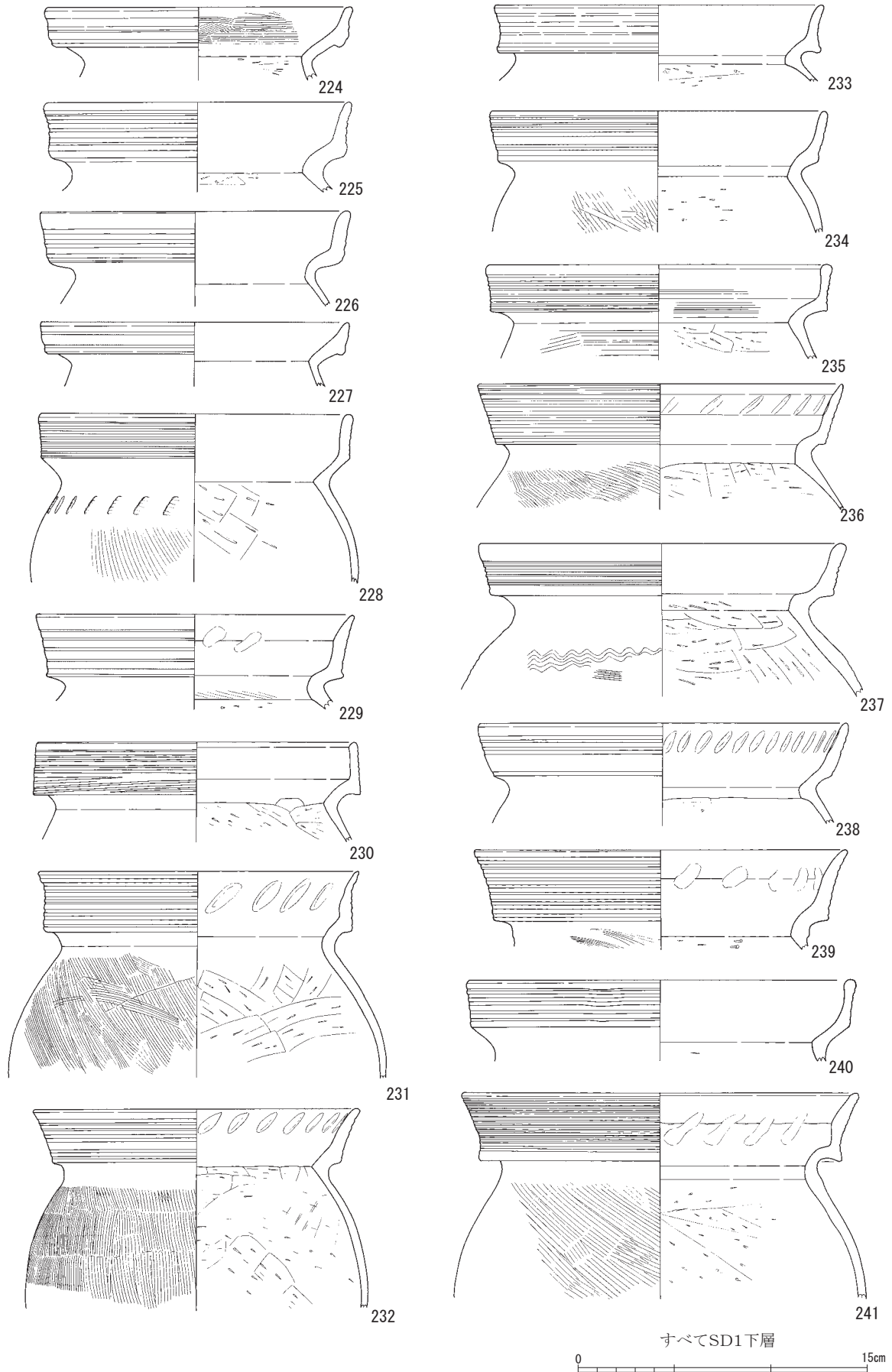


第25図 遺物実測図10 (S = 1 / 3)

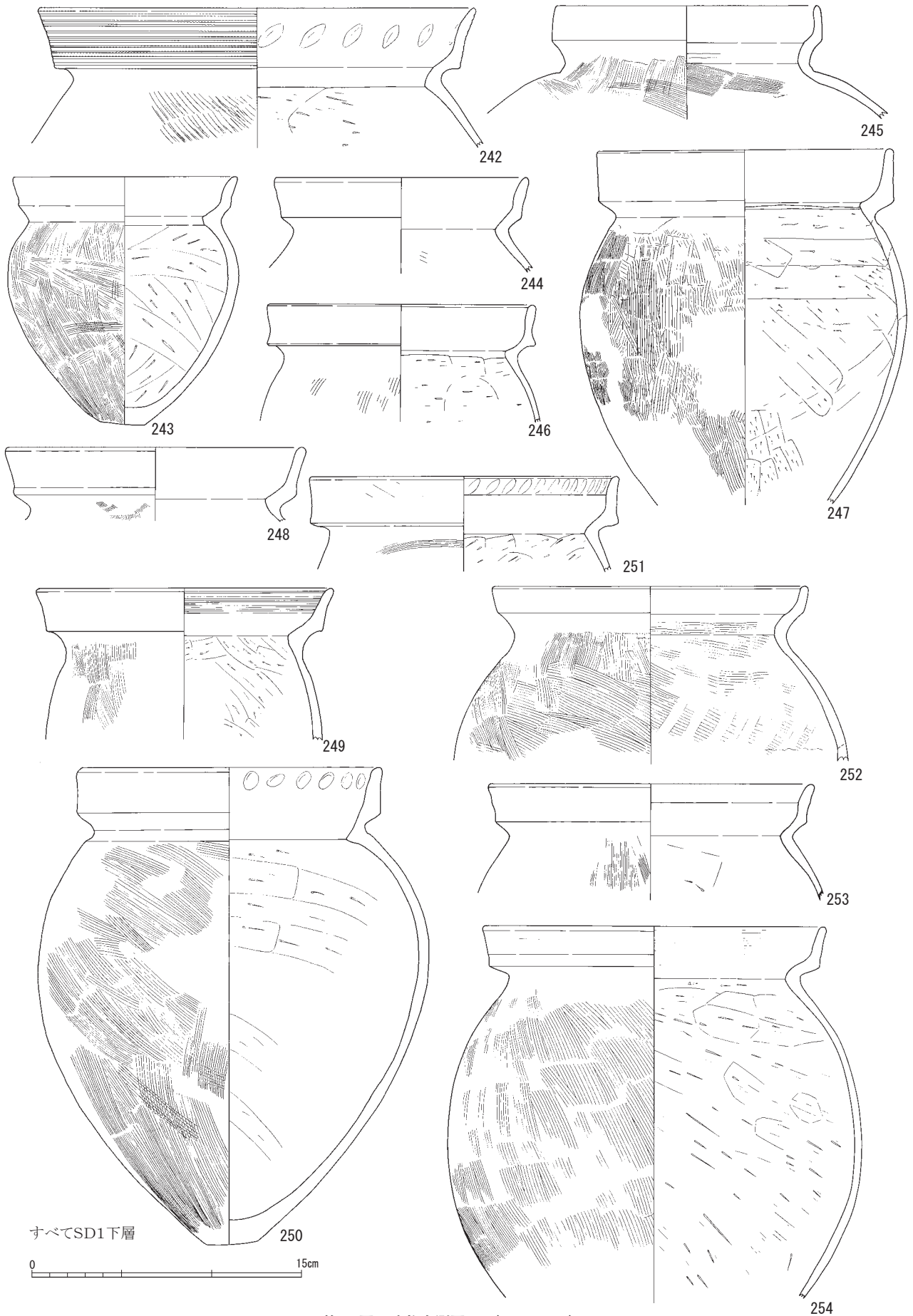


第26図 遺物実測図11 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑫



第27図 遺物実測図12 (S = 1 / 3)

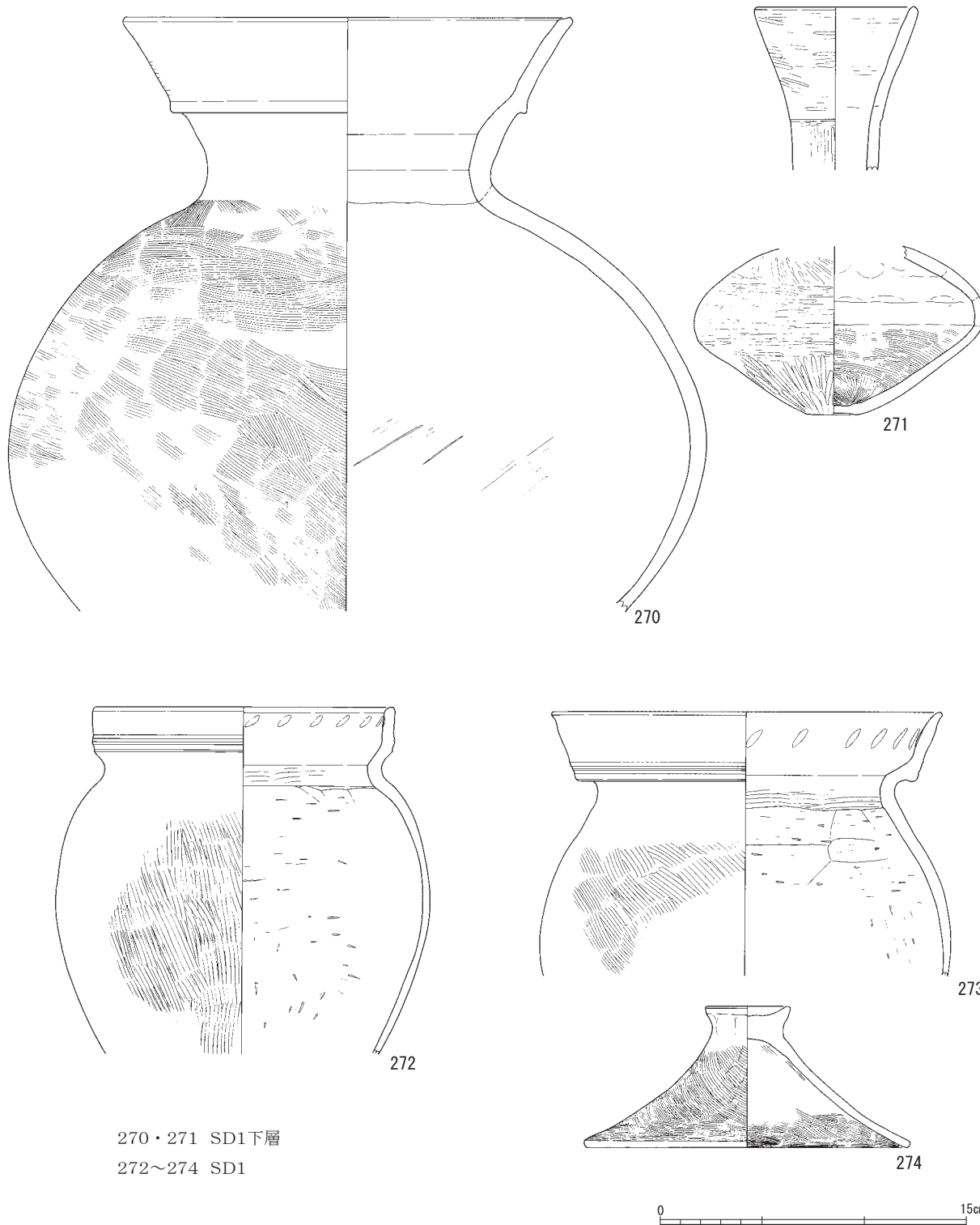


第28図 遺物実測図13 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑭

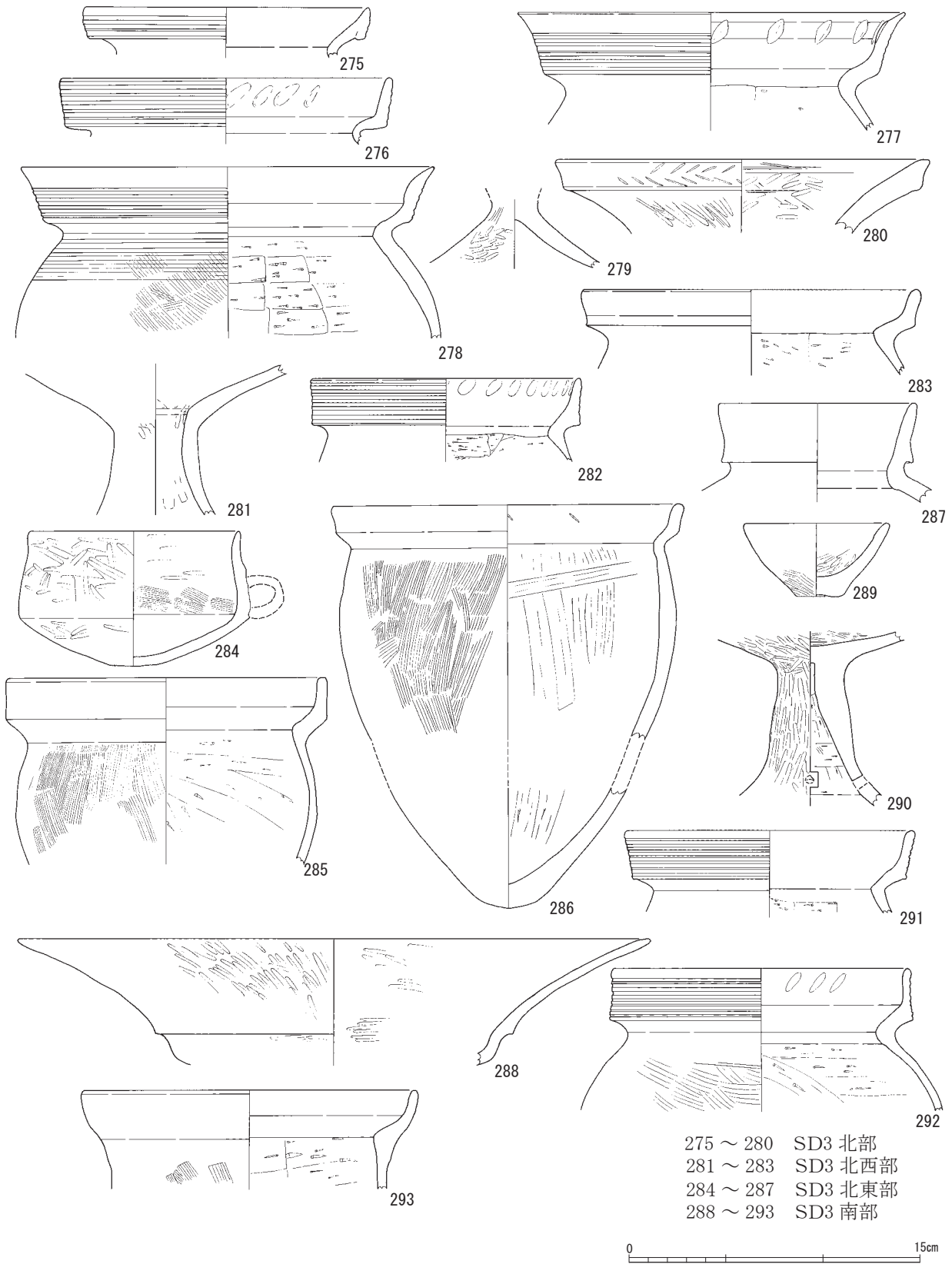


第29図 遺物実測図14 (S=1/3)

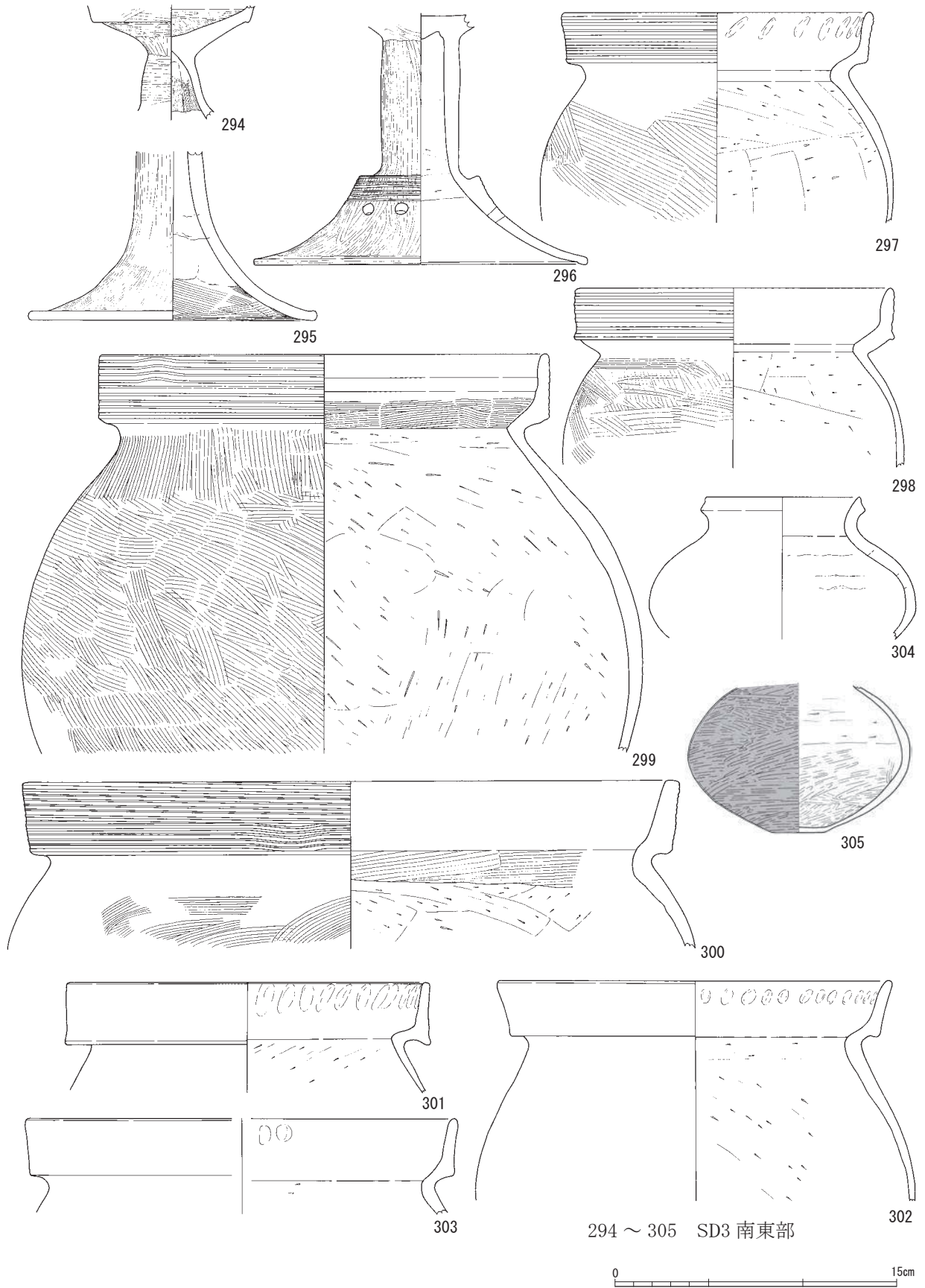


第30図 遺物実測図15 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑩

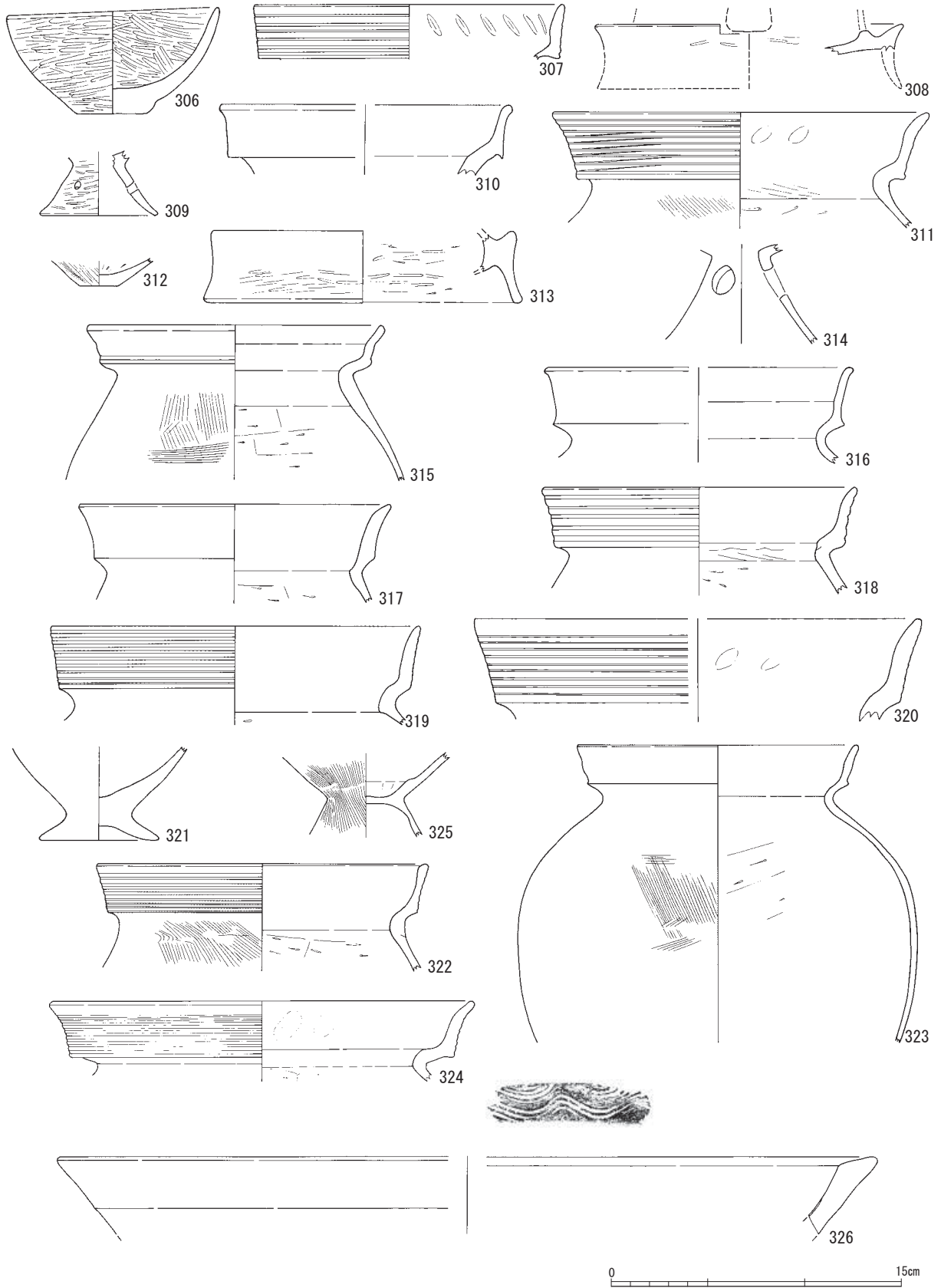


第31図 遺物実測図16 (S=1/3)

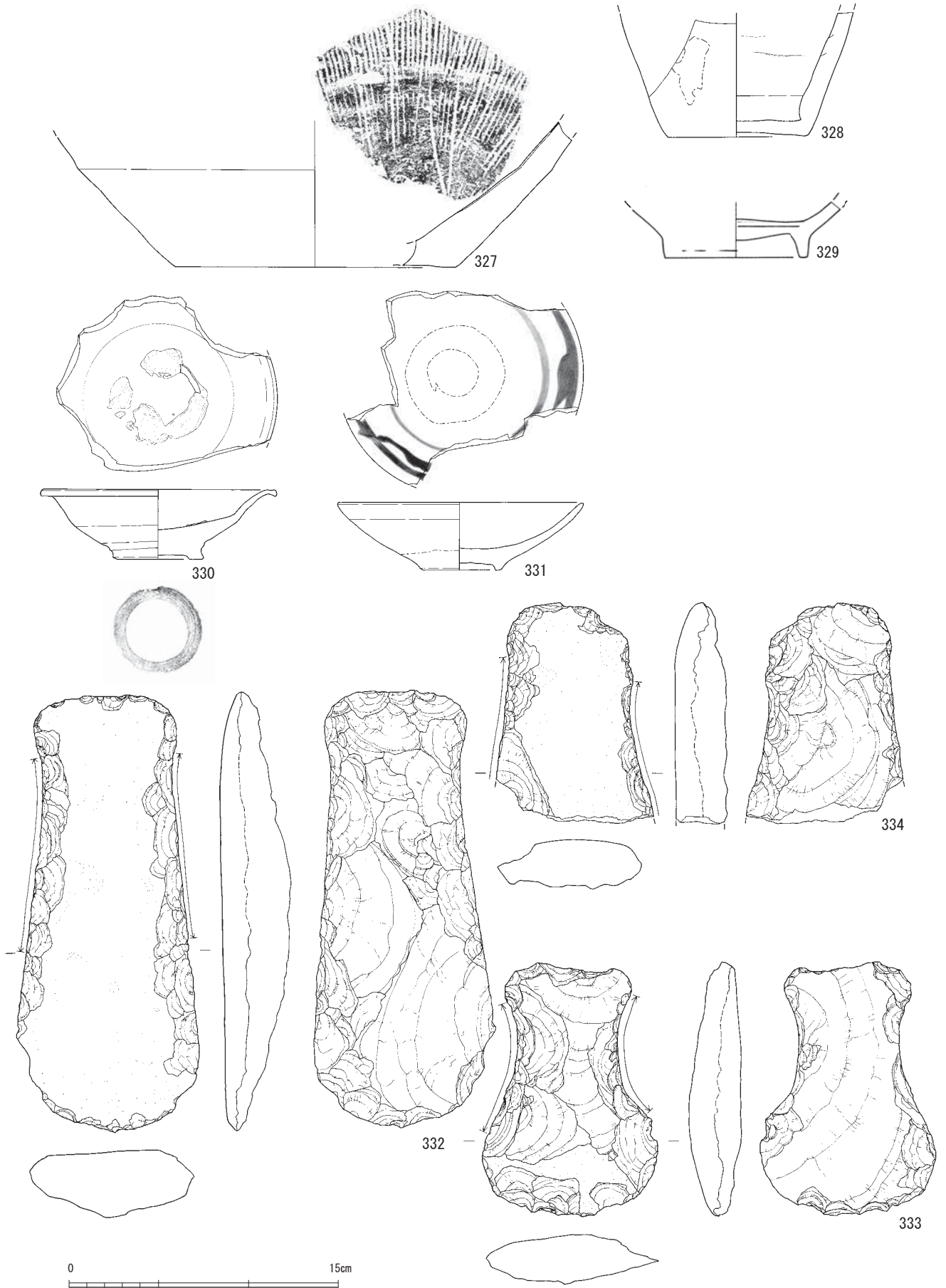


第32図 遺物実測図17 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑱

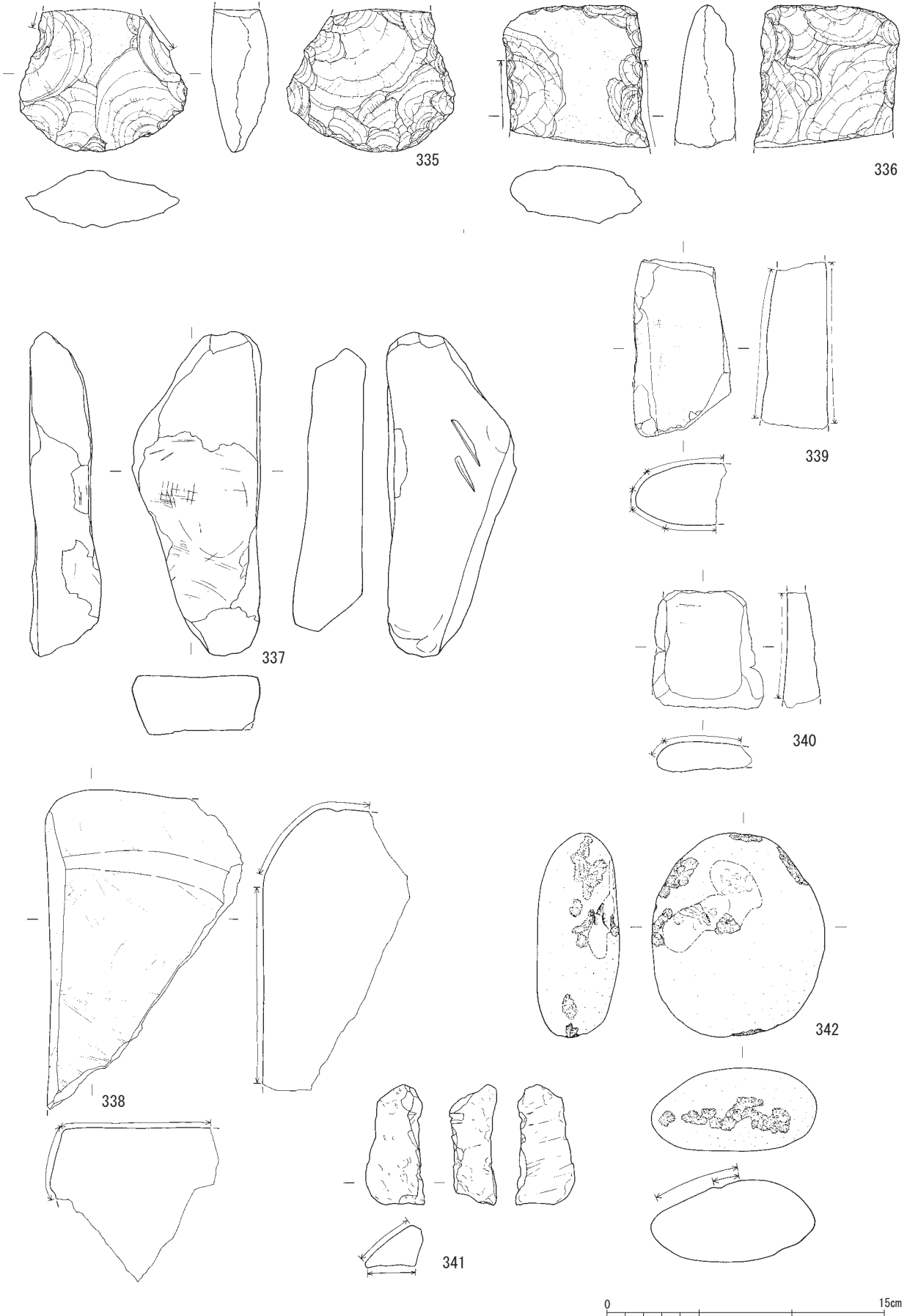


第33図 遺物実測図18 (S = 1 / 3)

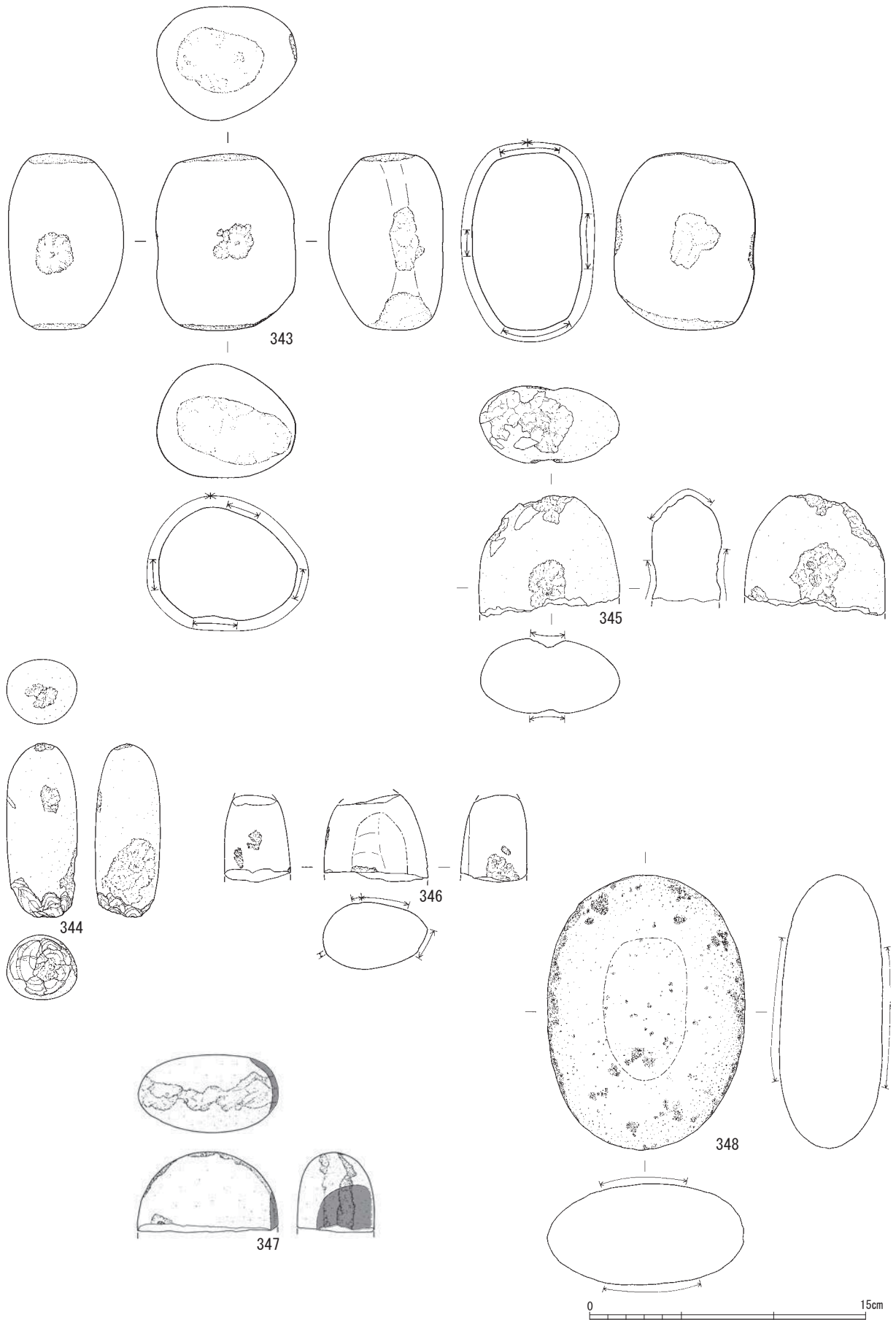


第34図 遺物実測図19 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2009) ⑳

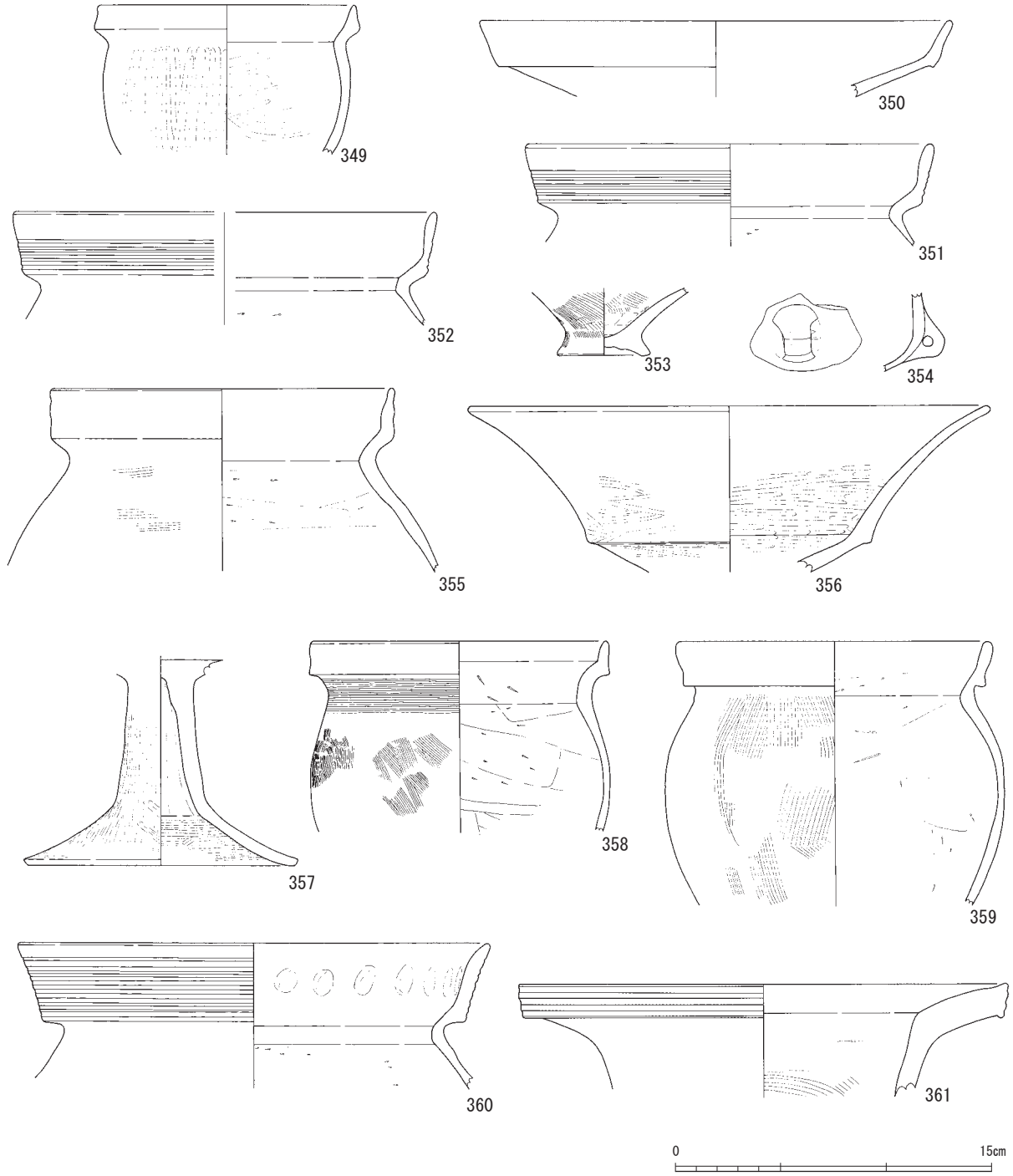


第35図 遺物実測図20 (S = 1 / 3)

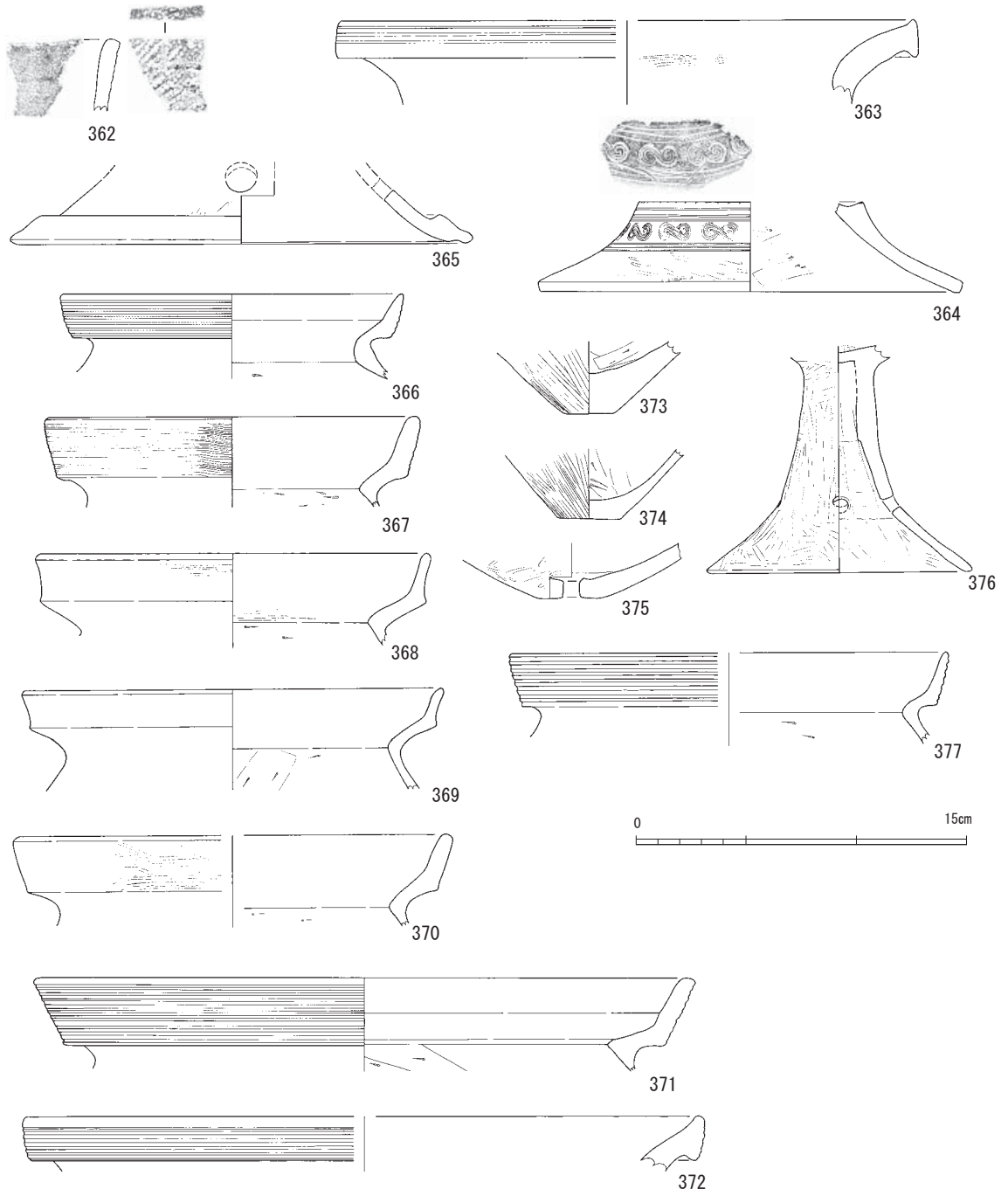


第36図 遺物実測図21 (S = 1 / 3)

長池ニシタンボ遺跡 (2012)



第37図 遺物実測図22 (S = 1 / 3)



第38図 遺物実測図23 (S = 1 / 3)

第4章 長池カチジリ遺跡の調査

第1節 調査区の概要

第1章で触れたとおり、改修前の安原川右岸において、下流側から平成23・24年度の2次にわたる発掘調査を実施した(第39図)。調査区北部から北西にかけてと、調査区南部が中・近世の安原川旧河道部分で、トレンチで土層堆積等を確認している。長池ニシタンボ遺跡のNR2から北にのびる川筋であろう。南部の旧河道からは幅約5mのSD1が派生する。旧河道に挟まれた調査区中部では検出面となる黄褐色シルトのベースがみられ、主として弥生時代終末～古墳時代前期頃と推定される遺構(掘立柱建物・土坑・溝など)が分布する(第40・41図)。また調査区南端でも黄褐色シルトのベース上に同時期の遺構(SK3、SK5等)が分布する箇所があり(第47図)、調査区を部分的に拡張した。

第2節 遺 構

1. 掘 立 柱 建 物

SB1(第42図) 調査区中部の北側で検出。梁間1間で桁行は2間と推定される。梁間はP12(深さ27cm、以下は数値のみ記す)とP22(22cm)間で376cmを測る。桁行はP22、P23(30cm)、P13(31cm)を結ぶラインで、柱間212cm、2間で424cmとなる。主軸の方位はN-33°-Wである。

SB2(第42図) SB1の南西で検出されている。梁間1間、桁行3間の東西棟である。P5を含めれば桁行4間の可能性もある。梁行では西列のP6(24cm)・P1(43cm)間も、東列のP9(21cm)・P4(39cm)間ともに392cmを測る。一方、桁行は北列・南列ともに612cmであるが、西側のP6・P7(20cm)間とP1・P2(44cm)間が220cm、中央部のP7・P8(29cm)間とP2・P3(24cm)間が192cm、残る東側のP8・P9間とP3・P4間が200cmと、柱間は不揃いである。主軸の方位はN-61°-Eであり、東西棟ゆえ90°補正すればN-29°-Wとなり、SB1のそれに近似する。また梁間の柱間寸法にも近似がみられる。これらの点からSB1・SB2は併存したかは別としてほぼ同時期の建物、恐らくは弥生時代終末～古墳時代前期に位置付けて大過ないであろう。

SB3(第42図) SB2の南側に想定される。北辺はP26(38cm)とP31(8cm)を結ぶラインで長さ404cm、これらの中間やや西寄りにP30(37cm)がみられる。以上に南西隅のピット(32cm)と南東隅のピット(40cm)を加え、掘立柱建物を想定したが、確定できるものではない。建物とすれば桁行464cm、主軸の方位はN-26°-Eということになる。

SB4(第43図) SB4の南側で検出されている。2間×2間で、桁行の北列と南列が雁行し、プランが不整な平行四辺形状となる。先述の長池ニシタンボ遺跡のSB1と共通する構造といえる。北列はP52(69cm)を西限に中間(32cm)と東限(40cm)の2穴が並び、柱間寸法は228cm×2間で456cmを測る。南列も西から深さ13cm、37cm、47cmの3穴が並び、柱間は212cmと228cmで都合440cmとなり、北列に比してやや短い。なお、南西の小穴が浅いのは耕地整理による土取りの影響であろう。

一方、西列中央には深さ21cmの小穴があり、それを挟んだ柱間は北側144cm、南側160cmで都合304cmである。同じく東列中央の深さ12cmの小穴を挟んだ柱間は北側180cm、南側144cmで都合324cm、西列に比してやや長い。主軸の方位は概ねN-75°-W、これに対して西列・東列はN-21°-E前後である。

SB5(第43図) SB4の東側に想定されるが、SB3同様確証に乏しい。1間×1間で、北東隅のP35(35

cm)のほか、南東隅(20cm)、南西隅(35cm)、北西隅(40cm)の計4穴からなり、柱間は南北260cm、東西340cmである。主軸の方位はN-59°-Wとなる。

SB6(第43図) 上記のさらに南、SD1に近い位置に想定されるが、これについても確証に乏しい。P38(35cm)とP41(23cm)を結ぶラインを短辺(長さ248cm)とする1間×1間で、ほかに南西(33cm)と南東(27cm)の2穴が加わる。長辺は長さ280cm、主軸の方位はN-41°-Eである。

柱穴列1(第42・44図) SB2と重複する位置に2間分の柱穴列らしきものが確認された。北からP20(35cm)、P16(20cm)、P23(23cm)で柱間はそれぞれ144cm、合計288cmである。これらを結ぶラインの方位はN-1°-Wである。

2. 土 坑

SK1(第45図) 調査区中央の北寄りに位置する。直径約140cmの円形で、深さは10cm程度と浅く、東側に深さ約5cmのテラス部分が伴う。底部には長径20cm規模の小さな穴が数基みられ、深さは10cm内外である。覆土は褐色土。

SK2(第45図) 調査区北部、安原川旧河道に接する位置にある。平面は長径105cm、幅70cmの不整な楕円形を呈し、深さは40cm余りである。壁がまっすぐに立ち上がる点が特徴である。覆土は褐色土系で占められる。

SK3(第46図) 調査区南西の拡張部の西側を占める。土坑というよりは幅2~3mの北北西にのびる浅い溝状の落ち込みであり、西端は安原川旧河道に切られ、急激に深く落ち込む。底面は深さ5、15、25cmの3段からなる。覆土はSK2・SD3と近似する黒褐色土を主体とし、北側ではSD3としてSK5と一体に調査されている。

SK4(第41図) 調査区南部の安原川旧河道北岸で確認されている。南部の大半は安原川旧河道で失われている。深さは25cm程の本体に北西に張り出す深さ5cm程の部分が付属する。

SK5・SD3(第46図) 調査区の南西端部で「SD3」と呼称した部分が拡張の結果、南側ではSK3とSK5に分かれることが判明した。SK5とSD3は一体の土坑状の落ち込みとできよう。北端のベースが南端のそれに比して約20cm低くなっており、旧安原川の流れによって削られている模様である。北端と東部を除く主要な部分は、長径280cm、短径120cm程の大きさで、底面は4段からなり、深さは5、10、20、30cmと北へ行くほど深くなる。覆土上層には黒褐色土が堆積する。

3. 溝

SD1(第41・47図) 調査区南部で安原川旧河道から分かれ、直線的に西北西へ向かう幅約5m、深さ約1mの溝。流路の方位は真北から西に83°振れるもので、長池ニシタンボ遺跡のNR1のそれと直交する関係にある。覆土には黒褐色粘質土も介在するものの、上部を中心に灰黄褐色土が目立つようである。中世後半から近世に位置づけられる。

SD2(第41・47図) 北のSD1と南の安原川旧河道に挟まれた部分に位置する幅1.5~2m、深さ40~50cmの溝で、底部は平坦。7m弱が調査されており、流路は南に開く弧状を呈する。覆土は流水により堆積したと考えられる黄褐色の砂である。古墳時代初頭頃の土器がまとまって出土している。

SD3(第46図) SK5の記述で触れたとおり。

SD4(第41図) 安原川旧河道・SD1の分岐点にあり、両者の埋積後に掘り込まれたもの。

SD5(第41図) SD2の東端付近から分岐して北へ向かう幅3m程の流れで、北部をSD1に切られるため、延長2m分を確認できたに過ぎない。底部に複雑な凹凸がみられるが、深さは概ね西部で10cm前後、

東部で20cm前後、北側の深部で60cm程といえる。古墳時代初頭頃の土器が出土している。

SD7（第41図） 調査区東壁にかかるSX3から西へのびる幅約20cm、深さは15cm程の溝。

SD8（第41図） 調査区南東端付近で検出された。長さ約3m、最大幅50cmで、深さは約10cm。

4. 落ち込み

SX2・4・5・7・8（第40図） 調査区中央の北側（平成23年度調査区の南部）周辺で見られる蛇行する溝状のものを一括した。主たる覆土は褐色土である。幅20cm前後で、深さは10～20cmの場合が多い。形状から推して人為的なものではなく、木の根等に由来する可能性も考えられる。

SX10・12（第40図） 調査区中央で検出された平面が短冊形をなす矩形の掘り込み。前者は幅約3m、後者は約1mで、両者は平行する。深さは数cmで浅い。近代の耕地整理の際の土取りの痕跡と考えられる。

SX3・6・11・14（第40・41図） 土坑状のものを一括した。SD1北側にあるSX3は西南部のみの検出で大半は調査区外となる。深さ約20cmの浅い部分と70cmを越える深い部分がみられる。SB2の北東に接するSX6は長径約1m、最大幅約50cmの瓢箪形を呈し、深さは数cmと浅い。

SX11は調査区中央の東側にあり、長径60cmの歪な楕円形状を呈し、これも深さ数cmに過ぎない。残るSX14は調査区南端付近で検出されたもので長さ約220cm、最大幅約160cmで、深さは10cm程度である。

5. 川 跡

安原川旧河道（第40・41図） 前節で触れたとおり、調査区の南北両端付近がこれにあたる。出土遺物から中世後半～近世のものと推定される。確認できた幅は北部で14m以上、南部では13mである。土層等を確認するため、たちわり調査を実施し、北部のトレンチ1では検出面から110cmまで掘り下げた。南部のトレンチでは検出面から125cmで川底に達した。

第3節 遺 物

1. 北部(平成23年度調査区)出土遺物

安原川旧河道出土遺物（第48図378～382） いずれもトレンチ1からの出土資料である。378は肥前陶器の播鉢の底部。379は青磁の盤の底部である。380～382は肥前磁器のいわゆる染付である。380・381の見込みには蛇の目状の釉剥ぎがみられる。382は小型の碗である。

2. 南部(平成24年度調査区)出土遺物

SK2出土遺物（第48図383～386） いずれも甕の口縁部である。386は無文の有段口縁、383・384は擬凹線がめぐる有段口縁で内面に指頭圧痕が残る。385は口縁部下端に稜はないが、口縁上半が外反ぎみで、あるいは山陰系の影響を受けたものかもしれない。

SK4出土遺物（第52図481） 須恵器の無台杯で、8世紀後半頃ののものであろう。

SD2出土遺物（第48図387～第51図455） 388は天井部が凹む蓋で、外面はミガキ調整される。389～391は口縁部が短く屈曲する小型の鉢。392も口縁が緩く屈曲する鉢で、比較的厚手で内外ともミガキが施される。分厚い底部から口縁が短く立ち上がる393も鉢に分類できるが、成形・調整が雑であり、特殊な用途を想定すべきであろう。394～396はミニチュア土器の底部、内外にミガキがみら

れる397は鉢の脚と考えられる。387・399～401は高杯等の脚部である。400の脚裾部上端の小さな段に擬凹線がめぐり、その上下にキザミが伴う。398の杯底部は平坦である。

甕では403・446は口縁端部をつまみ出すようにして内傾する面を設けるもので、擬凹線がみられる前者では下方に、無文の後者では上方につまみ出されている。427～430は無文の有段口縁のもので、いずれも端部が丸縁である。428は頸部のしまりが弱い。431も同類だが、口縁下端にキザミが施される。甕で主体をなすのは擬凹線をめぐらす有段口縁のものである。405～426がこれに該当する。口縁部の形状では外反するものが、端部の形状では尖縁が多数を占める。内面に指頭圧痕を残すものもみられる。「く」の字状の口縁部を有する甕としては433・434があり、頸部のしまりが強い後者に対し、前者の口縁は余り開かない。また前者の口縁下部には右下がりの平行沈線がみられる。

いわゆる外来系としては、口縁下端の稜を特徴とする山陰系(436～440)が一定量みられ、肩部でヨコハケを観察することができる。受口状の口縁部をもつ441は近江系であろうか。口縁端部を面取りする442・443は中能登町の徳前C遺跡の古墳時代初頭を特徴付けるタイプである。444は口縁部の断面形が強いヨコナデで蛇行状となるが、系譜は不詳。

その他、寸胴な胴部に広口の口縁部が伴う435、口縁部が緩く屈曲して立ち上がり、その外面に小さな円形のスタンプ文が連続して施される432、肩が張らない直線的な胴部に大きく外反する短めの口縁が付く445などの甕がある。その他、447～451は底部で、そのうち大きな平底の450は壺かもしれない。

残る壺では402・404は小型壺の口縁部である。402は内傾する有段の口縁部に、404では外反するそれに擬凹線がめぐり、後者の内面にはミガキ調整がみられる。455は外面が赤彩された小型壺の底部。452～454も壺である。452は頸部のしまりが強い「く」の字状の口縁で、内外にハケ調整が残る。口縁端部直下に断面三角形の粘土紐を貼付することにより口縁帯を作り出している。453は内外ともに丁寧なミガキ調整と赤彩を施す二重口縁のもの、454は外面にケズリ、内面にハケが残る球形の胴部である。SD3出土遺物(第51図456～459) 456は器台で脚裾部上端の段は形骸化しており、そこに擬凹線と列点文がめぐり、457～459は擬凹線を施す有段口縁の甕で、いずれも端部が尖縁である。457は段の下端の屈曲が曖昧になっており、頸部のしまりも弱い。

SD5出土遺物(第51図460～第52図477、同485) 460は蓋のつまみ部分である。461は緩く弧を描きつつ大きく広がる東海系の高杯。この溝はSD2から分岐するものであるが、461の出現とも相まって、甕の様相もそこは大きく異なる。主体をなすのは「く」の字の口縁で、なかには472・473など口縁端部をつまみ上げるようにして肥厚させる布留式系の出現期のタイプもみられるようになる。463など月影式の系譜を引く有段口縁の甕が少量残存するものの、462のように内面の段がなくなり「く」の字状口縁化した甕もみられるようになる。474は甕の底部。475～477は壺である。475・477は擬凹線をめぐらす有段口縁が長くのびる。外面と口縁内面にミガキ調整を施す476も有段口縁風ではあるが、頸部が不明瞭となっている。また後世の混入と思われる陶器485も出土している。

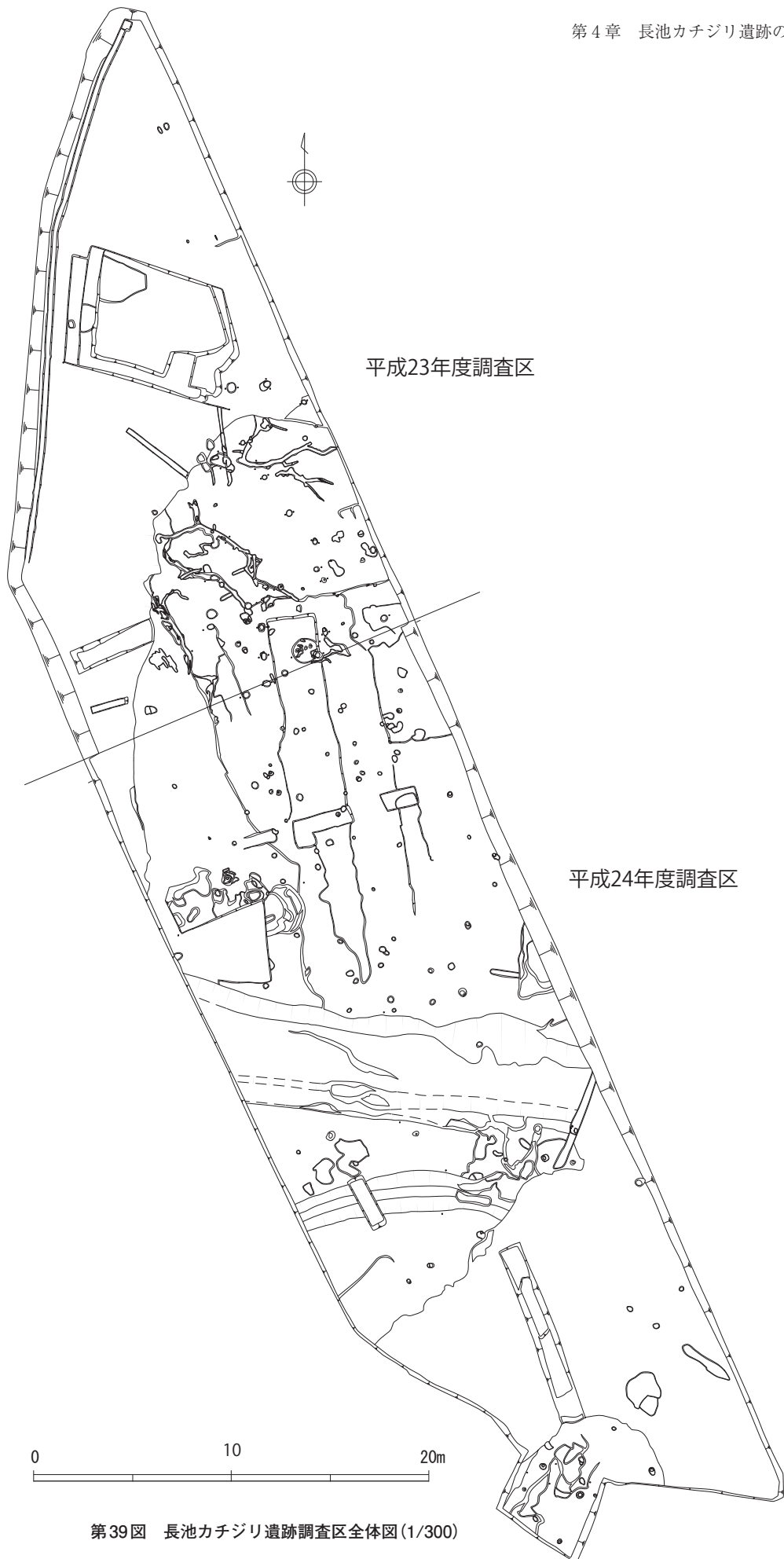
SX13出土遺物(第52図478・480) 478は有段口縁に擬凹線をめぐらす甕で、480には横S字状の連続渦文のスタンプ文が付されている。

SX14出土遺物(第52図479) 479は有段口縁に擬凹線をめぐらす甕である。

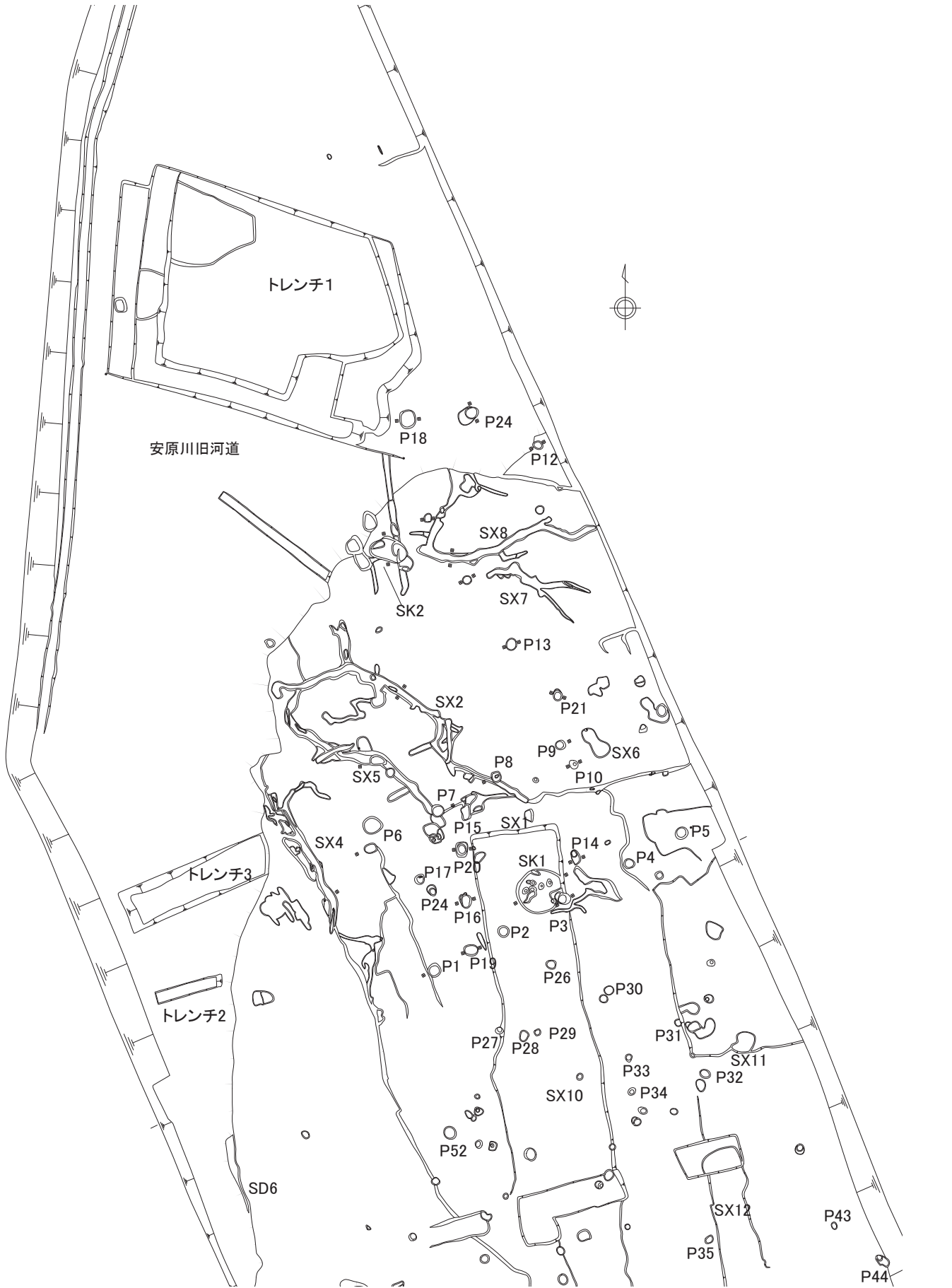
SD1出土遺物(第52図482・483) 482は青磁碗で口縁外面に雷文風の文様がみられる。483は陶器の卸皿である。

安原川旧河道出土遺物(第52図484) 484は瓦質土器で上下を反転させ脚部とすべきか。

SD8出土遺物(第52図486) 486は打製石斧の刃部で、表面側に自然面が残る。

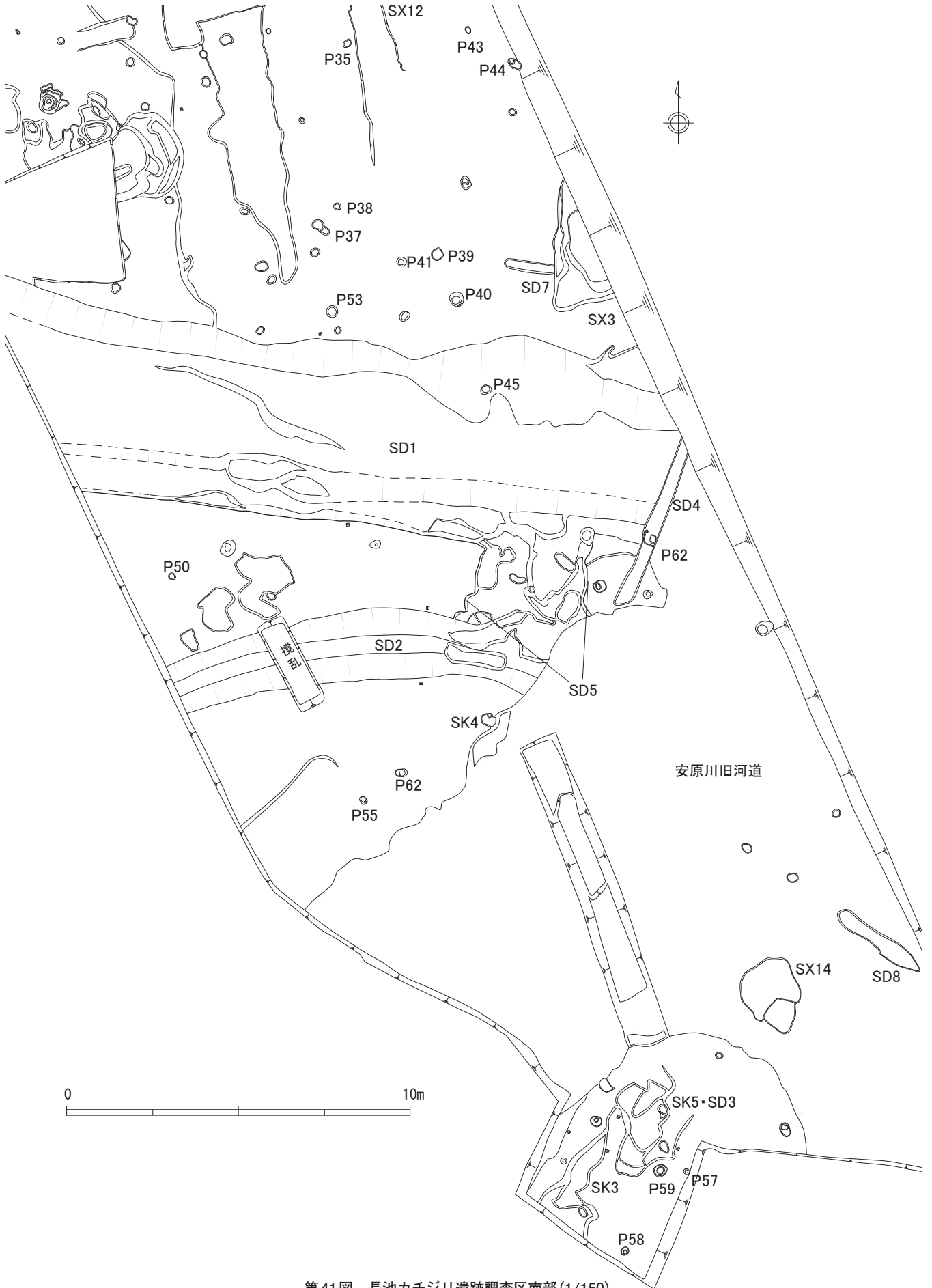


第39図 長池カチジリ遺跡調査区全体図(1/300)

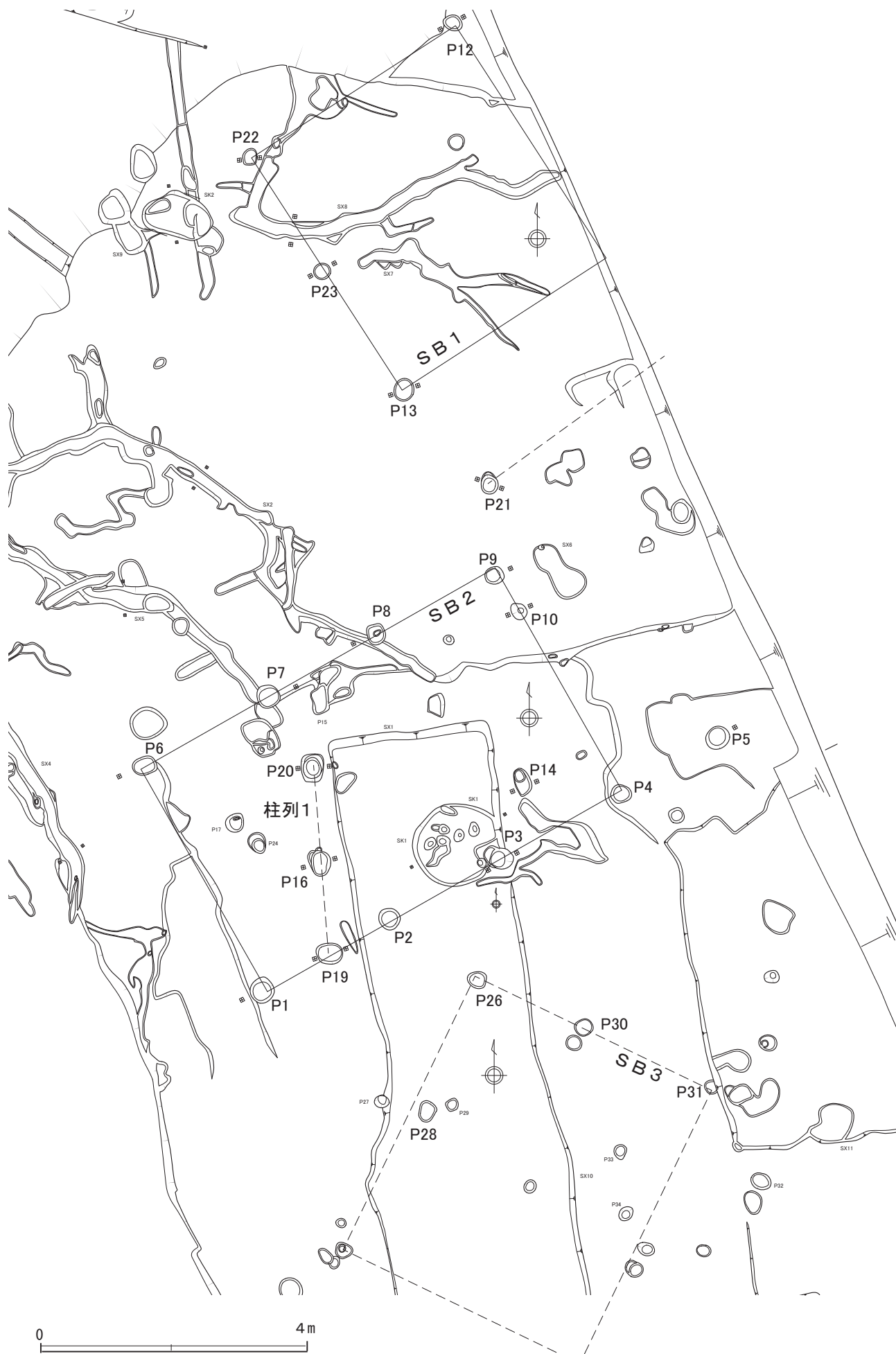


第40図 長池カチジリ遺跡調査区北部(1/150)

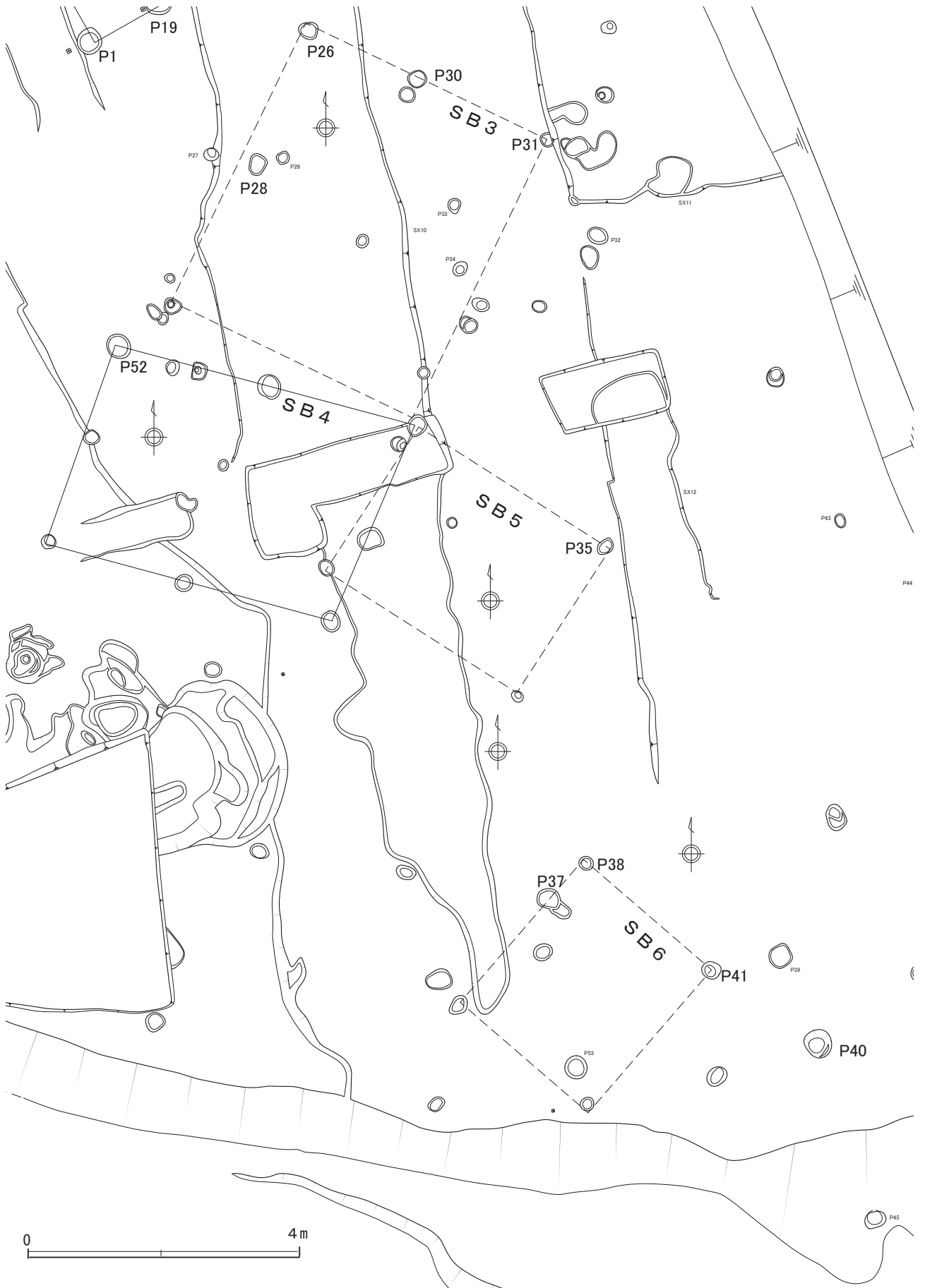




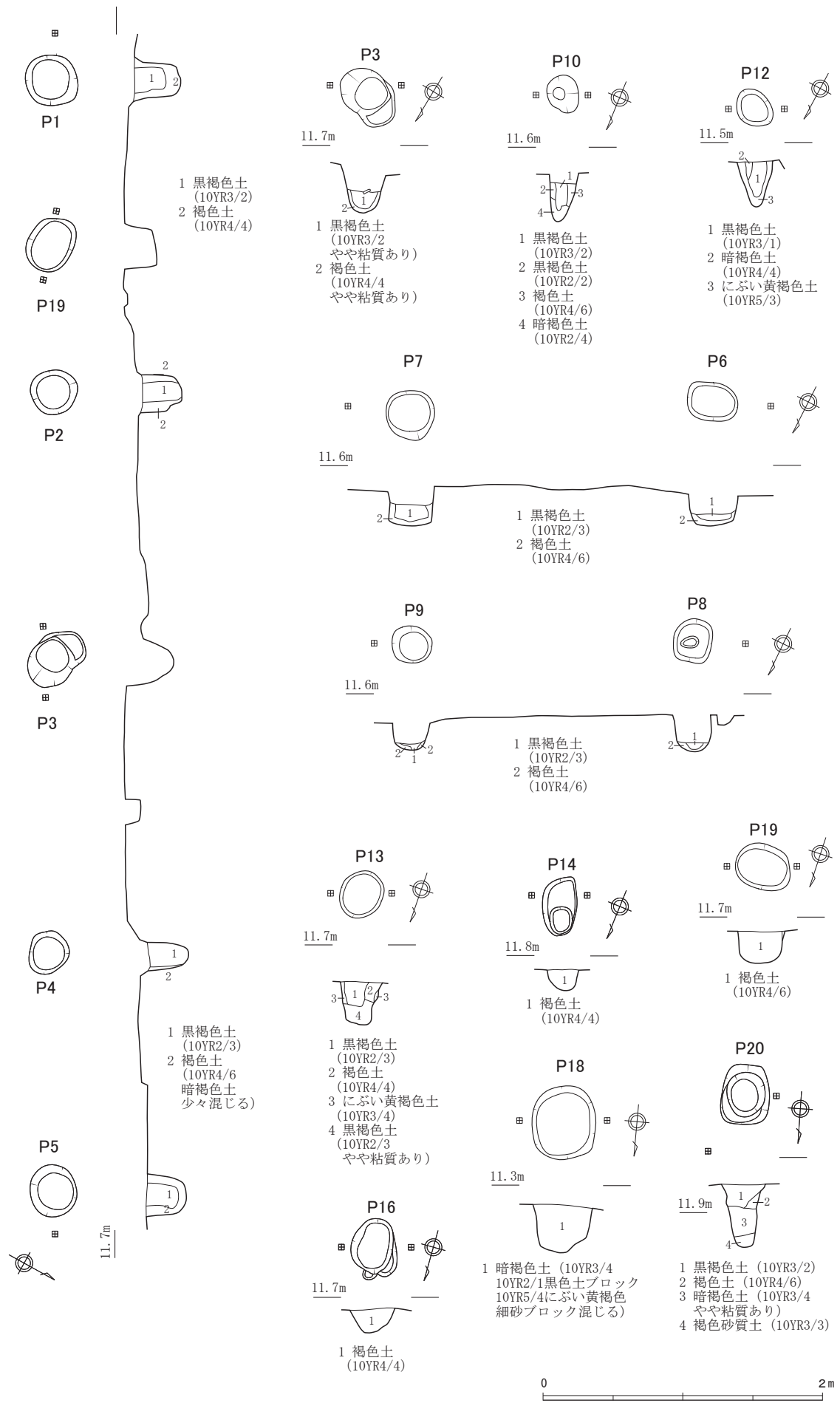
第41図 長池カチジリ遺跡調査区南部 (1/150)



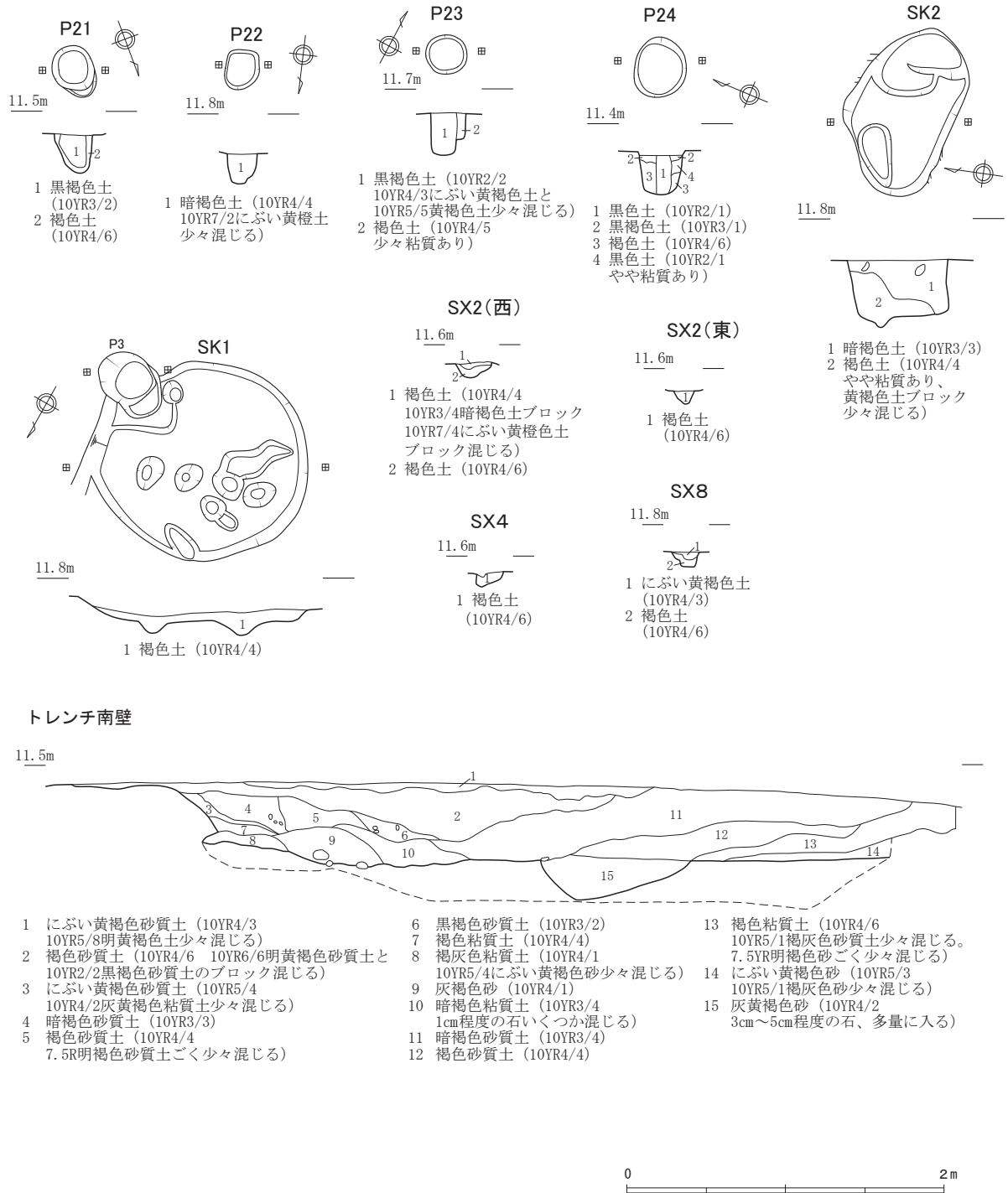
第42図 長池カチジリ遺跡掘立柱建物①(1/80)



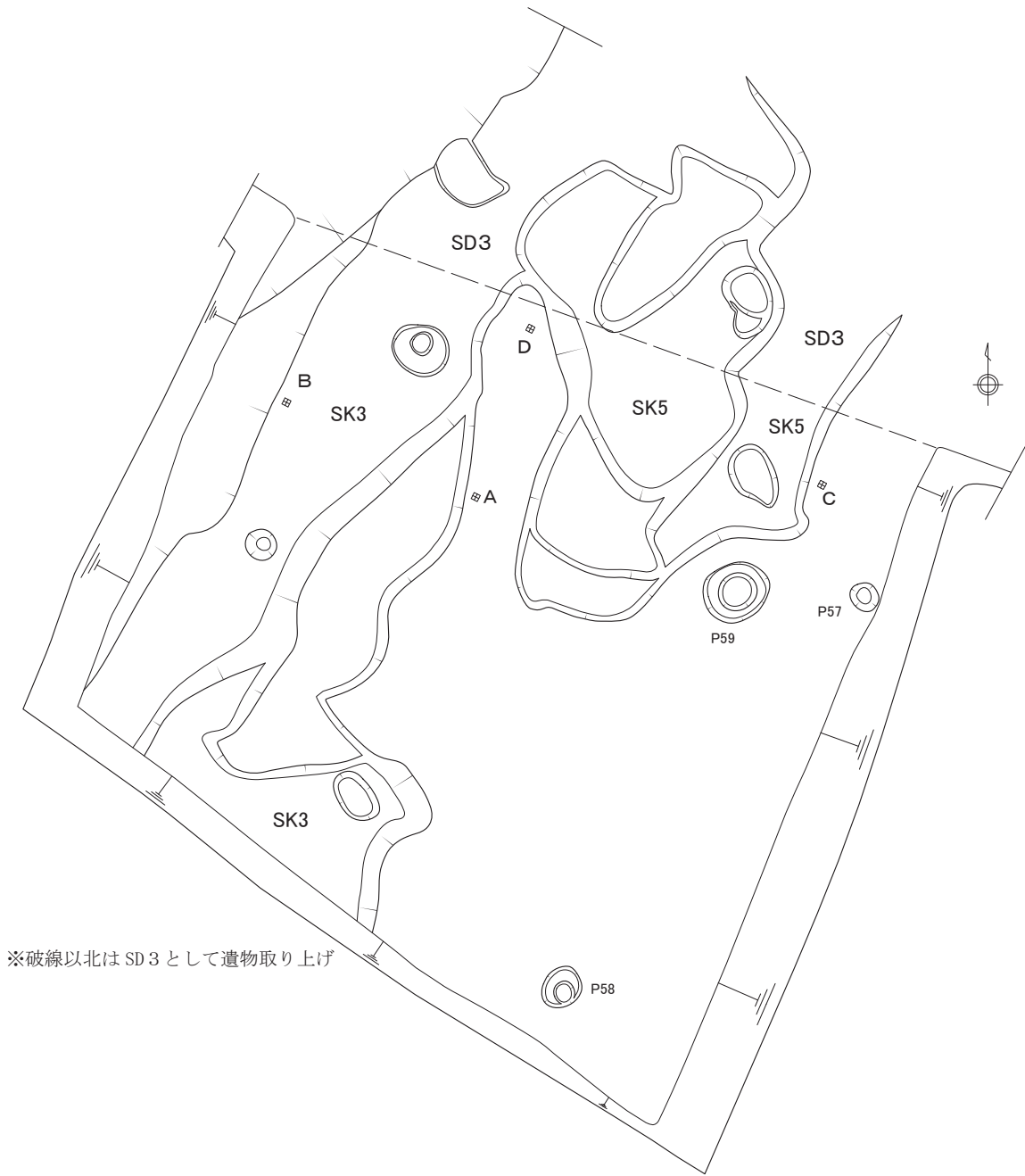
第43図 長池カチジリ遺跡掘立柱建物②(1/80)



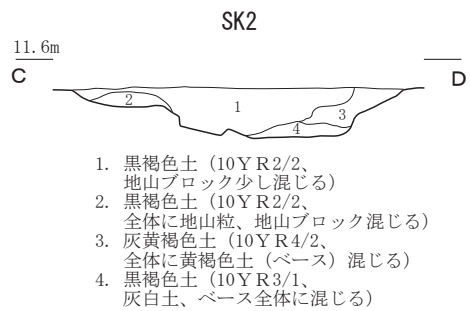
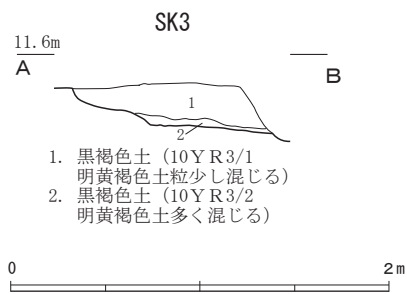
第44図 長池カチジリ遺跡(2011)遺構図①(S=1/40)



第45図 長池カチジリ遺跡(2011)遺構図②(S=1/40)



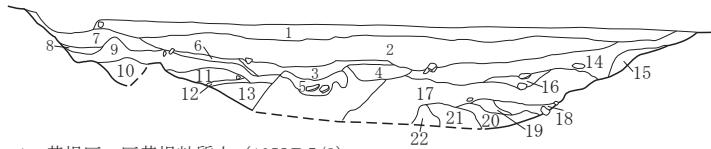
※破線以北は SD 3 として遺物取り上げ



第46図 長池カチジリ遺跡 (2012) 遺構図① (S=1/40)

SD1 (トレンチ5 西側)

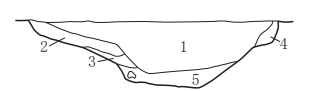
11.8m



1. 黄褐灰 灰黄褐粘質土 (10Y R5/2)
2. にぶい黄褐粘質 (10Y R4/3)
3. 灰黄褐砂質土 (10Y R4/2 灰白砂質土、全体に多く混じる)
4. 褐灰粘質土 (10Y R4/1 灰白粘質土混じる)
5. 黒褐粘質土 (10Y R3/2)
6. 灰黄褐粘質土 (10Y R4/2 黄灰色ブロック粘まばらに混じる)
7. 灰黄褐粘質土 (10Y R5/2 褐灰土粒、褐灰土、全体に混じる)
8. 黒褐粘質土 (10Y R3/1 黄灰色土少し混じる)
9. 灰黄褐色砂質土 (10Y R5/2)
10. 黒褐色粘質土 (10Y R3/1 褐灰砂少し混じる)
11. にぶい黄褐色砂質土 (10Y R5/3)
12. 黄灰粘質土 (2.5Y R4/1 黒褐色土粒全体に混じる)
13. 黒褐色粘質土 (10Y R3/1 灰白土粒、褐灰土混じる)
14. 灰黄褐色砂質土 (10Y R4/2 灰白砂質土全体に多く混じる (3層に似る))
15. にぶい黄褐色土 (10Y R5/3 褐灰砂少し混じる)
16. 褐灰色粘質土 (10Y R4/1 黒褐色土粒少し混じる)
17. 褐灰粘質土 (10Y R4/1 灰黄色砂質土下部に多く混じる。黒褐色土粘少し混じる)
18. 黄褐色粘質土 (2.5Y R5/3 黒褐色粒少し混じる)
19. 褐灰色粘質土 (10Y R4/1)
20. 黒褐色粘質土 (10Y R3/1 灰黄色粘質土全体に混じる)
21. 灰黄色砂質土 (2.5Y R6/2 地山か)
22. 黒褐粘質土 (10Y R3/1 木根の腐葉土か)

SD2

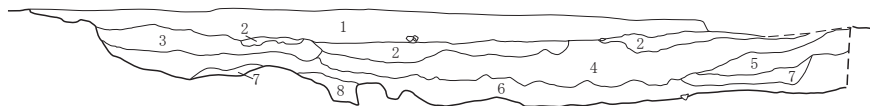
11.6m



1. にぶい黄褐色砂 (10Y R4/3)
2. 褐色砂質土 (10Y R4/2 地山ブロック・黒褐色土粒少し混じる)
3. にぶい黄褐色砂質土 (10Y R5/4 黒褐色砂質土少し混じる)
4. 褐灰色シルト (10Y R4/1 灰黄褐色粘質土ブロック全体に混じる)
5. 黒褐色シルト (10Y R3/3 灰黄褐粘質土・褐灰色砂少し混じる)

SD1 (西)

11.8m

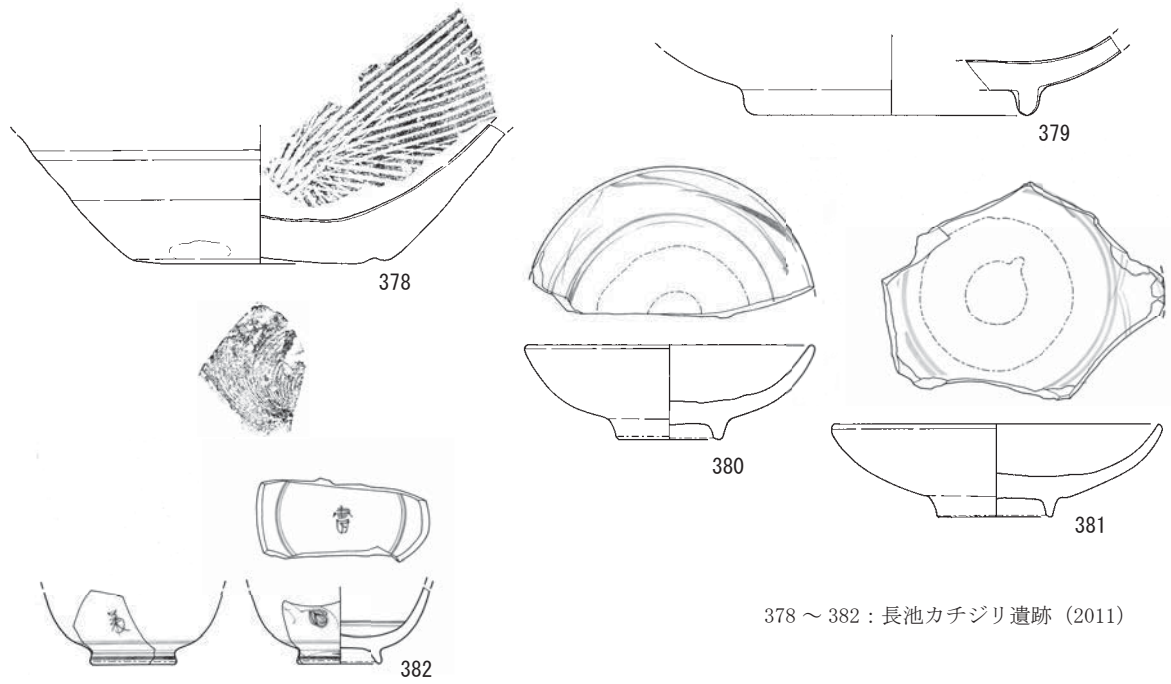


1. 褐灰色粘質土 (10Y R4/1、地山土、黒色粘質土混じる)
2. 黄褐色砂質土 (10Y R5/6)
3. 褐灰色粘質土 (10Y R4/1)
4. 褐灰色粘質土 (10Y R5/1)
5. 褐灰色粘質土 (10Y R6/1)
6. 褐灰色粘質土 (10Y R4/1、黒褐色粘質土多く混じる)
7. 褐灰色粘質土 (10Y R6/1)
8. 灰白色粘質土 (10Y R7/1、黒褐色粘質土混じる)

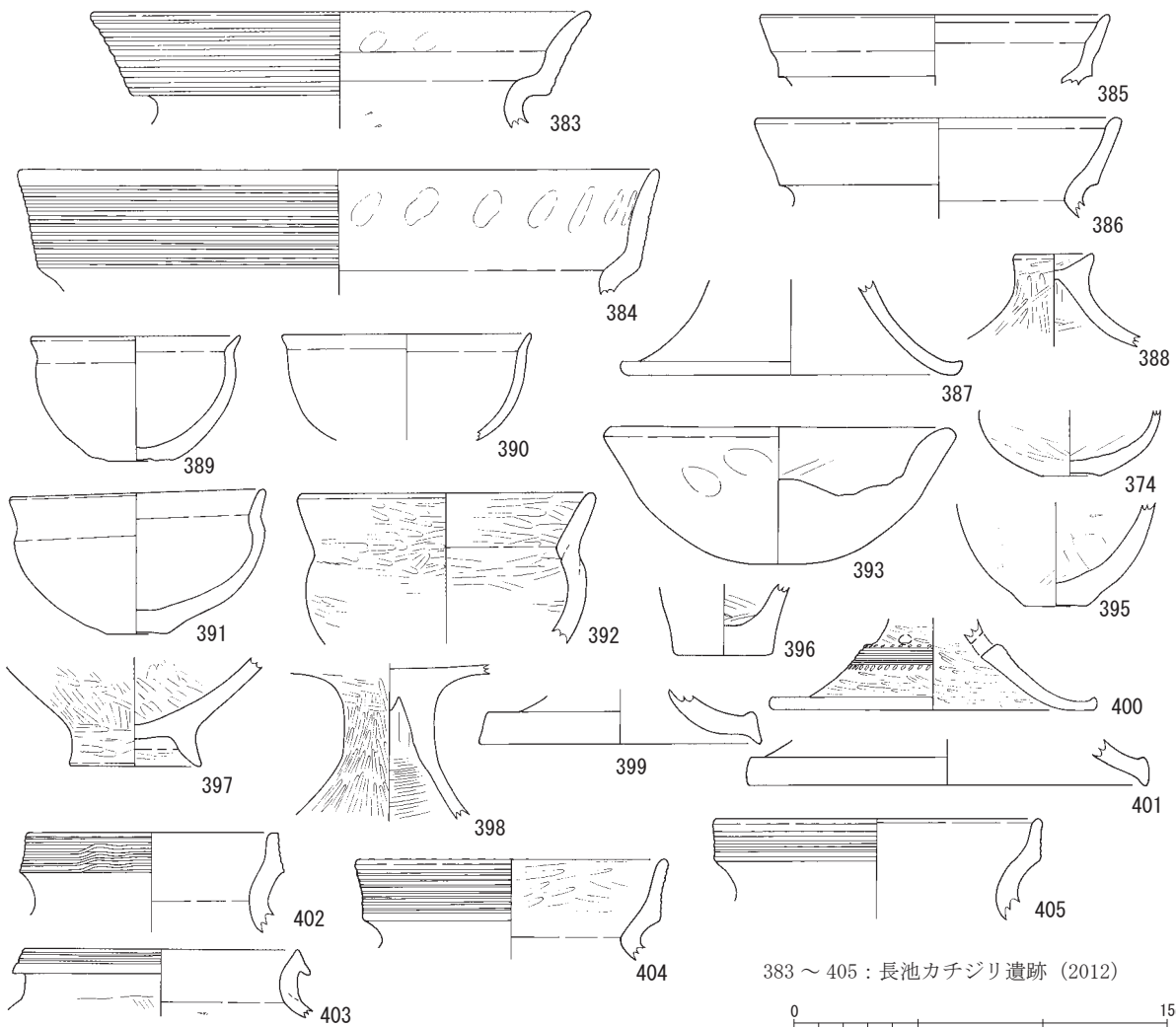
※1～8層は埋め戻し土
地山面にバックホーの爪痕あり。
SD1は土取り跡であろう。



第47図 長池カチジリ遺跡 (2012) 遺構図② (S=1/40)



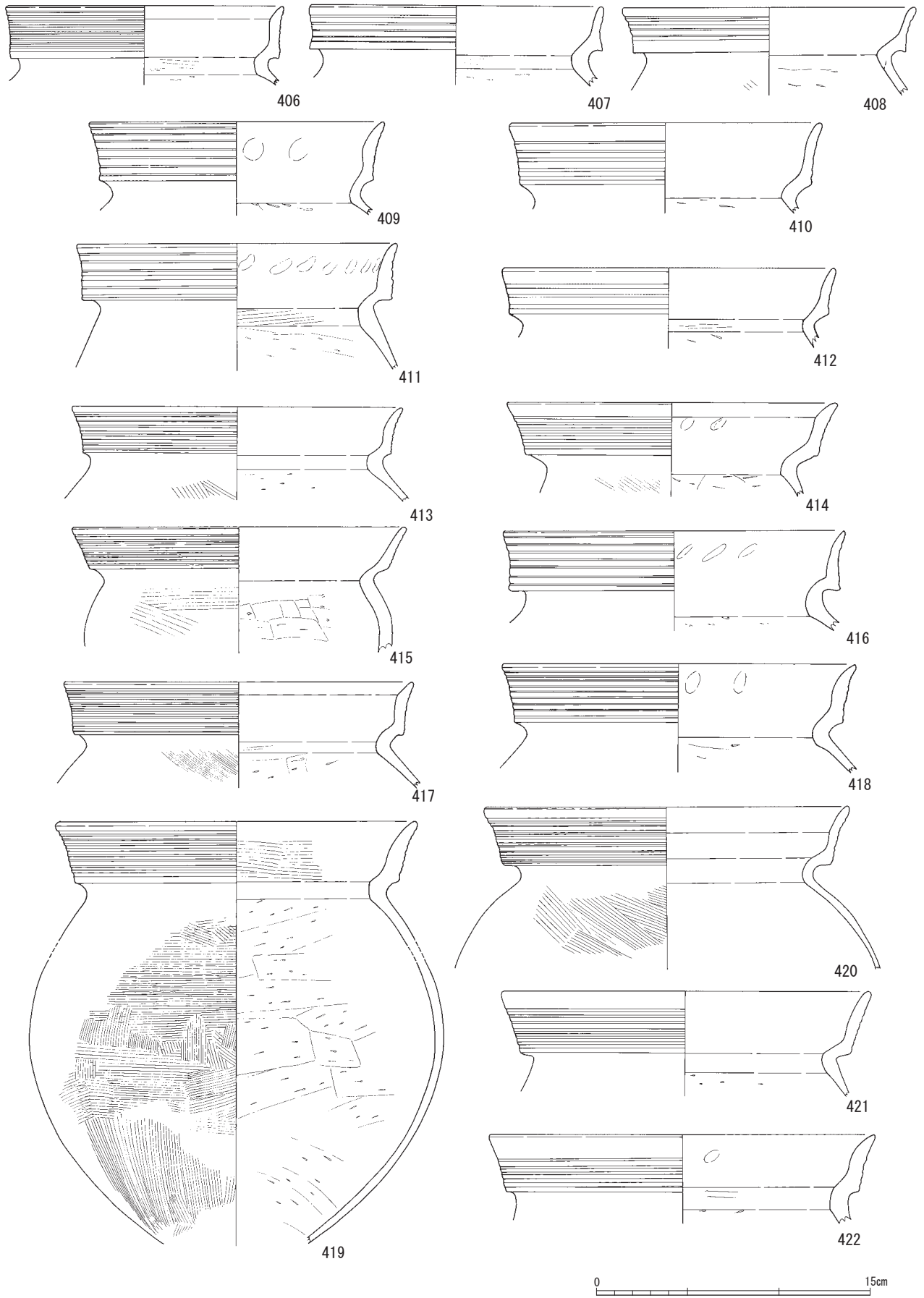
378～382：長池カチジリ遺跡(2011)



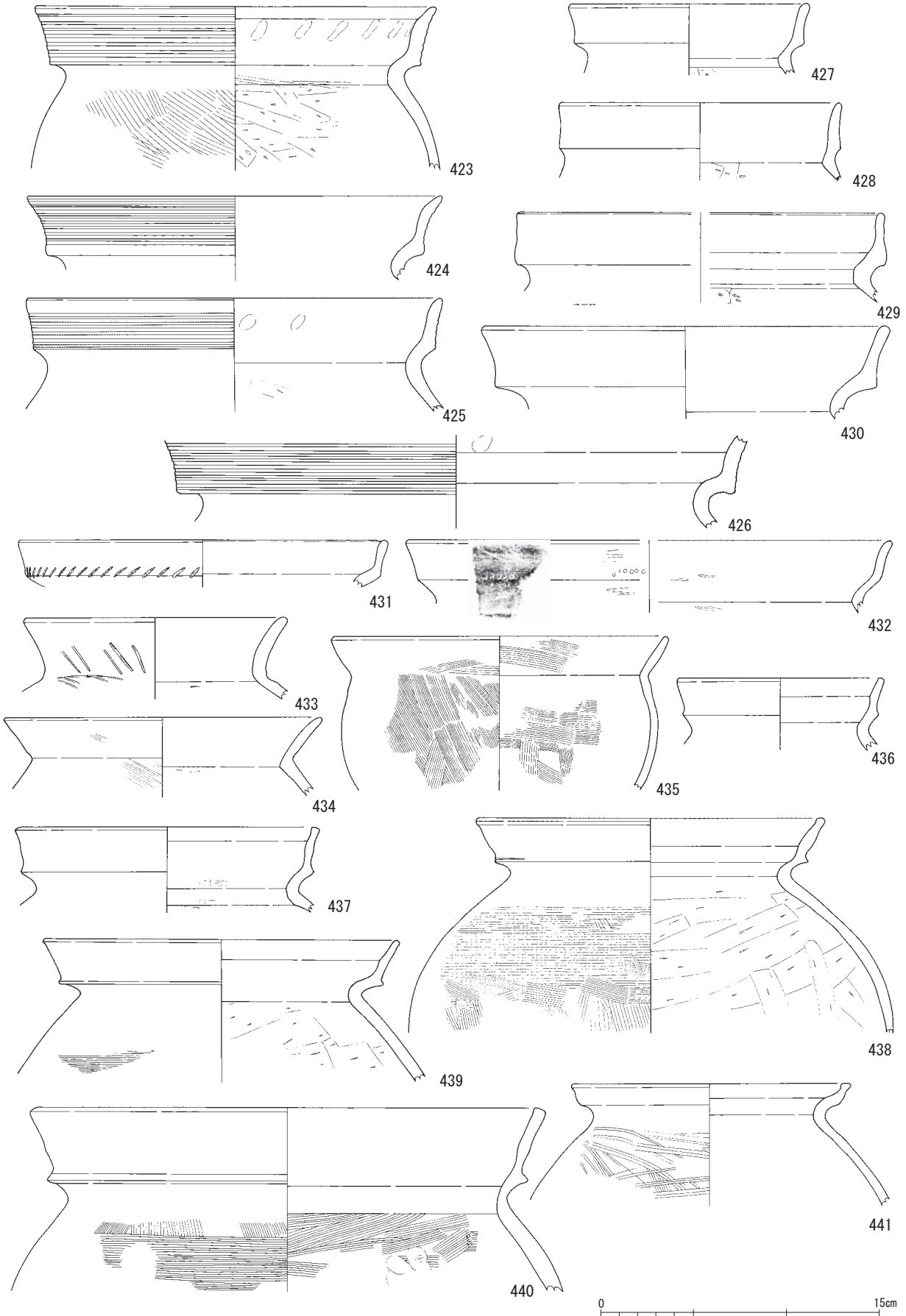
383～405：長池カチジリ遺跡(2012)

第48図 遺物実測図24 (S=1/3)

長池カチジリ遺跡 (2012) ②

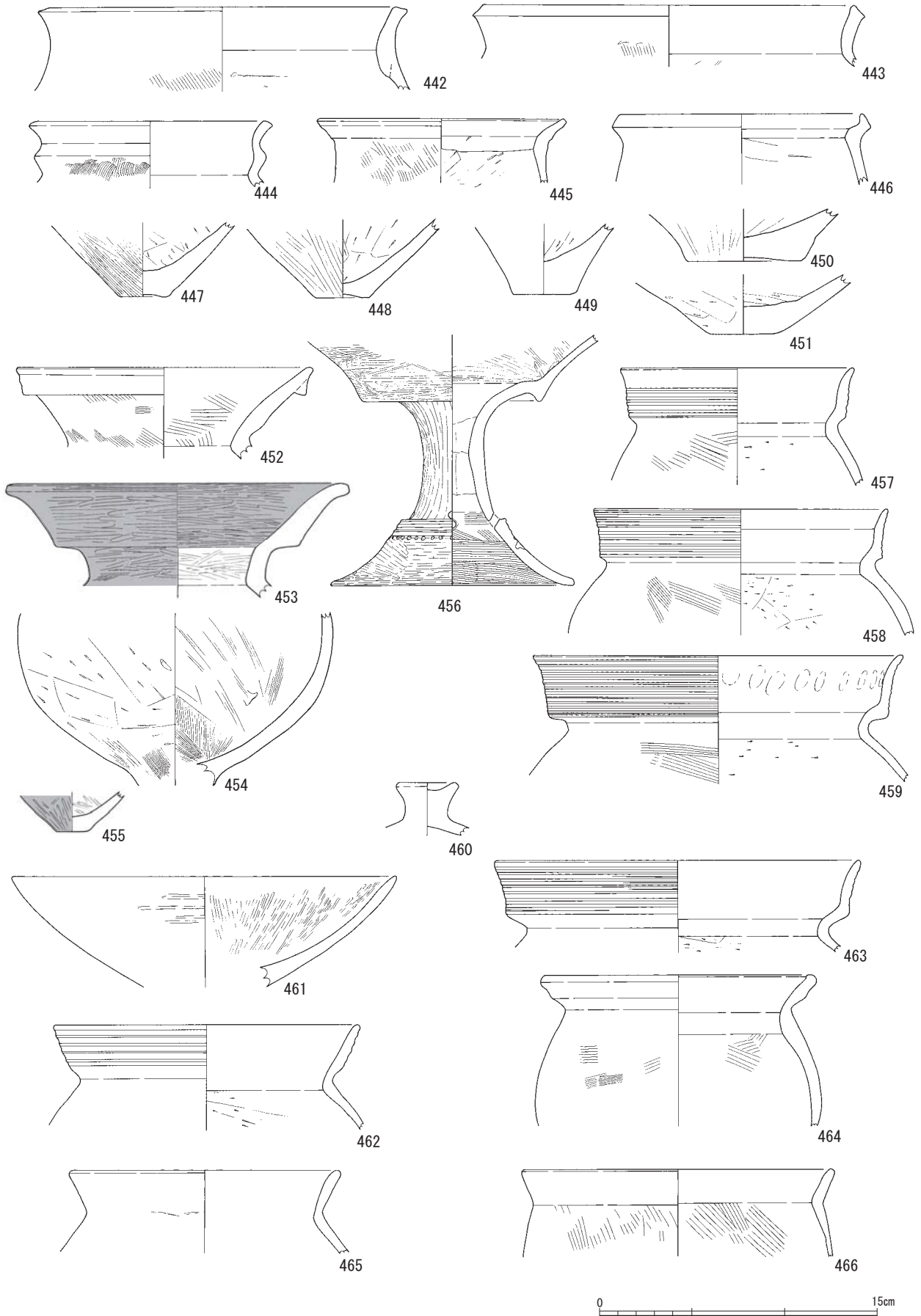


第49図 遺物実測図25 (S = 1 / 3)

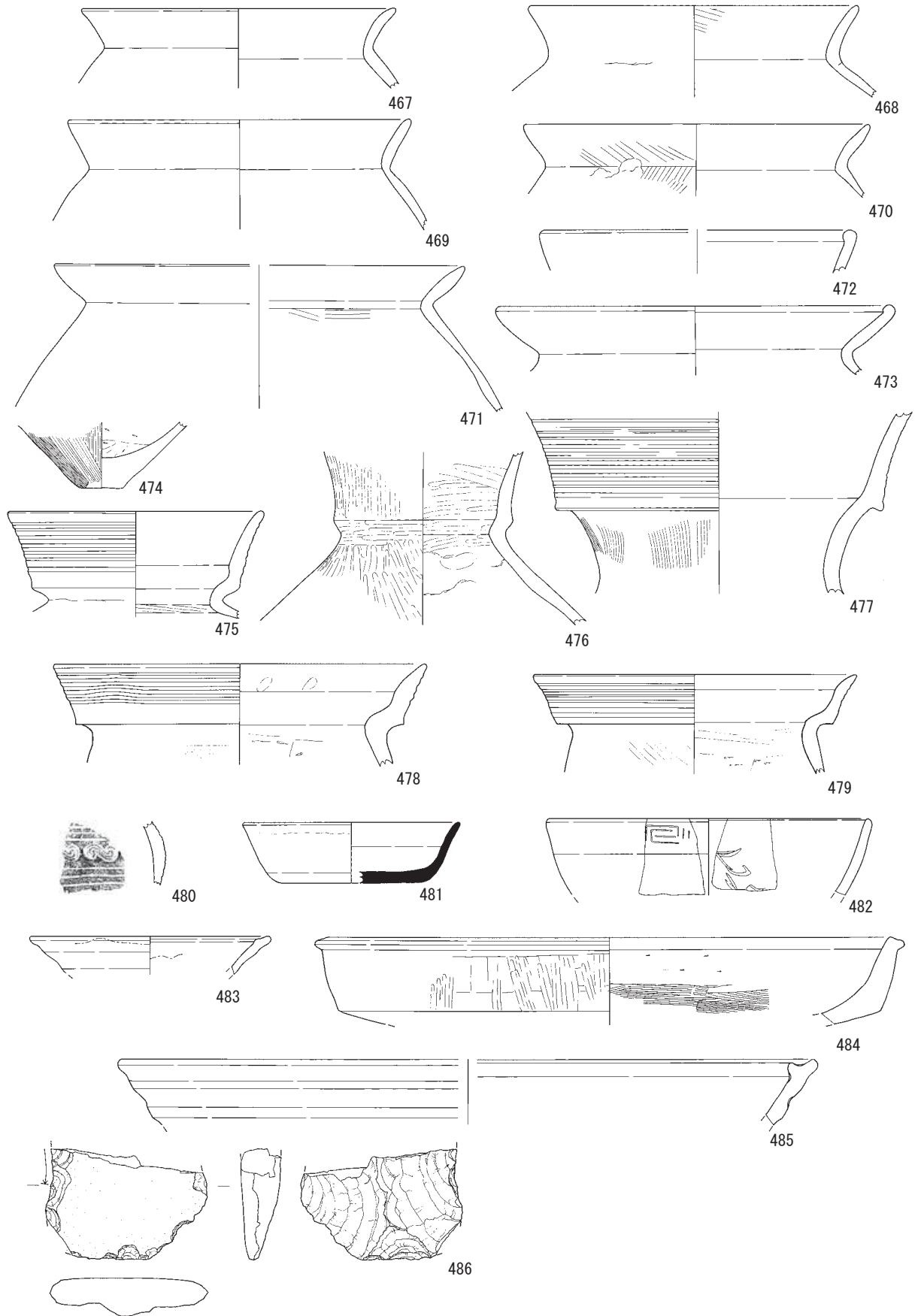


第50図 遺物実測図26 (S = 1 / 3)

長池カチジリ遺跡 (2012) ④



第51図 遺物実測図27 (S = 1 / 3)



第52図 遺物実測図28 (S = 1 / 3)

第5章 横江古屋敷遺跡の調査

第1節 調査区の概要

本書で報告する遺跡のうちで最も北に位置する。遺跡名に白山市の町名である「横江」を冠するが調査地は野々市市長池地内である。横江町地内に分布の中心を置く遺跡範囲が、安原川を挟んで野々市側へのびる部分であり、遺跡範囲の南東端部にあたる。

調査区の南北両端は安原川の旧河道とみられる部分である。トレンチ調査により年代等を確認している。これらに挟まれた範囲が黄褐色系シルトのベースが広がる部分で、古墳時代初頭頃のものも含むピット・溝・落ち込みなどが検出されている(第53図)。

第2節 遺 構

1. ピット(第56・57図)

遺物の出土があり番号を付したものは21基を数えるが、概して浅いものが多い。形状から柱穴と考えられるものはP2のみである。検出面では一辺40cm余りの方形、底面は径20cm前後の円形を呈し、深さは約80cm余り。土坑状のP1も深さ45cmに及び、平面形は長径80cm程の楕円形に復元できる。底面に深さ約20cmの小ピットが付属する。P3～6、10・11・13・15・16・18・19・20はいずれも深さ20cm未満の浅いものである。P8・9は調査区北部の安原川旧河道へ向けて傾斜する部分で検出されたものである。前者が灰黄褐色砂質土の上から切り込まれるのに対し、後者はそれを除去したのちに存在が判明したものである。長径80cmの楕円形を呈する土坑状のP21は深さが40cm余りである。

2. 溝(第55・57図)

調査区南東で北北西に向けて直線的にのびるSD1、それに西南西から直線的にのびてきたSD2がほぼ直交する。交差した部分から東側への短い張り出しがSD6、そこから北約2mでSD1から西側へ瘤状に張り出す部分がSD8である。なおSD1は北端をSX8に切られるが、そこから西に短くのびる部分がSD7となる。これら一群の溝は幅60～70cm、深さ10～15cmを標準とする。

一方、調査区南側の西寄りにはSD3・4・5が断続的に分布する。元来、一連の溝であった可能性も考え得る。幅20～30cmを標準とし、深さはSD3が25～30cmであるのに対して、他は10cm未満で浅い。

3. 落ち込み(第58・59図)

調査区には浅い(深さ10cm未満)大型の落ち込みがいくつかみられる。SX1は本体が330×260cm程の楕円形状の落ち込みで北西部に深さ18cmのピット状の部分が伴うほか、南側には約530cmにわたって幅60～70cmの溝状の部分が付属する。その溝状部分に切られる形のSX3は東西の延長320cm程が確認された。幅は広いところで1m近くに及ぶ。東側が調査区外となるSX8は南北340cm程で、東西については270cm余りが検出されている。覆土は単層(にぶい黄褐色粘質土)。SX2は長さがほぼ3mで、幅1m前後である。

また、形状が土坑状をなす落ち込みもいくつかみられる。SX5は長さ228cm、幅88cmを測り、深さは10cm余りで、底部に深さ数cmのピットが伴う。

またSX6は長さ152cm、最大幅94cm、深さは25cmである。

その他、溝の残欠状の落ち込みもみられる。弧状で北端が2条に枝分かれますSX7は深さがせいぜい10cmと浅い。SX9・10・13は安原旧河道の肩部周辺で検出されたものであり、それに関連するものと推測される。

4. 安原川旧河道(第57・60図)

先述のとおり、調査区の南北両端で確認されている。北部のトレンチ1では南西コーナーを中心に、西壁と南壁の土層を記録している。トレンチ内では約1mで川底の砂礫層に達することが判明しているが、河道の西岸を把握していないため、それが最深部の深さかどうかは不明である。川底付近に弥生時代終末～古墳時代初頭頃の土器を包含する土層がみられるが、このことは旧河道の年代を示すものではなく、近代の耕地整理以前に肩部に存在した包含層が河川の浸食により崩壊したことによると推定される。河道の年代を示す資料については次節で触れたい。

また、南部の旧河道についても調査区西南端部付近の西壁際のトレンチで土層を記録している。西壁の現在高からは約150cm、北岸の検出面となるベースからは70～80cmで川底の砂礫層に達する。ここでも底部付近で弥生土器(古式土師器)がみられるが、二次的な混入と判断したい。

第3節 遺 物

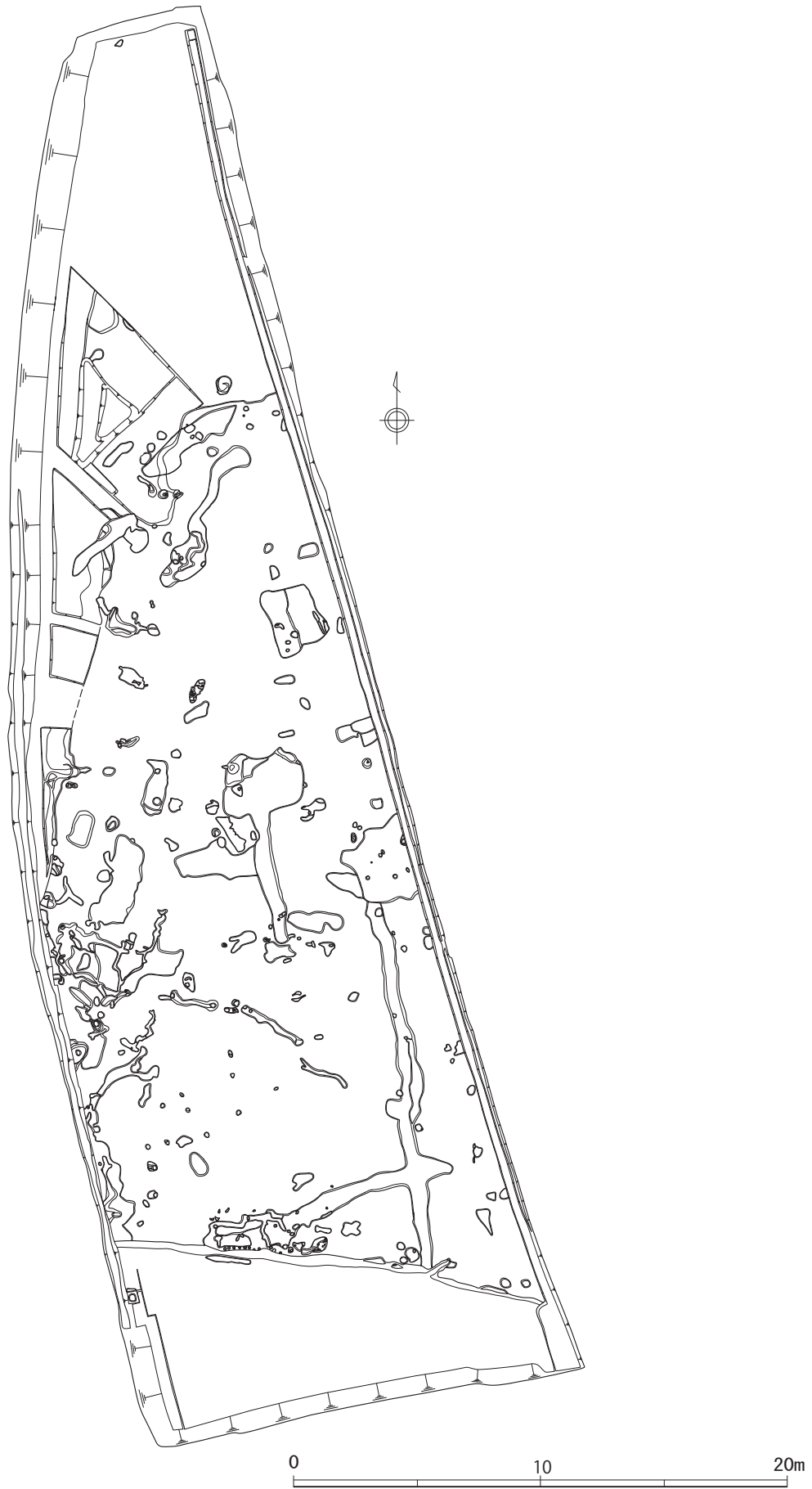
1. SD1 出土土器(第61図487～491)

487・488は甕である。487は全形がわかる資料で、口縁形態は受口状で端部は水平な凸面をなす。胴部外面と内底面周辺にハケ、胴部内面にケズリがみられ、底部は厚手の平底である。また頸部から肩部にかけて左下がりのラフなタッチの斜行する沈線が平行して付されることも特徴的といえる。488は月影式系で、有段口縁に擬凹線がめぐり、端部は尖縁である。

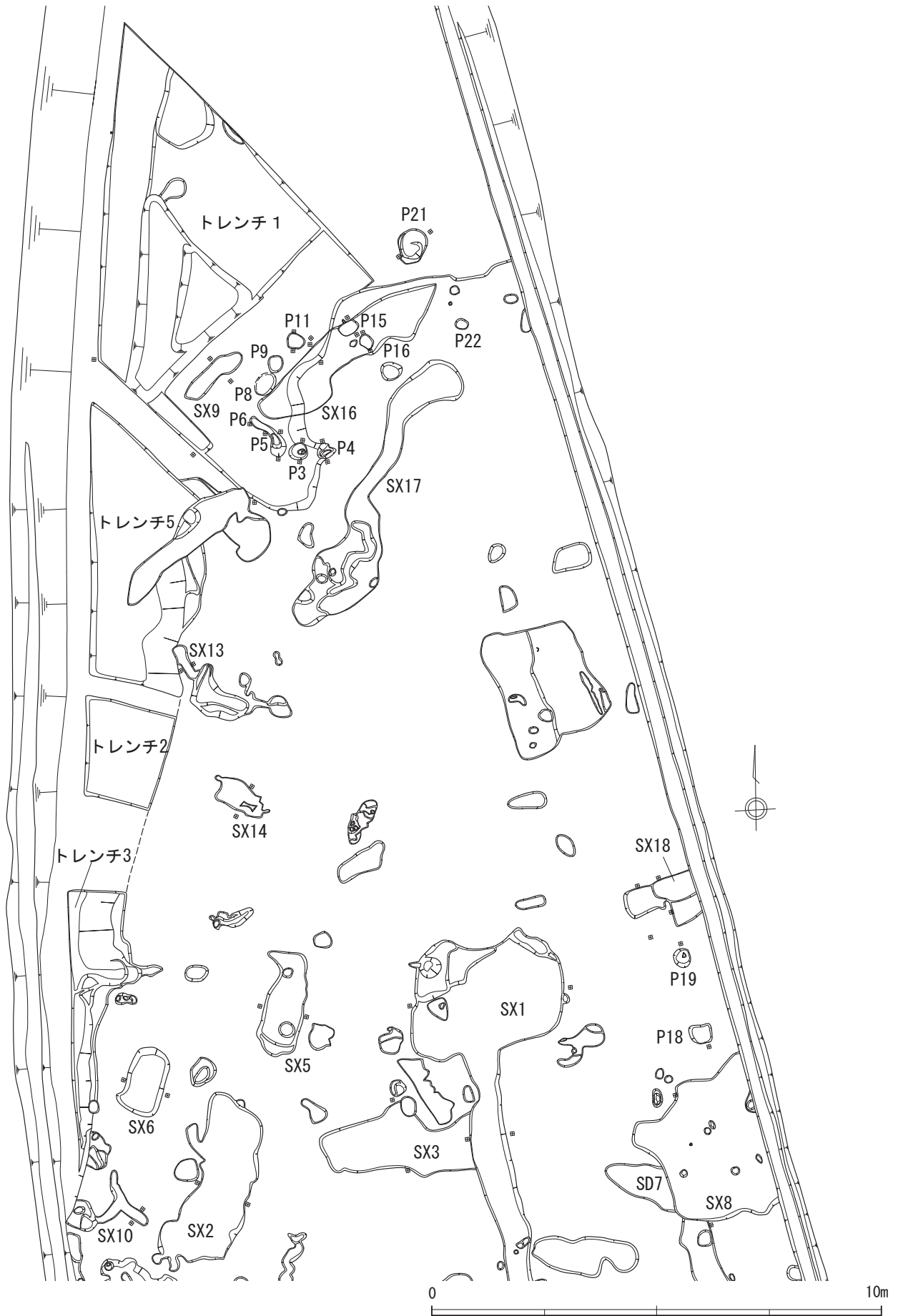
489～491は壺である。口縁が直線的に開く489では頸部外面に簾状文が1段めぐり、その下に櫛状具先端によるキザミ、さらにその下に櫛描波状文が施される。東海地方に系譜をもつとも考えられる。490は器高に比して長めの有段口縁をもつ壺で、偏球形の胴部に脚台が付く。491は筒状の短い頸部から開く口縁部が有段となるもので、口唇にキザミ、段部外面に円形の刺突がめぐらされている。また、口縁端部の内側には重弧文風の文様もみられる。

2. 旧河道出土資料(第61図492～495)

494を除き北部のトレンチ1からの出土品で、492は珠洲焼の鉢、493は灰釉がかかった陶器の折縁大皿、495は磨製石斧である。南部の旧河道から出土した494は肥前磁器のいわゆる染付の蓋である。



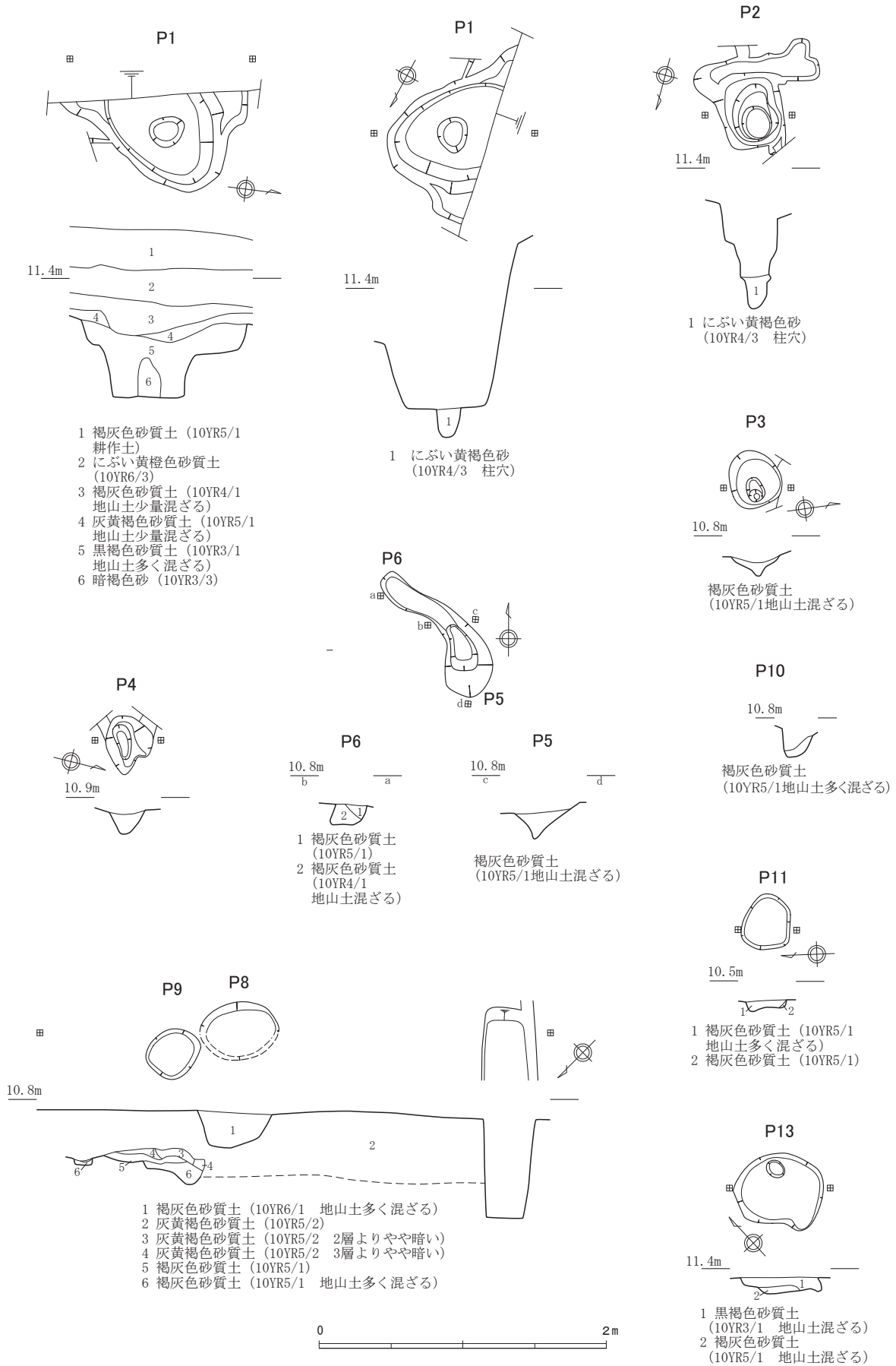
第53図 横江古屋敷遺跡調査区全体図(1/250)



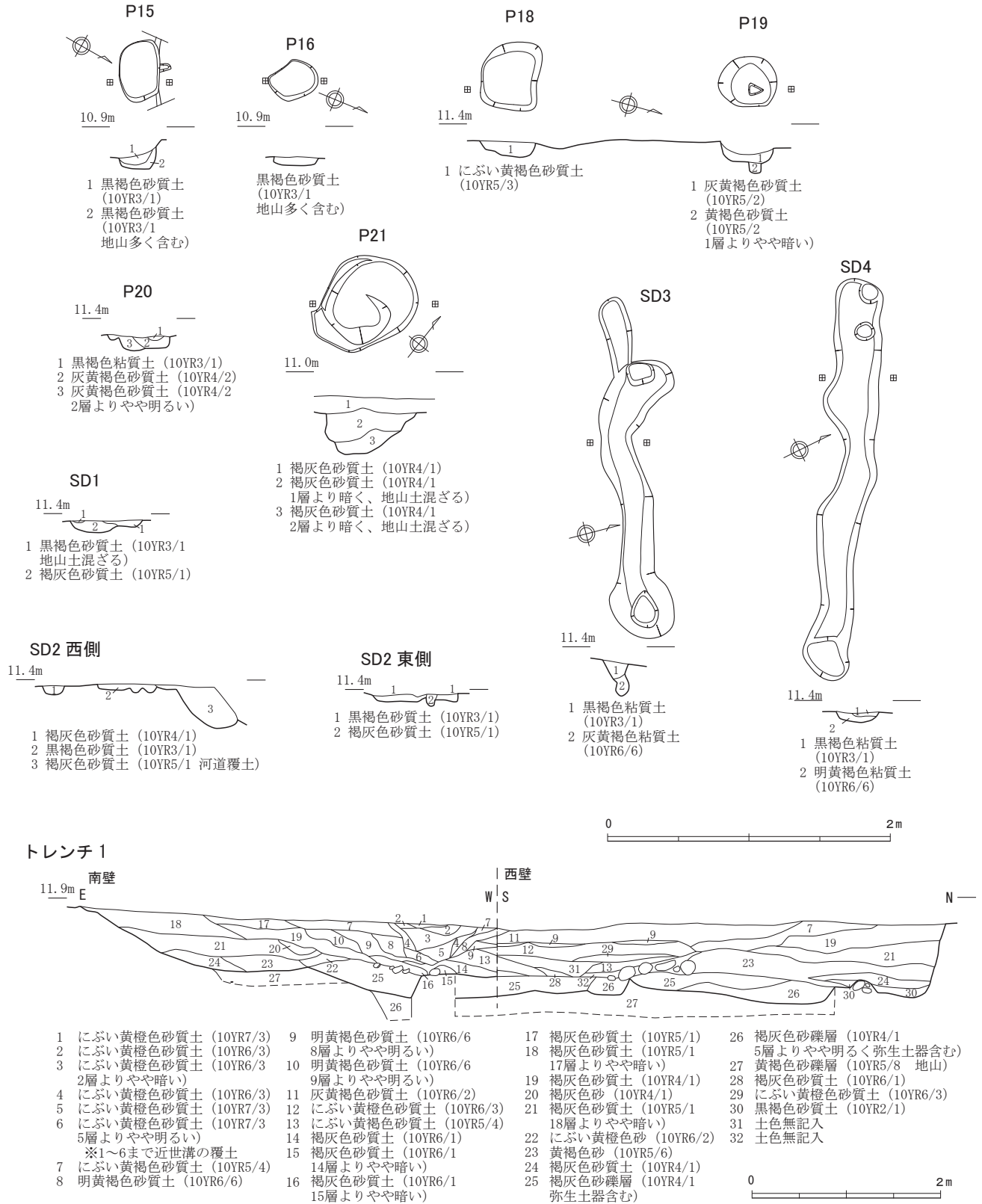
第54図 横江古屋敷遺跡調査区北部(1/120)



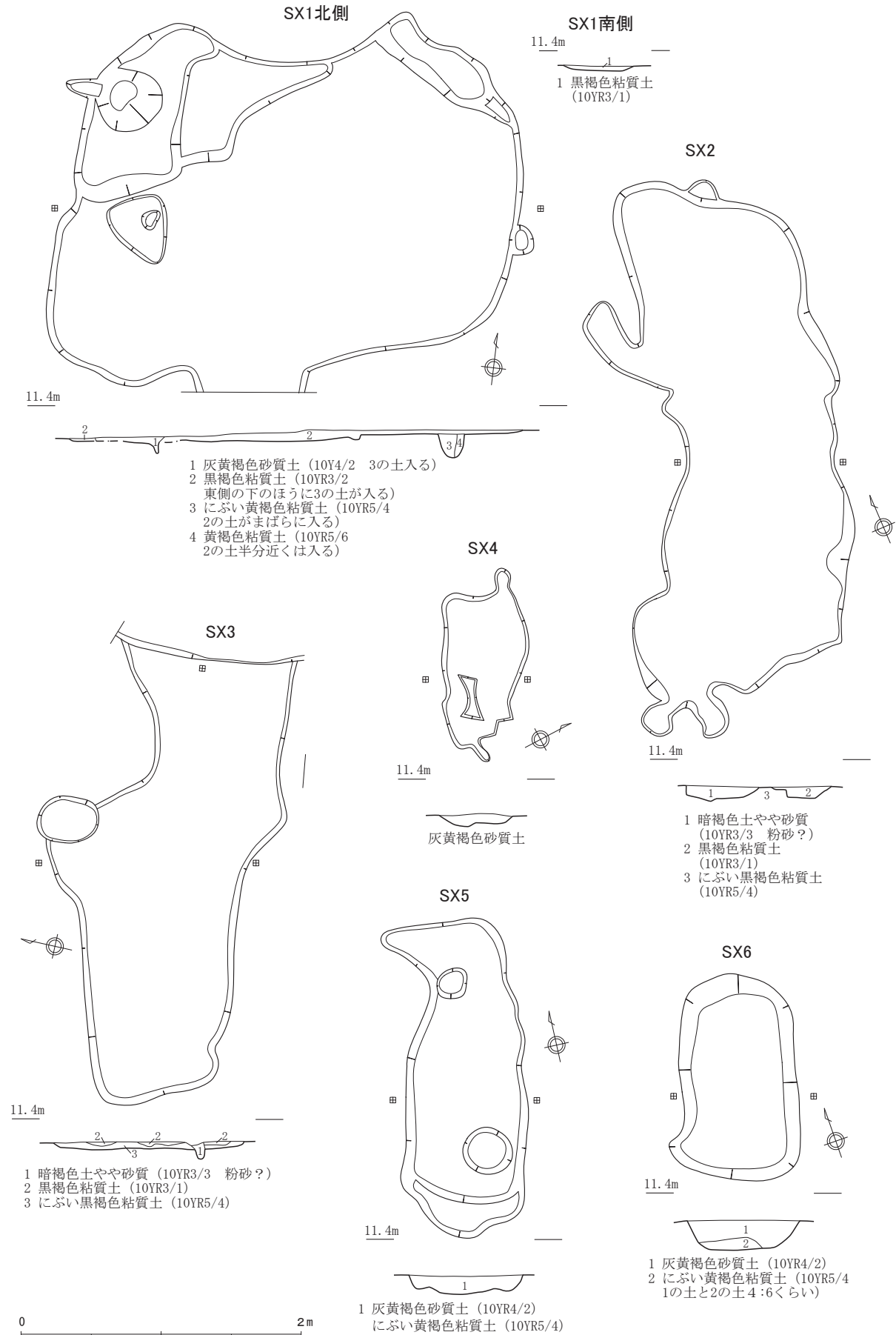
第55図 横江古屋敷遺跡調査区南部(1/120)



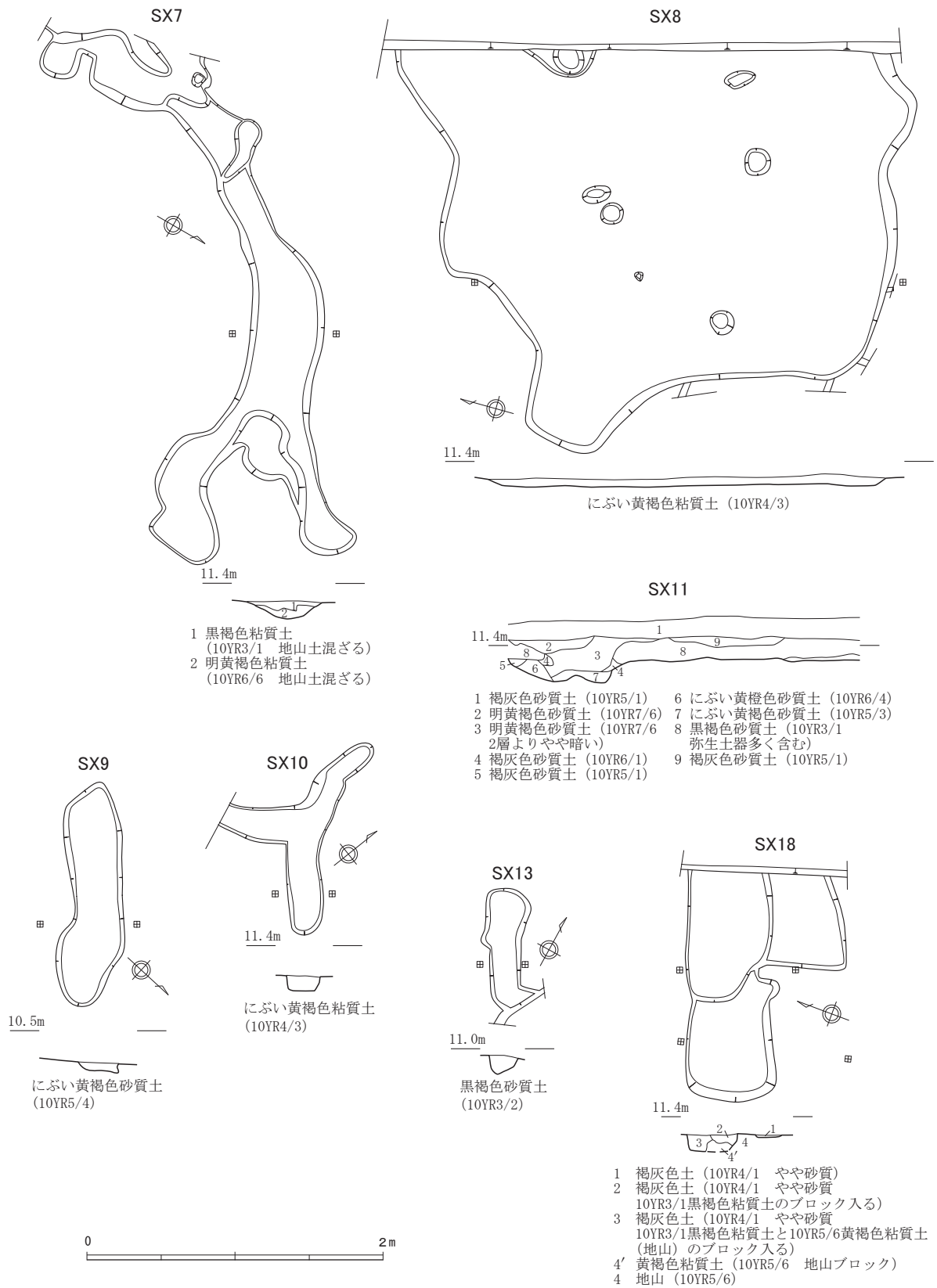
第56図 横江古屋敷遺跡遺構図①(S=1/40)



第57図 横江古屋敷遺跡遺構図② (S=1/40、1/60)

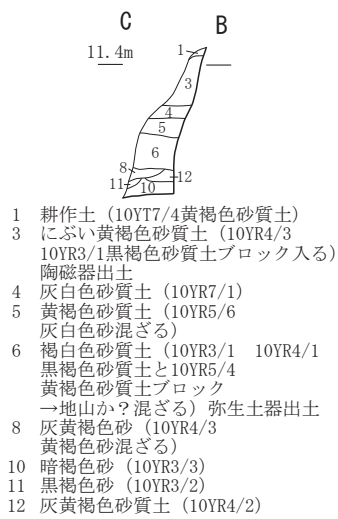
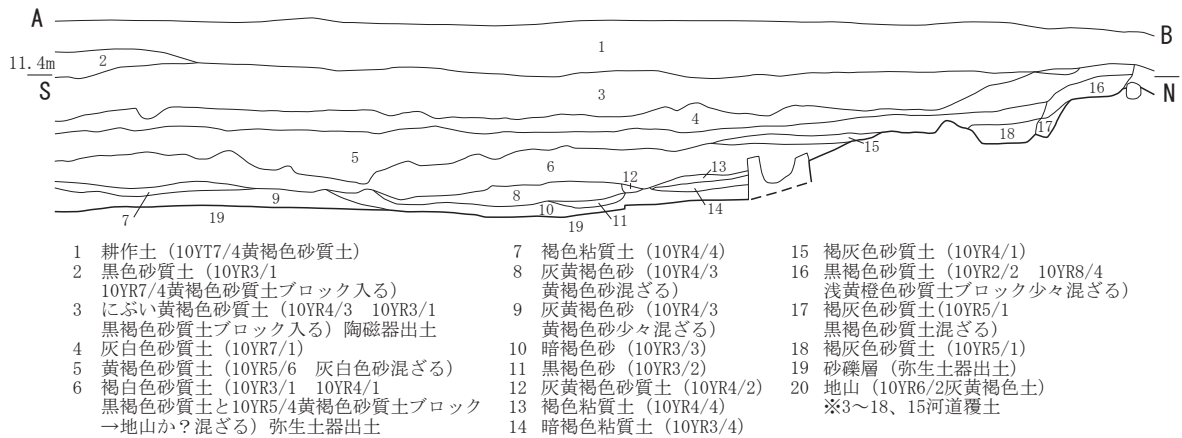


第58図 横江古屋敷遺跡遺構図③ (S = 1/40)



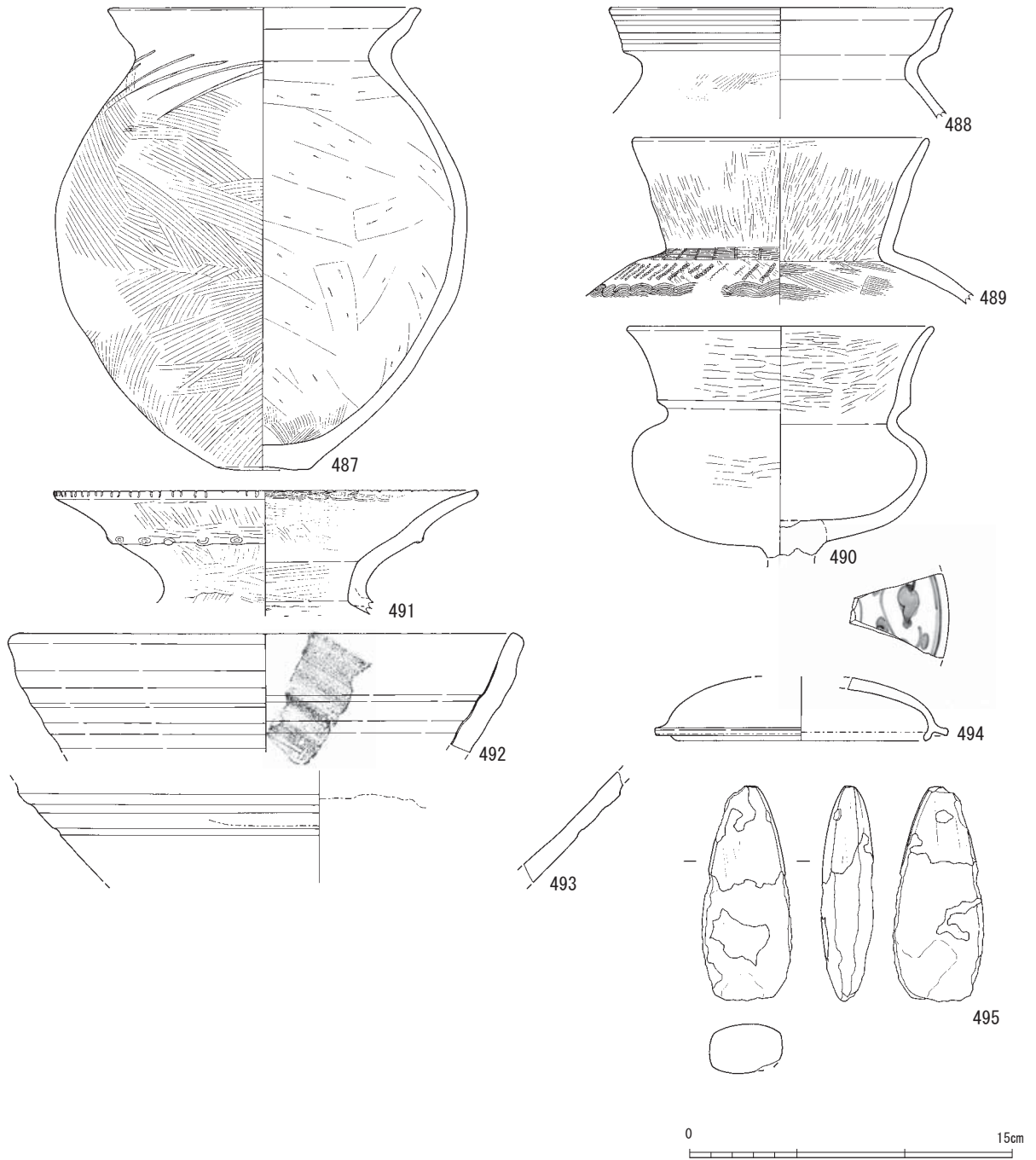
第59図 横江古屋敷遺跡遺構図④(S=1/40)

調査区西壁 (南端部)



第60図 横江古屋敷遺跡遺構図⑤(S=1/60)

横江古屋敷遺跡 (2011)



第61図 遺物実測図29 (S = 1 / 3)

第6章 まとめにかえて

第1節 今回の調査成果について

長池ニシタンボ遺跡

竪穴建物が3棟検出されている。そのうち、床面の掘り込みが明瞭なものはSI1のみである。2本主柱で、床面積は24㎡程度と推定される。端部丸縁で短い有段口縁の甕、高杯・器台の特徴から弥生時代後期後半の法仏式に位置付けられる。床面の掘り込みは認められないが、壁周溝を伴うことからSI2も竪穴建物とした。4本主柱で床面積は50㎡を超える。年代については外周溝SD3出土資料のうち古相を呈する南東部の一群(第32図)が参考になろう。端部丸縁を基調としつつも外反の度合いが小さな有段口縁の内面に指頭圧痕がめぐる甕、短めの棒状脚の裾部が有段となる高杯の特徴などから月影式の初頭前後とすべきであろう。構築年代もそれに近いと考える。残るSI3は床面の掘り込み・壁周溝ともに認められないが、SI2との一連性、類似性から異論を承知で竪穴建物に措定した。4本主柱で切り合いからSI2より新しいことが判明している。外周溝SD10出土資料から弥生時代終末(月影2式頃)と考えられるが、近接するSD11から小型器台が出土していることから、存続期間が古墳時代初頭に降る可能性も残る。

掘立柱建物は平成24年度に検出されたSB1のみである。年代は同調査区の遺物から法仏～月影式に収まるであろう。布掘建物は検出されなかった。

また、この遺跡の調査成果を特徴付けるものとして溝SD1に廃棄された土器群をあげることができる。当初SD1はSI2外周溝SD3の排水先としての機能を有したが、土器の廃棄を伴いつつ順次埋積が進んだと考えられる。層位ごとに取り上げを行ったが、層を越えた接合例もみられ、下位の層から上位の層に行くにしたがって廃棄年代が新しくなる傾向があるとしても、層を単位とする一括性までは認められない。

高杯では口縁端部が水平にのびる第26図209・210が古い特徴を残す一方、体部が退化した有段鉢形の杯部を有する第16図9・第25図189や杯底部が平坦な第16図10などは新しい一群といえる。器台では大きく開く器受部に短い直立ぎみの口縁が伴う中型器台である第16図7・8が全形の判明する資料である。結合器台としては第21図85があげられる。小型器台は確認できない。

壺では細頸壺第30図271が古い段階に位置付けられ、有段口縁の第29図267はそれに後出する。第24図179、第25図201・203、第29図262～264など、口縁部内外面にハケ調整を施す広口壺が多くみられる点もこの溝の特徴といえる。甕は有段口縁のものが主体で、直立ぎみの短い口縁で端部が丸縁のものから、尖縁で外反し内面に指頭圧痕がめぐるものまでバリエーションに富む。また第24図165～170など口縁端部を面取りする、いわゆる「能登型甕」も含まれる。以上の特徴からこの溝に土器が廃棄された期間は法仏式後半から白江式前半に及ぶと考えられ、それは概ねSI2・3の存続期間と重なると推定される。

なお、中世後半～近世にかけては、用水路・NR1と安原川旧河道・NR2が検出されている。

長池カチジリ遺跡

南北を安原川旧河道に挟まれた中央部に掘立柱建物群が検出されている。調査時に6棟と把握されたが、調査担当者の所見では柱穴の並び・揃い等から、そのうちの3棟(SB3・5・6)は確実性に欠ける

とのことで、第43図では破線で表示した。

これらの建物群の年代はSD2・3・5の遺物から導くことができると考えられる。SD3（第51図456～459）は甕口縁部や器台の特徴から弥生時代終末の月影式期に位置付けられよう。SD2（第48図387～第51図455）は月影式系の有段口縁の甕が主体を占めるものの、山陰系（436～440）、近江系（441）、「能登型甕」（442・443）が含まれ、総体としてのピークは古墳時代初頭の白江式とみるべきであろう。SD5（第51図460～第52図477）は口縁がくの字形のものが主体を占め、それに端部内面を肥厚させる布留式系の甕が加わる。また東海系の高杯（461）も出土しており、古墳時代前期といえよう。以上から建物の年代は弥生時代終末から古墳時代前期にかけてであろう。上記の長池ニシタンボ遺跡と比較して掘立柱建物を主体とする建物構成への転換は古墳時代初頭とも考えられるが断定はできない。

横江古屋敷遺跡

土坑状の落ち込みや溝が検出されたが、建物は確認できなかった。溝・SD1出土資料（第61図487～491）には東海系の二次的影響で受け加飾されたとも考えられる壺が2点（489・491）みられ、古墳時代前期まで機能したと理解される。

第2節 いわゆる外来系土器について

弥生時代から古墳時代への転換を特徴付ける歴史事象として、古墳の出現とともにいわゆる外来系土器の問題が指摘されて久しい。本書所収の3遺跡周辺でも弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて数多くの集落遺跡が知られ、また御経塚シンデン古墳群やさらに横江古屋敷遺跡でも古墳の存在が明らかになっている（第4図）。

本書で扱う3遺跡からも古墳時代初頭から前期にかけての外来系土器が出土している。しかし30枚近くの遺物図のなかに散在するかたちで掲載されている状態である。検索の便に供するため、ひとつの図（第62図）にまとめることとした。遺漏もあるかもしれないが、ご叱正願えれば幸いである。

能登型甕（第19図57、第24図165～170、第51図442・443）

口縁端部に面取りを施すもので、長池ニシタンボ遺跡のSD1上層から57、165～170が出土している（57のみ上層土器集中）。概して頸部の屈曲が弱いものが多いが、口径が大きい169・170は屈曲が明瞭である。SD1では山陰系の甕は確認されておらず、その出現以前の資料である可能性がある。一方、山陰系（後述）が伴う長池カチジリ遺跡SD2の例（442・443）では口縁が直立ぎみとなる。

山陰系の甕（第50図436～440）

口縁下端外面が突出して内面側が凹線状にくぼみ、端部に外傾する面がみられる。長池カチジリ遺跡SD2でまとまって出土している。438は球胴となる。

近江系の甕（第50図441）

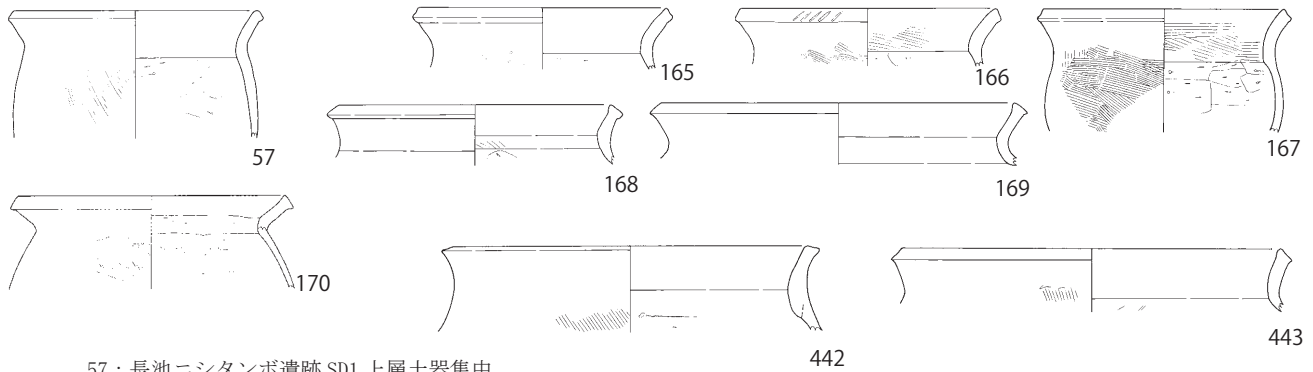
上述の長池カチジリ遺跡SD2から能登型甕・山陰系の甕とともに出土している。短い受口状の口縁部が伴う。胴部のハケ調整のタッチからも近江系と考えられる。

東海系の壺・高杯（第16図1・第31図280、第51図461、第61図489・491）

長池ニシタンボ遺跡からは口縁端部を断面三角形状に肥厚させ、直立する端面に綾杉状の刺突を施す壺の口縁部が出土している（1・280）。長池カチジリ遺跡SD5からは内湾しつつ大きく開く高杯杯部461が出土している。横江古屋敷遺跡SD1からは東海系の影響を受けて飾られたと推定される壺489・491が出土している。

布留式系の甕 (第52図472・473)

内湾する口縁部の端部内面を短く折り曲げるように肥厚させものが2点、長池カチジリ遺跡SD5から出土している。

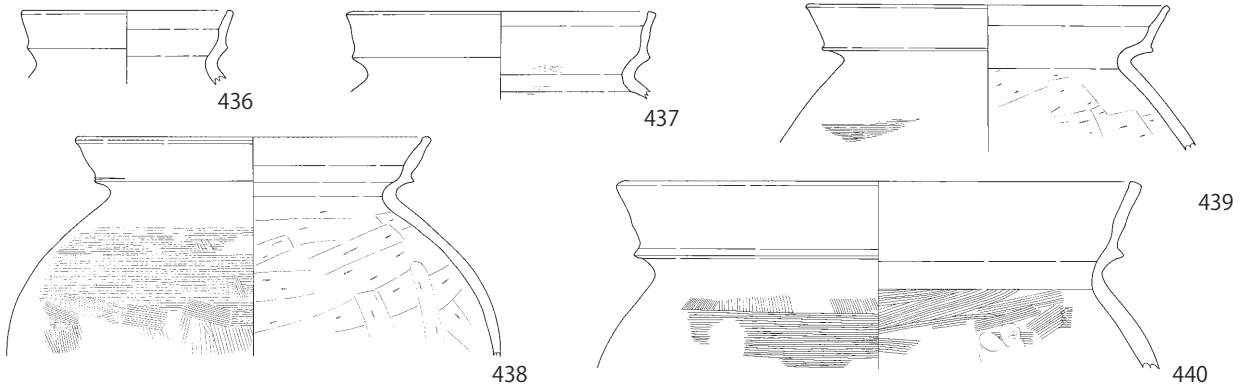


57 : 長池ニシタンボ遺跡 SD1 上層土器集中

165 ~ 170 : 長池ニシタンボ遺跡 SD1 上層

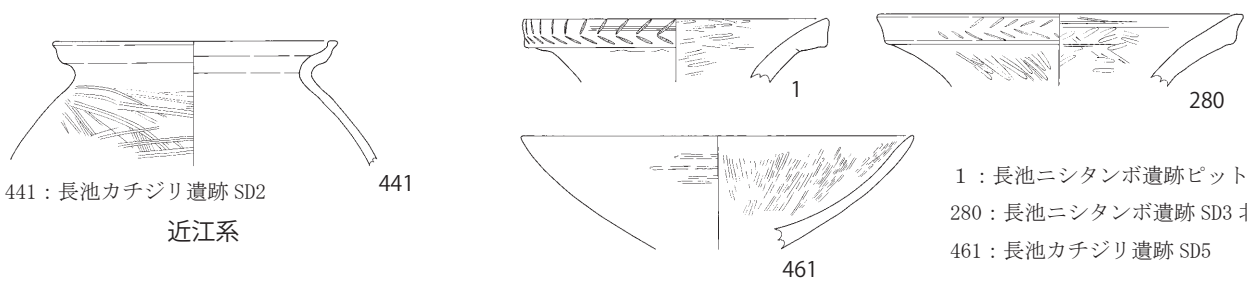
442・443 長池カチジリ遺跡 SD2

能登型甕



436 ~ 440 : 長池カチジリ遺跡 SD2

山陰系



441 : 長池カチジリ遺跡 SD2

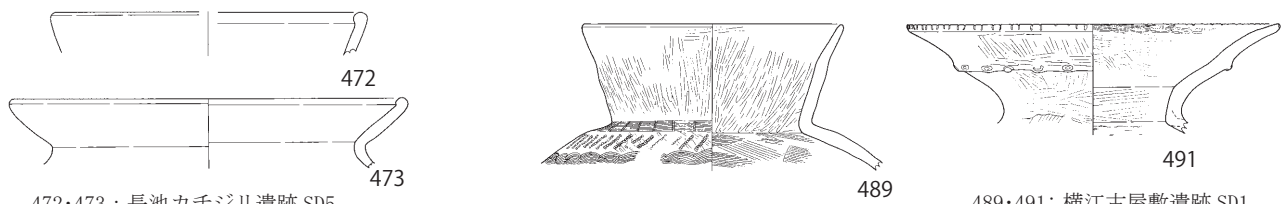
近江系

1 : 長池ニシタンボ遺跡ピット5

280 : 長池ニシタンボ遺跡 SD3 北部

461 : 長池カチジリ遺跡 SD5

東海系



472・473 : 長池カチジリ遺跡 SD5

布留式系

489・491 : 横江古屋敷遺跡 SD1

飾られた壺

第62図 外来系の土器(S = 1 / 4)



第3表 長池ニシタンボ遺跡(2009)土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
1	C309	ビット15	壺	(16.0)	-		粗砂多、海綿骨針、赤色粒少	ハケのちミガキ	キザミ、ナデ	横位綾杉文
2	C106	SD1 上層土器集中	台付鉢	(12.8)	(4.2)	(5.8)	礫並、粗砂並	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	
3	C29	SD1 上層土器集中	鉢	(15.8)	2.4	10.8	礫少、粗砂並、焼土塊	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ	焼成前穿孔φ7mm
4	C28	SD1 上層土器集中	鉢	(16.2)	2.3	12.2	礫並、粗砂やや多、焼土塊	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ	焼成前穿孔φ6mm
5	C30	SD1 上層土器集中	鉢	長17.9 短16.5	2.7	14.4	礫並、粗砂やや多、焼土塊	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	焼成前穿孔φ7mm
6	C20	SD1 上層土器集中	鉢	-	4.8	-	礫並、粗砂並、細砂並	ナデ	ナデ	
7	C17	SD1 上層土器集中	器台	(22.1)	-	(14.7)	礫少、粗砂少、赤色粒	ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ	
8	C16	SD1 上層土器集中	器台	24.1	(15.1)	(17.15)	粗砂並、焼土塊	ミガキ(ケズリ残る)	ミガキ(ケズリ残る)	孔2ヶφ7mm、擬凹線?
9	C27	SD1 上層土器集中	高杯	(24.5)	(12.8)	15.2	礫並、粗砂多、細砂少	ケズリ、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	摩耗、ゆがみ
10	C15	SD1 上層土器集中	高杯	24.6	-	-	細砂並、赤色粒	ミガキ	ミガキ	
11	C44	SD1 上層土器集中	高杯	-	-	-	礫少、粗砂並、赤色粒	不明	不明	内外摩耗
12	C18	SD1 上層土器集中	高杯	-	(13.2)	-	礫並、粗砂並、細砂並	ナデ、ハケのちナデ	ミガキ	孔3ヶφ4mm
13	C46	SD1 上層土器集中	脚部	-	-	-	礫極少、粗砂多、赤色粒	不明	不明	内外摩耗
14	C177	SD1 上層土器集中	脚部	-	-	-	細砂並	ナデ	ミガキ	
15	C58	SD1 上層土器集中	脚部	-	-	-	粗砂並、細砂並	ナデ	ミガキ	
16	C24	SD1 上層土器集中	脚裾部	-	12.6	-	粗砂並、細砂並、赤色粒	ナデ	ミガキ、ナデ	孔4ヶφ6mm
17	C7	SD1 上層土器集中	脚裾部	-	(13.8)	-	粗砂並、細砂並	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	
18	C9	SD1 上層土器集中	脚裾部	-	13.0	-	粗砂並、細砂並、赤色粒	ナデ	ミガキ	孔3ヶφ6mm
19	C60	SD1 上層土器集中	甕	(14.8)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	擬凹線6条
20	C21	SD1 上層土器集中	甕	(15.9)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5~6条、指頭圧痕
21	C180	SD1 上層土器集中	甕	[16.8]	-	-	礫並、粗砂並、細砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5~6条
22	C179	SD1 上層土器集中	甕	[16.8]	-	-	粗砂並、細砂並	ナデ	ナデ	擬凹線5条か
23	C181	SD1 上層土器集中	甕	(17.1)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線4条+3条 指頭圧痕2段
24	C26	◇・SD1 上層	甕	(17.0)	-	-	粗砂並、赤色粒、雲母	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
25	C5	SD1 上層土器集中	甕	(17.0)	-	(19.0)	礫多、粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ハケ	擬凹線5条、波状文、指頭圧痕
26	C10	SD1 上層土器集中	甕	(17.2)	-	-	礫少、粗砂やや多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
27	C57	SD1 上層土器集中	甕	(17.7)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線9条、指頭圧痕
28	C51	SD1 上層土器集中	甕	(17.9)	(3.0)	(16.2) +(3.5)	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	下端に擬凹線、指頭圧痕
29	C65	◇・SD1 上層	甕	18.1	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
30	C12	SD1 上層土器集中	甕	(18.3)	-	-	粗砂並、焼土塊やや多	ヨコナデ、ケズリ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
31	C63	SD1 上層土器集中	甕	(18.6)	-	-	礫多、粗砂多、焼土塊	ハケ、ヘラケズリ	調整不明、擬凹線2条	口縁摩耗、擬凹線2条
32	C69	SD1 上層土器集中	甕	(18.6)	-	-	礫僅、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
33	C64	◇・SD1 上層	甕	(18.6)	-	-	粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線10条、指頭圧痕
34	C38	SD1 上層土器集中	甕	(19.2)	-	(23.1)	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
35	C241	SD1 上層土器集中	甕	[20.0]	-	-	粗砂並、細砂並	ナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
36	C35	SD1 上層土器集中	甕	(20.5)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬83-92凹線5条、指頭圧痕
37	C240	SD1 上層土器集中	甕	[21.7]	-	-	礫並、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
38	C53	SD1 上層土器集中	甕	23.8	-	-	礫並、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線4条
39	C22	SD1 上層土器集中	甕	(14.0)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	指頭圧痕2段
40	C11	SD1 上層土器集中	甕	(14.5)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
41	C59	SD1 上層土器集中	甕	(14.6)	-	-	礫並、粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
42	C68	SD1 上層土器集中	甕	(15.6)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	
43	C182	SD1 上層土器集中	甕	(15.7)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
44	C23	SD1 上層土器集中	甕	(16.1)	-	-	粗砂やや多	ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	
45	C2	SD1 上層土器集中	甕	(14.6)	-	-	粗砂並、細砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
46	C45	SD1 上層土器集中	甕	(16.8)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ハケ、ケズリ	ナデ、ヨコナデ、ハケ	口縁ゆがみあり
47	C34	◇・SD1 上層	甕	(17.0)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	肩部にキザミ
48	C19	SD1 上層土器集中	甕	(17.0)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
49	C8	SD1 上層土器集中	甕	(17.0)	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
50	C13	SD1 上層土器集中	甕	(17.8)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
51	C61	SD1 上層土器集中	甕	(18.2)	-	-	礫並、粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ナデ	
52	C239	SD1 上層土器集中	甕	[18.8]	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒やや多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	指頭圧痕
53	C176	SD1 上層土器集中	甕	(19.3)	-	-	粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ?	ヨコナデ	
54	C437	SD1 上層土器集中	甕	(19.4)	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
55	C36	◇・SD1 上層	甕	(19.6)	-	-	粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
56	C42	SD1 上層土器集中	甕	(21.2)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
57	C55	SD1 上層土器集中	甕	(12.8)	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケのちナデ	口縁端部に面取り
58	C4	SD1 上層土器集中	甕	(16.3)	-	-	粗砂やや多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁下端突出
59	C178	SD1 上層土器集中	甕	(19.8)	-	-	礫並、粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口縁中位屈曲
60	C32	SD1 上層土器集中	甕	(17.7)	-	-	粗砂多、赤色粒	ナデ、ハケ、ケズリ	ナデ、ハケ	
61	C40	SD1 上層土器集中	甕	(14.0)	-	-	礫多、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ、一部ナデ	ヨコナデ、ハケ	口縁ゆがみ大
62	C43	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.0	-	粗砂並、赤色粒	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
63	C41	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.2	-	礫僅、粗砂多、赤色粒	ケズリ	ハケ、ナデ	
64	C67	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.3	-	粗砂並	ケズリ	ハケ、ナデ、ケズリ	
65	C37	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.3	-	礫並、粗砂並、赤色粒	ケズリ	ハケ、ナデ	
66	C52	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.7	-	粗砂多、赤色粒	不明	ハケ	
67	C175	SD1 上層土器集中	甕底部	-	2.8	-	粗砂並、赤色粒	ナデ	ハケ、ナデ	
68	C25	SD1 上層土器集中	甕底部	-	3.1	-	礫少、粗砂並	ナデ、ハケ、ケズリ	ハケ、ケズ	
69	C6	SD1 上層土器集中	甕底部	-	3.2	-	礫並、粗砂多	ハケのちナデ	ハケのちナデ	
70	C56	SD1 上層土器集中	甕底部	-	(4.0)	-	礫少、粗砂多	ケズリ	ナデ	
71	C3	SD1 上層土器集中	甕底部	-	4.2	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	底部ゆがみ
72	C39	SD1 上層土器集中	蓋	3.2	8.9	3.7	礫多、粗砂多、赤色粒	不明	不明	天井孔φ6~8mm
73	C48	SD1 上層土器集中	壺	8.7	1.6	13.3	細礫僅、粗砂多、細砂少、雲母微	ケズリ、ハケ、ミガキ	ケズリ、ハケ、ミガキ	外面煤
74	C49	SD1 上層土器集中	壺	10.9	2.3	13.0	粗砂並、細砂少、赤色粒、雲母	ヨコナデ、ケズリ、ハケ、ミガキ	ヨコナデ、ハケ、ミガキ	外面煤
75	C33	SD1 上層土器集中	壺	-	2.0	(11.5)	粗砂少	ミガキ	ミガキ	外面煤
76	C1	SD1 上層土器集中	壺	(13.75)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	不明	
77	C14	SD1 上層土器集中	壺	(14.6)	-	-	礫並、粗砂並、細砂並、赤色粒	ナデ、ケズリ	ナデ	内外面摩耗
78	C50	SD1 上層土器集中	台付壺	20.4	-	(28.2)	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケのちミガキ	外面赤彩、擬凹線7条
79	C54	SD1 上層土器集中	壺底部	-	3.9	-	礫少、粗砂少、焼土塊	ハケ	ハケのちミガキ	ゆがみあり
80	C238	SD1 上層	鉢	(11.8)	-	-	粗砂多、海綿骨針、赤色粒	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	
81	C96	SD1 上層	鉢	(13.2)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ミガキ	ミガキ	
82	C97	SD1 上層	鉢	15.4	2.4	8.3	礫少、粗砂並、焼土塊	ミガキ、ケズリ	ミガキ、ハケ、ケズリ	煤付着
83	C89	SD1 上層	鉢	-	2.9	-	粗砂多、海綿骨針、赤色粒	ナデ	ミガキ	
84	C95	SD1 上層	器台	(23.0)	-	-	粗砂並、焼土塊、ガラス質の砂粒多	ミガキ、ケズリ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	口縁端部煤付着
85	C62	SD1 上層	結合器台	-	-	(3.4)	粗砂並、焼土塊並	ミガキ	ミガキ	内外面赤彩?
86	C236	SD1 上層	器台	-	-	-	礫少、粗砂並、赤色粒、海綿骨針	ハケ、ナデ、ケズリ	ミガキ	
87	C99	SD1 上層	器台	-	(13.0)	-	粗砂並	ミガキ、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ	外面赤彩
88	C116	SD1 上層	器台	-	(21.2)	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ケズリのちナデ、ミガキ?	不明	擬凹線6条
89	C91	SD1 上層	高杯	(21.8)	-	-	粗砂少	ミガキ	ミガキ	
90	C183	SD1 上層	高杯	(25.3)	-	-	粗砂少、焼土塊	ミガキ	ミガキ	内外面赤彩

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
91	D1	SD1 上層	脚部	-	-	-	粗砂少	ナデ?	ミガキ	キザミ、凹線
92	C73	SD1 上層	脚裾部	-	14.9	-	礫少、粗砂並、焼土塊、海綿骨針	ヨコナデ、ハケ	ミガキ	外面赤彩、孔3ヶφ6mm
93	C266	SD1 上層	脚裾部	-	12.1	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ	ミガキ	外面黒斑あり
94	C84	SD1 上層	脚裾部	-	14.2	-	粗砂少、雲母	ナデ、ハケ	ミガキ	
95	C261	SD1 上層	脚裾部	-	17.3	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ	ミガキ	沈線3条
96	C77	SD1 上層	脚裾部	-	20.7	-	粗砂少、焼土塊	ヨコナデ	ミガキ	外面赤彩、キザミ
97	C195	SD1 上層	甕	(14.2)	-	-	礫少、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条
98	C74	SD1 上層	甕	(14.5)	-	-	礫僅、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
99	C98	SD1 上層	甕	(14.8)	1.8	-	粗砂多	ナデ、ケズリ	ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
100	C107	SD1 上層	甕	(15.2)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ	ヨコナデ	
101	C194	SD1 上層	甕	(15.4)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線3条以上
102	C213	SD1 上層	甕	(15.4)	-	-	礫並、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線9条
103	C70	SD1 上層	甕	(15.7)	-	-	粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線8条、指頭圧痕
104	C206	SD1 上層	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒並	ヨコナデ、ケズリ	不明	擬凹線7条、指頭圧痕
105	C189	SD1 上層	甕	(16.0)	-	-	粗砂多、赤色粒	不明	不明	擬凹線7条、指頭圧痕
106	C212	SD1 上層	甕	(16.2)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
107	C191	SD1 上層	甕	(16.4)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線8条
108	C217	SD1 上層	甕	(16.5)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	浅い擬凹線
109	C185	SD1 上層	甕	(16.5)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
110	C219	SD1 上層	甕	(16.7)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条
111	C188	SD1 上層	甕	(16.8)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線7条、指頭圧痕
112	C207	SD1 上層	甕	(17.0)	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線16条
113	C218	SD1 上層	甕	(17.0)	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	浅い擬凹線4条
114	C198	SD1 上層	甕	(17.0)	-	-	礫少、粗砂並、雲母	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
115	C214	SD1 上層	甕	(17.2)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条、指頭圧痕
116	C220	SD1 上層	甕	(17.6)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条、指頭圧痕
117	C87	SD1 上層	甕	(17.6)	-	-	粗砂多、焼土塊	ナデ、ケズリ	不明	擬凹線5条
118	C211	SD1 上層	甕	(18.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線4条
119	C209	SD1 上層	甕	(18.0)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条、指頭圧痕
120	C88	SD1 上層	甕	18.7	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条、指頭圧痕
121	C204	SD1 上層	甕	(18.9)	-	-	粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線4条、指頭圧痕
122	C227	SD1 上層	甕	(19.0)	-	-	粗砂並、細砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線4条
123	C235	SD1 上層	甕	(19.0)	-	-	礫少、粗砂並、赤色粒、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5~6条
124	C100	SD1 上層	甕	(19.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条、指頭圧痕
125	C80	SD1 上層	甕	(19.3)	-	-	粗砂やや多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
126	C438	SD1 上層	甕	(19.3)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	浅い擬凹線9~10条
127	C228	SD1 上層	甕	[19.5]	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒微	ヨコナデ、不明	ヨコナデ	擬凹線(条数不明)
128	C186	SD1 上層	甕	(19.5)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
129	C196	SD1 上層	甕	(19.9)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線13条
130	C85	SD1 上層	甕	(20.5)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
131	C197	SD1 上層	甕	(20.8)	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条
132	C199	SD1 上層	甕	(21.9)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線8条
133	C202	SD1 上層	甕	[22.4]	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線10条、指頭圧痕
134	C104	SD1 上層	甕	[23.7]	-	-	粗砂並、細砂並、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線9条
135	C192	SD1 上層	甕	[27.7]	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ		擬凹線9条

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
136	C224	SD1 上層	甕	[28.9]	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
137	C233	SD1 上層	甕	[29.0]	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
138	C101	SD1 上層	小鉢	(9.6)	-	-	粗砂多、雲母微	ミガキ、ケズリ	ミガキ	
139	C102	SD1 上層	甕	(11.3)	-	-	粗砂並、細砂並、赤色粒微	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	
140	C79	SD1 上層	甕	(11.7)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
141	C232	SD1 上層	甕	(12.1)	-	-	粗砂並、細砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
142	C83	SD1 上層	甕	(12.1)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
143	C231	SD1 上層	甕	(13.8)	-	-	粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
144	C108	SD1 上層	甕	(14.0)	-	-	礫多、粗砂多、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
145	C229	SD1 上層	甕	(14.6)	-	-	粗砂多、細砂並、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
146	C103	SD1 上層	甕	(14.8)	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
147	C94	SD1 上層	甕	(15.2)	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
148	C216	SD1 上層	甕	(15.3)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	
149	C151	SD1 上層	甕	(15.3)	-	-	粗砂多、焼土塊	ケズリ	不明	
150	C201	SD1 上層	甕	(15.3)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	不明	不明	
151	C225	SD1 上層	甕	(16.0)	-	-	礫並、粗砂多、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
152	C193	SD1 上層	甕	(16.9)	-	-	礫僅、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ?	ヨコナデ、ハケ	
153	C76	SD1 上層	甕	(16.9)	-	-	粗砂やや多、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
154	C203	SD1 上層	甕	(17.1)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデケズリ	ヨコナデ	指頭圧痕
155	C75	SD1 上層	甕	(17.1)	-	-	礫極少、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
156	C187	SD1 上層	甕	(17.2)	-	-	礫僅、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	指頭圧痕
157	C93	SD1 上層	甕	(17.6)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
158	C267	SD1 上層	甕	(19.0)	-	-	礫並、粗砂多、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
159	C226	SD1 上層	甕	[19.6]	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
160	C105	SD1 上層	甕	(21.6)	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリのちハケ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線?
161	C223	SD1 上層	甕	[23.7]	-	-	礫微、粗砂多、細砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
162	C268	SD1 上層	甕	(24.0)	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
163	C259	SD1 上層	甕	(26.9)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	
164	C208	SD1 上層	甕	[31.4]	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
165	C117	SD1 上層	甕	(13.1)	-	-	粗砂並、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁面取り
166	C270	SD1 上層	甕	(13.4)	-	-	粗砂少、海綿骨針	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁面取り、キザミ
167	C81	SD1 上層	甕	(12.6)	-	-	粗砂並、海綿骨針、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁面取り
168	C260	SD1 上層	甕	(14.2)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	口縁面取り
169	C230	SD1 上層	甕	(18.6)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁面取り
170	C269	SD1 上層	甕	(17.6)	-	-	礫並、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁面取り
171	C234	SD1 上層	甕	(15.3)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
172	C184	SD1 上層	甕	(15.7)	-	-	礫極少、粗砂並、赤色粒	ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ	
173	C237	SD1 上層	甕	(20.6)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
174	C200	SD1 上層	甕底部	-	2.5	-	礫少、粗砂並	不明	ハケ	
175	C215	SD1 上層	甕底部	-	2.8	-	礫並、粗砂多、海綿骨針少	ケズリのちナデ	ハケ	
176	C78	SD1 上層	甕底部	-	2.5	-	粗砂多、赤色粒	ケズリ	ハケ、ケズリ	
177	C222	SD1 上層	甕底部	-	(3.2)	-	礫多、粗砂多	ケズリ	ハケ	
178	C90	SD1 上層	甕底部	-	4.4	-	礫少、粗砂並、海綿骨針	ケズリ	ハケ、ナデ	
179	C82	SD1 上層	壺	(14.6)	-	-	粗砂やや多、赤色粒	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
180	C190	SD1 上層	壺	(14.7)	-	-	粗砂少、赤色粒	ミガキ	ミガキ	

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
181	C210	SD1 上層	壺	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多	ミガキ、ケズリ	ミガキ	
182	C92	SD1 上層	壺	(14.8)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ、ヨコナデ	
183	C250	SD1 上層	壺	-	-	-	礫並、粗砂並、焼土塊多	ハケ?	ハケ	
184	C271	SD1 上層	壺	-	-	-	粗砂並	ヨコナデ	ナデ	把手付き
185	C86	SD1 上層	壺底部	-	3.9	-	礫少、粗砂多	ナデ	ナデ	
186	C436	SD1 上層	壺底部	-	(6.8)	-	粗砂並	ハケ	ミガキ	
187	C110	SD1 上層下部	高杯	20.0	10.8	12.05	礫少、粗砂多	ミガキ、ハケ	ミガキ、ミガキのちハケ	内外面赤彩
188	C174	SD1 上層下部	高杯	-	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ミガキ	ナデ、ミガキ	
189	C162	SD1 上層下部	高杯	-	-	-	細砂多	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	孔4ヶφ5mm
190	C249	SD1 上層下部	高杯	-	-	-	礫少、粗砂多	ナデ	ミガキ	孔3ヶ
191	C111	SD1 上層下部	高杯	-	12.5	-	礫少、粗砂多	ナデ、ケズリ、ハケ	ミガキ	孔3ヶφ6mm
192	C245	SD1 上層下部	甕	(14.4)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	摩耗、擬凹線6条?
193	C244	SD1 上層下部	甕	(15.0)	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条
194	C246	SD1 上層下部	甕	(15.2)	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線6条?、指頭圧痕
195	C247	SD1 上層下部	甕	(20.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	摩耗、擬凹線5条
196	C248	SD1 上層下部	甕	(18.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線2条
197	C113	SD1 上層下部	甕	(13.8)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
198	C243	SD1 上層下部	甕	(16.7)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
199	C242	SD1 上層下部	甕	(16.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
200	C112	SD1 上層下部	甕底部	-	1.7	-	礫並、粗砂多	ケズリのちナデ	ハケ、ケズリのちナデ	
201	C205	SD1 上層下部	壺	(12.6)	-	-	粗砂並	ハケ、ナデ、ケズリ	ハケ	
202	C109	SD1 上層下部	壺	(13.0)	-	-	礫並、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
203	C114	SD1 上層下部	壺	14.5	(2.8)	26.9	粗砂並	ハケ、ナデ	ハケ	記号文あり
204	C152	SD1 下層	台付鉢	(11.3)	5.2	8.2	粗砂多、細砂少	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	製塩関連?、指頭圧痕
205	C120	SD1 下層	鉢	(20.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
206	C255	SD1 下層	器台	(16.0)	-	-	粗砂少、焼土塊	ミガキ	ミガキ	外面赤彩?
207	C137	SD1 下層	器台	-	-	-	礫少、粗砂少、海綿骨針、やや粘質	ミガキ	ハラミガキ	内外面赤彩
208	C125	SD1 下層	高杯	(25.2)	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒少	ミガキ	ミガキ	
209	C118	◇・SD1 上層	高杯	(34.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	ミガキ	ミガキ	内面摩耗
210	C127	SD1 下層	高杯	(35.0)	-	-	礫少、粗砂多	ミガキ	ミガキ	
211	C156	SD1 下層	高杯	-	-	-	粗砂並	ミガキ	ミガキ	
212	C154	◇・SD1 上層	高杯脚部	-	-	-	礫少、粗砂多、細砂多	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	
213	C172	SD1 下層	脚部	-	-	-	粗砂並	ケズリ、ナデ	ミガキ	外面赤彩、孔数不明φ約9mm
214	C155	◇・SD1 上層	高杯脚部	-	13.5	-	粗砂少、細砂多	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	孔3ヶφ7mm
215	C142	◇・SD1 上層	高杯脚部	-	15.2	-	粗砂並	ケズリ、ナデ	ミガキ	
216	C133	◇・SD1 上層	脚部	-	15.8	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ	ミガキ	孔2ヶ×3、φ6mm、外面赤彩
217	C126	SD1 下層	小甕	(9.0)	-	-	礫少、粗砂多	ケズリのちナデ	ハケ	擬凹線3条
218	C124	SD1 下層	甕	(13.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条
219	C135	SD1 下層	甕	(13.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
220	C170	SD1 下層	甕	[14.8]	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
221	C252	SD1 下層	甕	(15.0)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
222	C130	SD1 下層	甕	(15.4)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条
223	C132	SD1 下層	甕	(15.5)	-	-	粗砂少、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線3条
224	C256	SD1 下層	甕	(15.8)	-	-	粗砂少、赤色粒	ハケ、ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線3条
225	C166	SD1 下層	甕	(15.8)	-	-	礫多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
226	C257	SD1 下層	甕	(15.9)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ?	ヨコナデ	擬凹線4条
227	C121	SD1 下層	甕	(16.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線2条
228	C123	SD1 下層	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ、ハケ	擬凹線7条、刺突
229	C173	SD1 下層	甕	(16.4)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条、指頭圧痕
230	C263	SD1 下層・SD14	甕	(16.4)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条+3~4条
231	C141	SD1 下層	甕	(16.6)	-	-	粗砂多	ナデケズリ	ハケ	擬凹線8条、指頭圧痕
232	C146	SD1 下層	甕	(16.8)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
233	C136	SD1 下層	甕	(17.0)	-	-	粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線4条
234	C138	SD1 下層	甕	(17.3)	-	-	粗砂並、海綿骨針、雲母	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条
235	C168	SD1 下層	甕	(17.6)	-	-	礫並、粗砂並	ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線7条
236	C139	SD1 下層	甕	(18.8)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
237	C149	◇・SD1 上層	甕	(18.8)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ	ナデ、ハケ	擬凹線6条、波状文
238	C264	SD1 下層	甕	(19.0)	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、不明	擬凹線4条、指頭圧痕
239	C131	SD1 下層	甕	(19.2)	-	-	礫僅、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
240	C251	SD1 下層	甕	(20.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
241	C129	SD1 下層	甕	(20.4)	-	-	粗砂多、赤色粒	ヨコナデケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線16条、指頭圧痕
242	C262	SD1 下層	甕	(24.2)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線10条、指頭圧痕
243	C160	SD1 下層	甕	12.4	2.4	13.8	粗砂多	ケズリ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	
244	C254	SD1 下層	甕	(14.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	摩耗
245	C153	SD1 下層	甕	(14.4)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
246	C147	SD1 下層	甕	(14.7)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
247	C150	SD1 下層	甕	16.2	-	-	礫僅、粗砂多、細砂並、赤色粒、雲母	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
248	C265	SD1 下層	甕	(16.4)	-	-	礫少、粗砂少、焼土塊	ヨコナデ、ナデ?	ヨコナデ、ハケ	
249	C167	SD1 下層	甕	(16.4)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ハケ、ヨコナデ	
250	C115	SD1 下層	甕	16.5	2.8	26.6	礫並、粗砂並、細砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	指頭圧痕
251	C171	SD1 下層	甕	(17.0)	-	-	礫並、粗砂並、焼土塊、黒雲母	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ	指頭圧痕
252	C148	SD1 下層	甕	(17.2)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
253	C253	SD1 下層	甕	(18.0)	-	-	礫少、粗砂多、海綿骨針、赤色粒多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
254	C47	◇・SD1 上層土器集中	甕	(18.8)	-	-	礫並、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
255	C165	SD1 下層	甕底部	-	-	-	礫多、粗砂多	ナデ、ケズリ	ハケ	刺突
256	C164	SD1 下層	甕底部	-	-	-	礫並、粗砂並、赤色粒	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	波状文
257	C169	SD1 下層	甕底部	-	1.9	-	粗砂多、細砂並	ケズリ	ハケ	
258	C145	SD1 下層	甕底部	-	3.1	-	粗砂並	ハケ、ケズリ	ハケ、ケズリ、ナデ	外面赤化
259	C258	SD1 下層	甕底部	-	4.0	-	礫僅、粗砂並	ナデ	ハケ	指頭圧痕
260	C143	SD1 下層	甕底部	-	4.6	-	粗砂多、細砂多	ケズリ	ケズリ、ハケ	
261	C122	SD1 下層	甕底部	-	2.0	-	礫少、粗砂多	不明	ハケ	
262	C163	◇・SD1 上層	壺口縁	(11.8)	-	-	礫少、粗砂多、細砂多	ハケ	ヨコナデ、ハケ	
263	C140	SD1 下層	壺	(14.5)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
264	C128	◇・SD1 上層	壺	15.7	5.5	27.7	礫少、粗砂並	ハケ、ナデ	ナデ、ハケ、ケズリ	
265	C119	SD1 下層	壺	10.9	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ	
266	C144	SD1 下層	壺	(15.0)	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ミガキ?	
267	C134	SD1 下層	壺	14.5	3.45	15.55	礫並、粗砂多、焼土塊	ヨコナデのち?ヘラミガキ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヨコナデ	外面煤付着
268	D2	SD1 下層	壺?	-	-	-	礫少、粗砂並	ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ、列点文	
269	C71	◇・SD1 上層	壺	(14.2)	(7.2)	26.5	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ハケケズリ	ヨコナデ、ミガキ	
270	C157	◇・SD1 上層	壺	21.8	-	-	礫並、粗砂並、焼土塊並、海綿骨針僅	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
271	C31	◇・SD1 上層	壺	(7.7)	1.6	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ハケ、ナデ	ミガキ	口縁下層、体部上層
272	C161	SD1	甕	(14.5)	-	-	礫並、粗砂やや多、焼土塊少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線2条、指頭圧痕
273	C158	SD1	甕	(19.0)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊少	ヨコナデハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線?、指頭圧痕
274	C159	SD1	蓋	(15.8)	3.9	6.9	粗砂並	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、ハケ	
275	C272	SD3 北部	甕	(14.6)	-	-	礫僅、粗砂並	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線3条
276	C66	SD3 北部	甕	(16.8)	-	-	礫僅、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ?	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
277	C325	SD3 北部	甕	(19.9)	-	-	粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、不明	擬凹線6条、指頭圧痕
278	C273	◇ 上層	甕	(21.3)	-	-	礫並、粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条
279	C326	◇ 上層	蓋	-	-	-	細砂並、赤色粒	ナデ	ミガキ	
280	C274	SD3 北部	壺	(19.2)	-	-	粗砂並、細砂並	ミガキ、ハケ、ケズリ	ミガキ	横位縁杉文
281	C72	SD3 北西部	器台	-	-	-	粗砂多、赤色粒多、雲母微	ミガキ	ナデ	摩耗著しい
282	C324	SD3 北西部	甕	(14.0)	-	-	粗砂並、海綿骨針、雲母	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、
283	C327	SD3 北西部	甕	(17.2)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
284	C275	SD3 北東部	鉢	(10.8)	(2.0)	7.0	粗砂並、細砂並、海綿骨針	ナデ、ハケ、ミガキ	ナデ、ミガキ	把手付き
285	C276	SD3 北東部	甕	(16.4)	-	(9.6)	礫並、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
286	C308	◇・SD13	甕	(18.0)	2.7	20.8	礫並、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	
287	C277	SD3 北東部	壺	(10.0)	-	-	礫並、粗砂並、赤色粒	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	
288	C322	SD3 南部	高杯	(32.4)	-	-	細砂並、赤色粒	ミガキ	ミガキ	
289	C281	SD3 南部	鉢	(7.4)	2.2	(3.8)	粗砂並、細砂並	ミガキ	ナデ、ハケ	外面赤彩?
290	C280	SD3 南部	高杯	-	-	-	粗砂少、赤色粒	ケズリ	ミガキ	φ 0.45mm
291	C282	SD3 南部	甕	(14.6)	-	-	粗砂並、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
292	C278	SD3 南部	甕	(15.2)	-	-	礫並、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線7条、指頭圧痕
293	C279	SD3 南部	甕	(17.0)	-	-	礫並、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
294	C286	SD3 南東部	高杯	-	-	-	礫少、粗砂少、海綿骨針、焼土塊	ミガキ、ナデ、ハケ	ミガキ	
295	C284	SD3 南東土器部 D	高杯	-	15.1	-	粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ナデ、ハケ	ミガキ、ヨコナデ	外面赤彩?
296	C287	SD3 南東土器部 C	高杯	-	17.5	-	礫少、粗砂少、焼土塊	ミガキ、ヨコナデ、ケズリ	ミガキ	孔2ヶ×3φ6mm、凹線6条
297	C288	SD3 南東土器部 C	甕	(16.4)	-	-	礫多、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線7条、指頭圧痕
298	C292	SD3 南東土器部 A	甕	(16.7)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデハケ	擬凹線6条
299	C289	SD3 南東土器部 A・B	甕	23.5	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条
300	C321	SD3 南東部	甕	(34.0)	-	-	礫多、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線13~14条
301	C291	SD3 南東土器部 A・B	甕	(19.0)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	指頭圧痕
302	C290	SD3 南東土器部 A	甕	(20.8)	-	-	礫多、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
303	C323	SD3 南東部	甕	[22.6]	-	-	礫多、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	指頭圧痕
304	C285	SD3 南東土器部 D	壺	(8.1)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	不明	不明	
305	C283	SD3 南東部	小壺	-	2.6	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ケズリ、ミガキ	ミガキ	外面赤彩
306	C293	SD7	鉢	10.8	3.5	5.5	粗砂多、赤色粒少	ミガキ	ハケのちミガキ、ナデ	
307	C294	SD9 周辺	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
308	C297	SD10	結合器台	-	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	
309	C296	SD10	高杯	-	5.8	-	粗砂多、細砂多、海綿骨針	ミガキ、不明	ミガキ	孔φ約4mm
310	C298	SD10	甕	[15.0]	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
311	C295	SD10	甕	(19.3)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条、指頭圧痕
312	C299	SD10	甕底部	-	2.0	-	粗砂多、赤色粒多	ケズリ	ハケ	
313	C305	SD11	結合器台	-	-	-	粗砂多、赤色粒少	ミガキ、ケズリのちミガキ	ミガキ	
314	C328	SD11	小型器台	-	-	-	礫少、粗砂多	不明	不明	孔3ヶφ14mm、摩耗
315	C304	SD11	甕	(15.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線1条?

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
316	C300	SD11	甕	[15.6]	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
317	C306	SD11	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
318	C303	SD11	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒並	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
319	C329	SD11	甕	(19.0)	-	-	粗砂多、細砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線9条、磨耗
320	C301	SD11	甕	[23.0]	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	擬凹線9条、指頭圧痕
321	C302	SD11	脚台	-	6.0	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	不明	不明	
322	C307	SD13	甕	(17.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
323	C310	SD15	甕	(14.5)	-	-	粗砂多、赤色粒多	ケズリ、不明	ハケ、不明	摩耗
324	C221	東壁周辺	甕	(21.7)	-	-	礫少、粗砂並、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線8条、指頭圧痕
325	C311	北部落ち込み下層	台付甕	-	-	-	粗砂多	ナデ	ハケ	
326	D4	NR1 中部	播鉢	[42.0]	-	-	礫少、粗砂多、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲焼、波状文
327	D3	NR1	播鉢	-	15.6	-	礫少、粗砂多	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲焼、卸し目
328	D5	NR1 北部	瓶子	-	7.6	-	緻密	ロクロナデ	ロクロナデ	古瀬戸、灰釉
329	染1	NR1 北部	碗	-	6.0	-	灰白、緻密			肥前磁器、染付
330	C1318	NR2 北部	皿	(12.8)	5.0	3.9	灰白、堅固	(灰釉、砂目跡)	ロクロナデ	肥前陶器
331	C1317	NR2 北部	皿	13.5	4.6	3.8	にぶい橙、砂粒含む、やや柔	(鉄絵、蛇の目釉はぎ)	ロクロナデ	肥前陶器

第4表 長池ニシタンボ遺跡(2012)土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
349	C314	SK1	鉢	(12.0)	-	-	粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	
350	C331	SK1	器台	(22.2)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	不明	不明	
351	C330	SK1	甕	(19.1)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
352	C312	SK1	甕	[19.9]	-	-	礫少、粗砂並、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
353	C313	SK1	脚部	-	4.4	-	礫少、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ハケ、ナデ	ハケ、ヨコナデ	歪みあり
354	C333	SD4	鉢	-	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	不明	不明	把手付き
355	C315	SD4	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
356	C332	SD8	高杯	(24.4)	-	-	礫少、粗砂並、海綿骨針、焼土塊	ミガキ	ミガキ	
357	C316	SD8	高杯	-	(12.6)	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ハケ、ヨコナデ	ミガキ	
358	C317	SD8	甕	(13.8)	-	-	礫少、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
359	C319	SD21	甕	(14.5)	-	-	礫僅、粗砂並、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
360	C320	SD21	甕	(22.2)	-	-	礫少、粗砂多、焼土塊	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条、指頭圧痕
361	C318	表土	壺?	(23.0)	-	-	礫僅、粗砂並、海綿骨針	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	凹線3条

第5表 長池ニシタンボ遺跡(2013)土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
362	C1315	S11	深鉢	-	-	-	粗砂少、細砂多、雲母少	ナデ	縄文	縄文土器、擬口縁か
363	C1310	S11	器台?	[25.8]	-	-	礫多、粗砂並	ハケ?	凹線	磨耗顕著
364	C1301	S11	脚裾部	-	(18.9)	-	礫少、粗砂多、赤色粒	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ	スタンプ文(連結渦文)、キザミ
365	C1307	S11 上層	脚裾部	-	(21.0)	-	粗砂、細砂並、赤色粒少	ヨコナデ	ミガキ	透孔4
366	C1306	S11	甕	(15.4)	-	-	礫微、粗砂、細砂多、赤色粒少	ヨコナデ?、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条、磨耗顕著
367	C1303	S11	甕	(16.6)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線15条
368	C1311	S11 下層	甕	(17.6)	-	-	粗砂並、細砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
369	C1312	S11 下層	甕	(18.8)	-	-	粗砂、細砂並、赤色粒微	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
370	C1314	S11 上層	甕	[19.2]	-	-	粗砂、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ハケ、ナデ	
371	C1305	S11	甕	(29.2)	-	-	粗砂、細砂並、赤色粒微	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線10条

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
372	C1308	SI1	甕	[30.4]	-	-	粗砂、細砂多	ヨコナデ	ヨコナデ	疑凹線6条
373	C1316	SI1	甕底部	-	(2.3)	-	礫少、粗砂、細砂多、赤色粒微	ケズリ	ハケ、ナデ	内面黒斑
374	C1309	SI1	甕底部	-	2.9	-	粗砂並、細砂多、赤色粒微	ケズリ、ナデ	ハケ	
375	C1304	SI1	底部	-	2.9	-	礫少、粗砂多	ナデ	ミガキ	底部穿孔
376	C1302	SK6	高杯	-	(12.0)	-	粗砂少	ケズリ、ナデ、ハケ	ミガキ	孔4ヶ所
377	C1313	遺構検出	甕	[19.8]	-	-	礫少、粗砂、細砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	疑凹線7条

第6表 長池カチジリ遺跡(2011)土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
378	D10	トレンチ1砂層	播鉢	-	(10.4)	-	礫僅	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前陶器、卸し目(9条単位)
379	D11	トレンチ1	盤	-	(10.9)	-	灰白色、緻密			青磁、厚めに施釉
380	染2	トレンチ1	皿	(11.3)	(4.0)	3.8				肥前磁器、染付、蛇の目釉剥ぎ
381	染4	トレンチ1砂礫層	皿	(12.9)	4.3	3.7				肥前磁器、染付、蛇の目釉剥ぎ
382	染3	トレンチ1第2層	小碗	-	3.2	-				肥前磁器、染付

第7表 長池カチジリ遺跡(2012)土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
383	C431	SK2	甕	(20.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ナデ	擬凹線8条、指頭圧痕
384	C368	◇、SD3	甕	(25.6)	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線11条、指頭圧痕
385	C432	SK2	甕	(14.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	
386	C430	SK2	甕	(14.6)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	
387	C400	SD2	脚裾部	-	(13.0)	-	礫並、粗砂多、細砂並	不明	不明	
388	C397	SD2	蓋	-	鈕3.1	-	粗砂多	ミガキ、ハケ	ミガキ	
389	C336	SD2	鉢	(8.3)	3.2	5.0	礫少、粗砂多、赤色粒	不明	ヨコナデ	
390	C339	SD2	鉢	(9.9)	-	-	粗砂少、海綿骨針	不明	不明	
391	C342	SD2	鉢	10.1	2.3	5.8	粗砂多、赤色粒	ヨコナデ	ヨコナデ	
392	C362	SD2	鉢	(11.6)	-	-	細砂、赤色粒、雲母	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	手づくね、金属加工関連?
393	C371	SD2	鉢	(13.6)	丸底	5.5	礫並、粗砂多	ナデ、ハケ	ナデ、指頭圧痕	
394	C388	SD2	小型土器	-	2.4	-	粗砂多	ケズリのちナデ	ハケ、ナデ	
395	C402	SD2	小型土器	-	2.5	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ケズリのちナデ	ハケ	
396	C374	SD2	小型土器	-	3.6	-	礫少、粗砂多、赤色粒並	ハケ、ケズリ	ナデ	
397	C348	SD2	台付鉢	-	5.2	-	粗砂少、赤色粒	ミガキ	ミガキ、ヨコナデ	
398	C399	SD2	高杯	-	-	-	粗砂多、細砂並、赤色粒少	ハケ	ミガキ	
399	C416	SD2	脚裾部	-	(11.2)	-	礫少、粗砂多、赤色粒多	ナデ	ナデ	
400	C398	SD2	脚裾部	-	(12.8)	-	粗砂多、細砂並、赤色粒少	ミガキ	ミガキ	凹線4条、列点文、孔3(φ6mm)
401	C418	SD2	脚裾部	-	(16.0)	-	粗砂多、赤色粒少	ナデ	ナデ	
402	C425	SD2	壺	(10.0)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	擬凹線6条
403	C424	SD2	甕	(11.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線3~4条
404	C420	SD2	壺	(12.4)	-	-	礫並、粗砂多、赤色粒少	ミガキ、ナデ	ナデ	擬凹線8条
405	C423	SD2	甕	(13.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線5条
406	C403	SD2	甕	(15.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ナデ	擬凹線10条
407	C401	SD2	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
408	C375	SD2	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	擬凹線5条
409	C381	SD2	甕	(16.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条、指頭圧痕
410	C387	SD2	甕	(17.0)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
411	C359	SD2	甕	(17.4)	-	-	粗砂多	ナデ、ハケ、ケズリ	ナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
412	C417	SD2	甕	(17.2)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ナデ	擬凹線3条
413	C380	SD2	甕	(18.0)	-	-	礫少、粗砂多、海綿骨針	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
414	C406	SD2	甕	(18.0)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ハケ	擬凹線6条、指頭圧痕
415	C338	SD2	甕	18.2	-	-	礫僅、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線8条
416	C390	SD2	甕	(18.6)	-	-	礫少、粗砂多	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
417	C405	SD2	甕	(19.0)	-	-	粗砂多、赤色粒多	ナデ、ハケ、ケズリ	ハケ	擬凹線10条
418	C376	SD2	甕	(19.3)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線9条、指頭圧痕
419	C361	SD2	甕	(19.4)	-	(23.2)	粗砂多、海綿骨針	ハケ、ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線9条
420	C340	SD2	甕	(19.8)	-	-	粗砂並、焼土魂	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線10条
421	C383	SD2	甕	(20.0)	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
422	C395	SD2	甕	(21.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ナデ	擬凹線5条、指頭圧痕
423	C346	SD2	甕	(21.4)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線7条、指頭圧痕
424	C384	SD2	甕	(22.2)	-	-	粗砂並	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線9条
425	C407	SD2	甕	(22.2)	-	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線6条、指頭圧痕
426	C426	SD2	甕	-	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ	ヨコナデ	擬凹線、指頭圧痕
427	C393	SD2	甕	(12.8)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
428	C427	SD2	甕	(15.0)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
429	C391	SD2	甕	[19.3]	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	
430	C344	SD2	甕	(21.4)	-	-	礫多、粗砂並、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ?	ヨコナデ	
431	C385	SD2	甕	(19.6)	-	-	礫僅、粗砂並	ヨコナデ	ヨコナデ、キザミ	口縁下端にキザミ
432	C372	SD2	甕	[26.0]	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	口縁下端に列点
433	C379	SD2	甕	(13.9)	-	-	礫僅、粗砂並、海綿骨針、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	くの字口縁、口縁にへら状痕
434	C419	SD2	甕	(17.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	くの字口縁
435	C347	SD2	甕	(17.9)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	寸胴状
436	C422	SD2	甕	(11.0)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ	山陰系
437	C404	SD2	甕	(15.6)	-	-	粗砂多、細砂並、赤色粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	山陰系
438	C337	SD2	甕	(18.5)	-	-	粗砂多、海綿骨針、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヨコハケ	山陰系
439	C350	SD2	甕	(19.0)	-	-	粗砂多、海綿骨針、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	山陰系
440	C341	SD2	甕	(26.6)	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	山陰系
441	C343	SD2	甕	(14.4)	-	-	礫僅、粗砂少	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	近江・東海系
442	C349	SD2	甕	(18.8)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁端面取り、能登型甕
443	C373	SD2	甕	(20.0)	-	-	粗砂多	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口縁端面取り、能登型甕
444	C345	SD2	甕	(12.2)	-	-	粗砂少、海綿骨針	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	
445	C377	SD2	壺	(13.2)	-	-	粗砂並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	
446	C396	SD2	甕	(13.0)	-	-	礫並、粗砂多	ヨコナデ、ハケのちケズリ	ヨコナデ	
447	C382	SD2	甕底部	-	2.5	-	粗砂多、赤色粒少	ケズリ	ハケ	
448	C392	SD2	甕底部	-	2.8	-	礫少、粗砂多、赤色粒少	ケズリ	ハケ	
449	C378	SD2	甕底部	-	3.4	-	礫並、粗砂多、赤色粒並	ケズリ	ミガキ	
450	C389	SD2	甕底部	-	6.2	-	粗砂多、海綿骨針、赤色粒少	ケズリのちナデ	ハケ	
451	C394	SD2	甕底部	-	3.7	-	礫多、粗砂多、赤色粒少	ケズリ	ケズリ	
452	C360	SD2	壺	(15.8)	-	-	粗砂並、海綿骨針、焼土魂	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
453	C334	SD2	壺	(17.6)	-	-	礫僅、粗砂少、海綿骨針、赤色粒	ハケのちミガキ、ヨコナデ、ハケ	ハケのちミガキ	赤彩
454	C386	SD2	壺	-	-	-	礫少、粗砂多、海綿骨針	ハケ、ナデ	ハケのちケズリ	
455	C408	SD2	壺底部	-	1.7	-	粗砂多、細砂並、赤色粒少	ミガキ	ミガキ	赤彩

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
456	C364	SD3	器台	-	13.0	-	礫僅、粗砂少、焼土魂	ミガキ、ナデ、ハケ	ミガキ	凹線3条、孔4、(φ4mm)
457	C367	SD3	甕	(12.4)	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条
458	C366	SD3	甕	(15.7)	-	-	礫多、粗砂多	ヨコナデ、ケズリ	ハケ	擬凹線8条
459	C365	◇・SK2	甕	(19.8)	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線13条、指頭圧痕
460	C410	SD5	蓋	-	鈕3.4	-	礫僅、粗砂並、焼土魂	ナデ	ナデ	
461	C409	SD5	高杯	20.7	-	-	粗砂並	ミガキ	ミガキ	東海系
462	C411	SD5	甕	(16.4)	-	-	礫僅、粗砂並、海綿骨針、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線5条
463	C414	SD5	甕	(19.5)	-	-	粗砂並、海綿骨針、焼土魂	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	擬凹線7条
464	C356	SD5	甕	(14.2)	-	-	粗砂並、焼土魂	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	
465	C415	SD5	甕	(14.3)	-	-	礫少、粗砂並、海綿骨針、焼土魂	不明	不明	
466	C355	SD5	甕	(16.4)	-	-	礫少、粗砂並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	歪みあり
467	C358	SD5	甕	(16.5)	-	-	礫多、粗砂並、海綿骨針	不明	不明	
468	C413	SD5	甕	(17.2)	-	-	礫少、粗砂並、海綿骨針、焼土魂	ハケ	不明	歪みあり
469	C351	SD5	甕	(17.9)	-	-	礫多、粗砂並	不明	不明	
470	C412	SD5	甕	(18.2)	-	-	礫少、粗砂並	不明	ハケ	
471	C354	SD5	甕	[21.4]	-	-	礫多、粗砂並、焼土魂	ハケ	不明	
472	C428	SD5	甕	[16.1]	-	-	礫僅、粗砂並、焼土魂	ヨコナデ	ヨコナデ	布留系
473	C335	◇・SD1	甕	(20.6)	-	-	礫少、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ?	ヨコナデ?	布留系
474	C421	SD5	甕底部	-	2.2	-	礫少、粗砂並	ケズリ	ハケ	
475	C357	SD5	壺	(13.3)	-	-	礫少、粗砂並、焼土魂	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	擬凹線7条
476	C353	SD5	壺	-	-	-	礫少、粗砂少、焼土魂	ミガキ、ハケ	ミガキ	
477	C352	SD5	壺	-	-	-	礫多、粗砂多、焼土魂	ヨコナデ	ハケ	擬凹線11条以上
478	C434	SX13	甕	(19.6)	-	-	粗砂多、赤色粒少	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線5条、指頭圧痕
479	C435	SX14	甕	(17.0)	-	-	粗砂多、赤色粒多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	擬凹線6条
480	D13	SX13	壺	-	-	-	礫少、粗砂並、焼土魂	ミガキ?	ミガキ?	凹線、スタンプ文
481	D8	SK4	無台杯	(11.2)	(7.3)	3.2	粗砂並	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵器、底部へラ切り
482	D9	SD1	碗	(16.8)	-	-	灰白色、堅緻	(釉薬：オリーブ灰)	(釉薬：オリーブ灰)	青磁、雷文
483	D12	SD1	卸皿	(12.6)	-	-	灰白色、粗砂含	(釉薬：オリーブ黄)	(釉薬：オリーブ黄)	古瀬戸、灰釉
484	D7	旧河道	(脚部)	(31.0)	-	-	粗砂並、焼土魂	ケズリ、ハケ	ヨコナデ、ミガキ	瓦質土器、胎土にぶい橙色
485	D6	SD5	折縁大皿	[36.6]	-	-	灰白色、堅い、砂粒含	(釉薬：オリーブ黄)	(釉薬：オリーブ黄)	古瀬戸、灰釉

第8表 横江古屋敷遺跡土器観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	内面調整	外面調整	備考
487	C363	SD1	甕	14.2	4.4	21.5	礫僅、粗砂並、海綿骨針、赤色粒	ヨコナデ、ケズリ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	肩部にへラ描き線
488	C433	SD1	甕	15.8	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	擬凹線6条
489	C370	SD1	壺	13.6	-	-	礫多、海面骨針	ミガキ、ハケ	ミガキ	簾状文、連続刺突、波状文
490	C369	◇・SD6	台付壺	14.1	-	-	粗砂並、赤色粒	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	
491	C429	SD1	壺	(19.7)	-	-	礫多、粗砂多、赤色粒	ハケ、ミガキ、ケズリ	スタンプ、ミガキ、ハケ	内面煤付着
492	D14	トレンチ1 拡張部	鉢	(23.0)	-	-	礫僅、粗砂並、海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ	珠洲焼
493	D15	トレンチ1 拡張部	折縁大皿	-	-	-	灰白色、緻密、僅かに気泡含む、堅い	(釉薬：濃緑色)	(釉薬：濃緑色)	陶器、古瀬戸
494	染5	河道覆土	蓋	(11.6)	-	-	白色、緻密、堅い			肥前磁器、染付

第9表 長池ニシタンボ遺跡(2009)石器観察表

番号	実測番号	出土遺構	種類	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
332	石 2	SD1 上層	打製石斧	火山礫凝灰岩	24.4	10.3	3.8	997.7	先端部分使用で摩耗
333	石 10	SD3 北西部	打製石斧	凝灰岩系	14.15	9.8	2.9	380.3	
334	石 1	SD1 上層	打製石斧	火山礫凝灰岩	(12.3)	(8.7)	2.9	(391.2)	
335	石 12	NR1 中部	打製石斧	凝灰岩系	(7.7)	9.1	(3.1)	(240.2)	
336	石 11	SD3 南東部	打製石斧	火山礫凝灰岩	(7.7)	(7.9)	(3.3)	(237.8)	
337	石 15	SD14	砥石	細粒砂岩	17.55	6.95	3.9	376.4	両側面も使用痕あり
338	石 18	SD11	砥石	流紋岩	(17.3)	(10.7)	(8.5)	(1394.8)	
339	石 17	SD14	砥石	細粒砂岩	(9.7)	(5.3)	(3.6)	(256.0)	
340	石 19	NR1 中部底面	砥石	粗粒砂岩	(6.4)	(6.0)	(2.0)	(102.1)	砂粒多く粗い
341	石 8	SD1 上層	軽石	軽石	6.5	3.2	2.6	12.05	砥石か
342	石 5	SD1 上層	敲石類	安山岩系	11.0	9.4	4.5	609.4	使用痕不明瞭
343	石 9	SD1 上層	敲石類	正珪岩	9.65	7.5	6.2	697.3	
344	石 4	SD1 上層	敲石類	細粒砂岩	9.4	3.8	3.5	170.7	
345	石 7	SD1 下層	敲石類	礫岩	(6.6)	(7.6)	4.2	(241.0)	
346	石 6	SD1 下層	敲石類	細粒砂岩	(4.7)	(5.65)	(3.6)	(125.2)	一部磨面
347	石 3	SD1 上層	敲石類	粗粒砂岩	(4.3)	(7.6)	(4.2)	(203.3)	一部黒変あり
348	石 16	SD15	磨石類	粗粒砂岩	15.0	10.7	5.6	1313	

第10表 長池カチジリ遺跡(2012)石器観察表

番号	実測番号	出土遺構	種類	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
486	石 13	SD8	打製石斧	火山礫凝灰岩	(5.85)	8.5	(2.1)	(94.3)	刃部片

第11表 横江古屋敷遺跡石器観察表

番号	実測番号	出土遺構	種類	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
495	石 14	トレンチ 1	磨製石斧	安山岩系	10.0	4.25	2.45	144.2	縄文、能登産石材か

凡例

土器 () は復元値、「 」は推定値

石器 () は現存値



調査区遠景（南から）



調査区全景（右が北）



S 1 2 (左が北)



S 1 3 (左が北)



SD1 最上層土器群 (主要部)



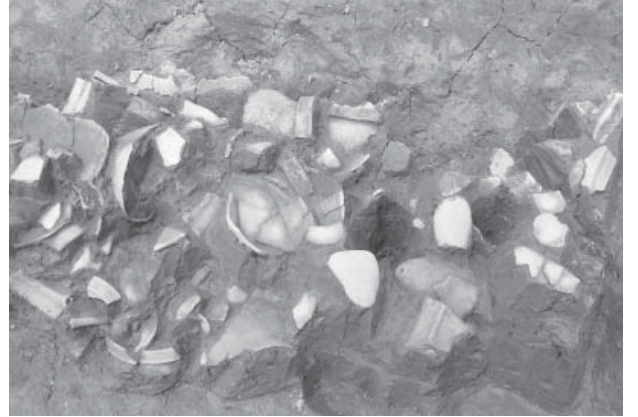
SD1 最上層土器群 (東から)



SD1 最上層土器群 (北から)

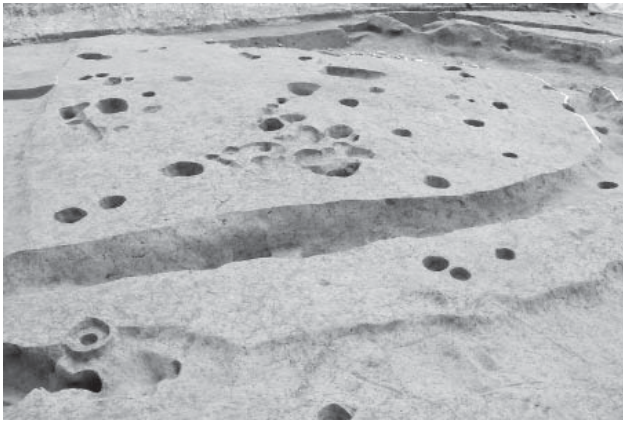


SD1 最上層土器群 (南側)



SD1 最上層土器群 (北側)

図版4 長池ニシタンボ遺跡 (2009) ④



調査区北部 (西から)



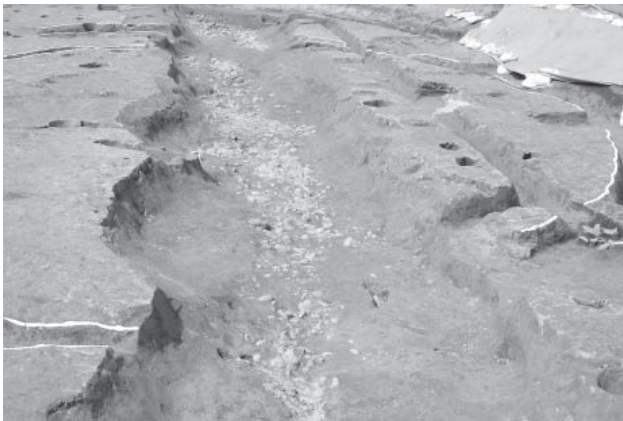
SD1土層断面



SD3土器出土状況



同左



NR1 (南から)



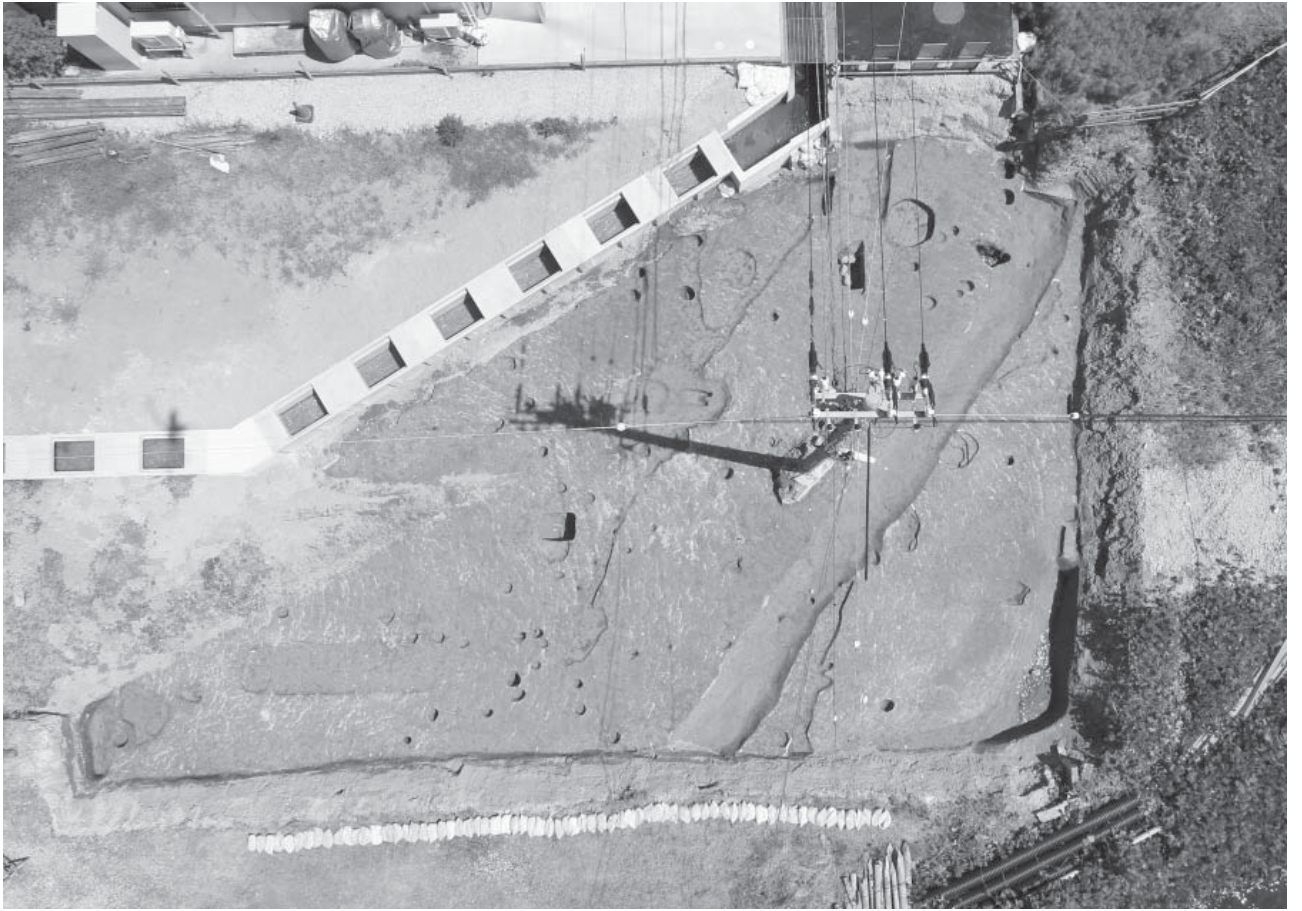
NR2たちわり



SD10・11



全景 (北から)



主要部 (上空から)



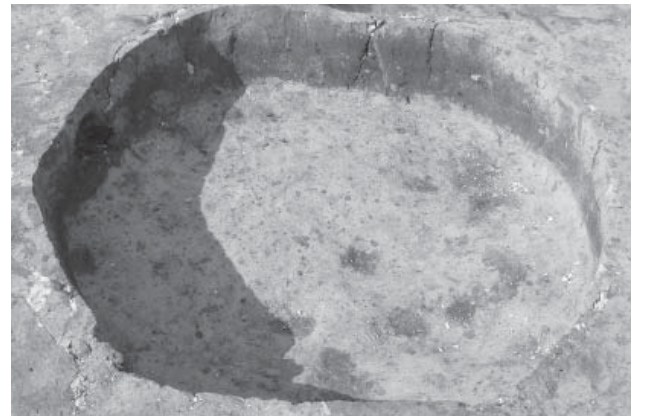
北東部 (北から)



SD 4



SK 1 土器出土状況



SK 1

図版6 長池ニシタンボ遺跡 (2013)



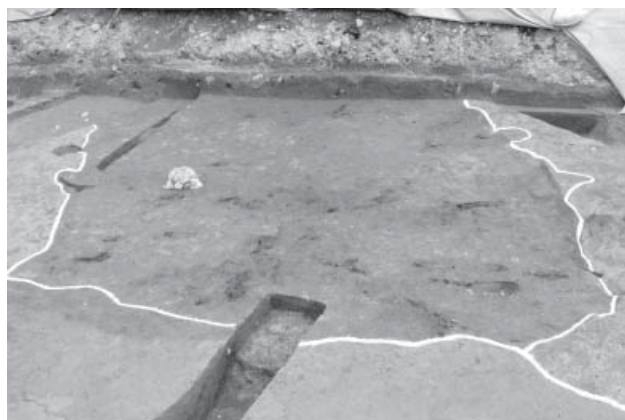
S I 1 (西から)



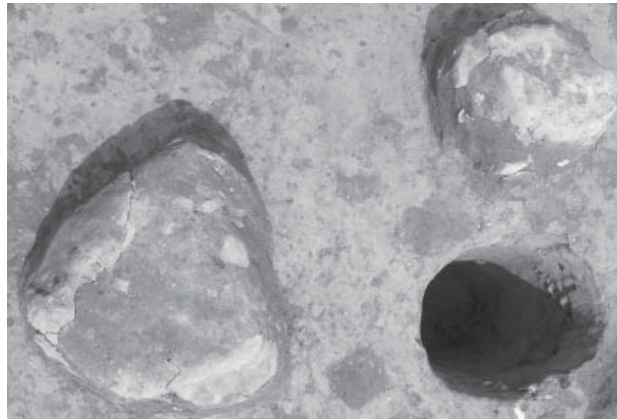
全景 (北から)



全景 (南から)



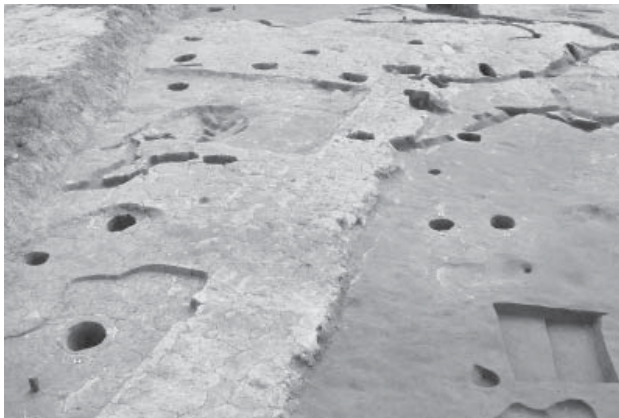
S I 1 検出状況



S I 1 炉跡



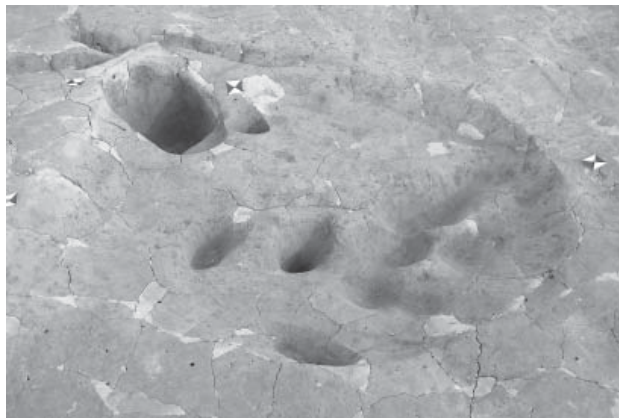
全景 (右が北)



柱穴群



P24断面



SK1



トレンチ3断面

図版8 長池カチジリ遺跡 (2012) ①



調査区全景 (南から)



調査区全景 (右が北)



調査区全景 (北から)



SD 2 土器出土状況



SB 2 周辺



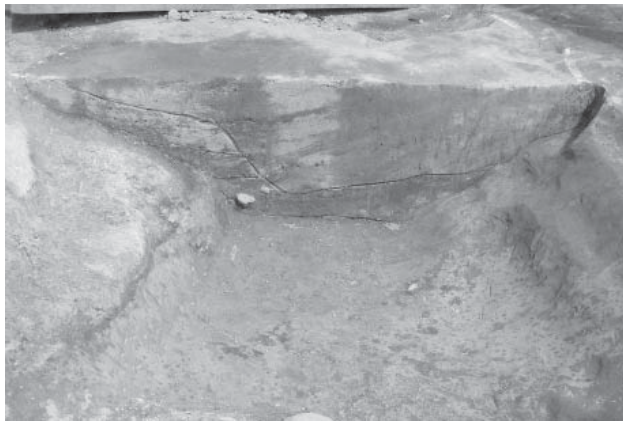
SK 2



SD 1



SD 2



SD 2 土層断面



SD 2 土器出土状況



SD 3 土器出土状況



河道トレンチ



調査区遠景（北から）



調査区全景（南から）



発掘作業風景



P 1



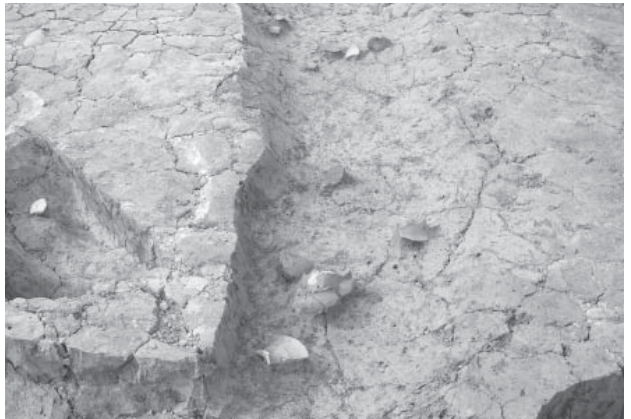
P 2



トレンチ 1



SD 2 南部



SD 2 土器出土状況



全景（南から）



全景（北から）

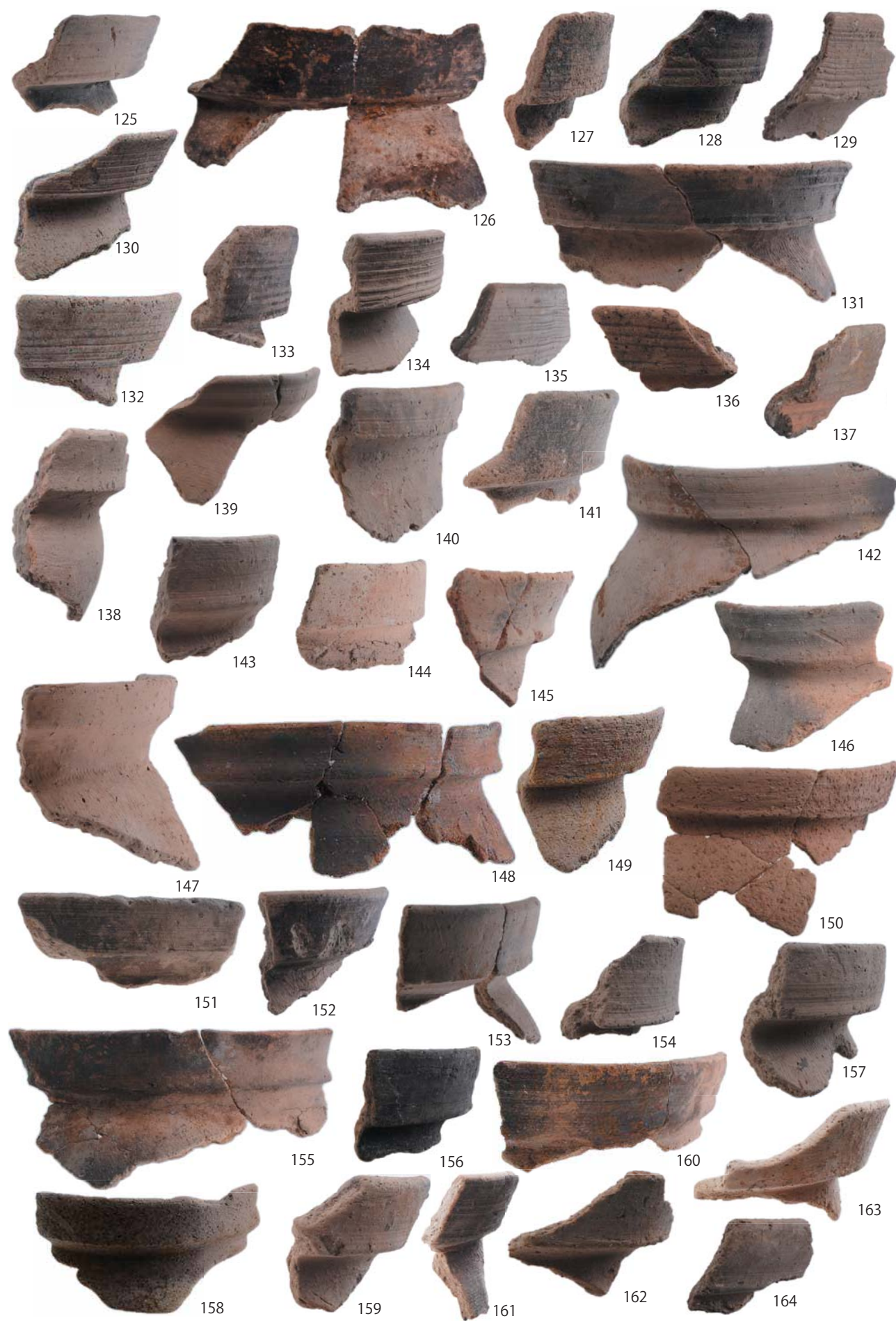


図版 14 (遺物 2)





図版 16 (遺物 4)





図版 18 (遺物 6)





図版 20 (遺物 8)



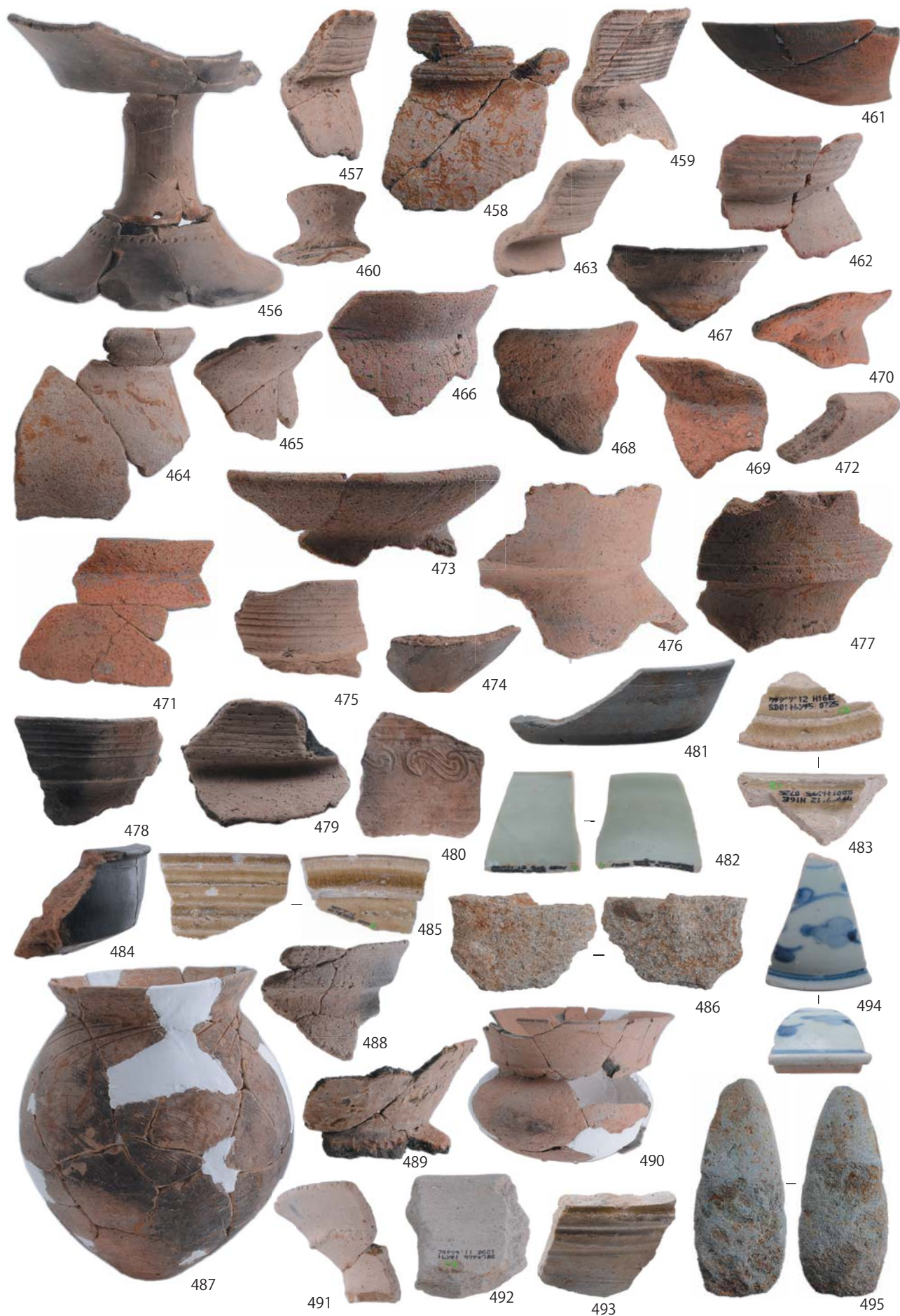


図版 22 (遺物 10)





図版 24 (遺物 12)



報告書抄録

ふりがな	ののいちし ながいけにしたんぼいせき・ながいけかちじりいせき・よこえふるやしきいせき							
書名	野々市市 長池ニシタンボ遺跡・長池カチジリ遺跡・横江古屋敷遺跡							
副書名	二級河川安原川 広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松山和彦							
編集機関	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477 FAX(076)229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成30年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながいけ 長池ニシタンボ 遺跡	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 ながいけ 長池	17212	1200600	36度 32分 33秒	136度 35分 37秒	20090415 ～ 20090702	850㎡	記録保存 調査
						20120702 ～ 20120831	240㎡	
						20130423 ～ 20130517	430㎡	
ながいけ 長池カチジリ 遺跡			1206800	36度 32分 37秒	136度 35分 55秒	20110628 ～ 20110727	560㎡	
						20120702 ～ 20120831	880㎡	
よこえふるやしきいせき 横江古屋敷遺跡						1206900	36度 32分 40秒	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長池ニシタンボ 遺跡	集落	弥生時代、 古墳時代	竪穴建物、掘立柱 建物、土坑、溝	弥生土器、土師器、 須恵器、陶磁器、 石器				
長池カチジリ 遺跡	集落	古墳時代	掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、 陶磁器、石器				
横江古屋敷遺跡	集落	古墳時代	溝、土坑	土師器、陶磁器、 石器				
要約	<p>長池ニシタンボ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物3棟・掘立柱建物1棟を検出、竪穴建物の外周溝に連結する溝においてまとまった量の土器の廃棄がみられた。</p> <p>長池カチジリ遺跡では古墳時代初頭～前期頃の掘立柱建物3棟以上を検出した。</p> <p>横江古屋敷遺跡では古墳時代前期頃の溝を確認した。</p>							

野々市市 長池ニシタンボ遺跡
長池カチジリ遺跡
横江古屋敷遺跡

発行日 平成 30 (2018) 年 3 月 23 日

発行者 石川県教育委員会

〒 920-8575 石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県中戸町 18 番地 1

電話 076-229-4477

E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷